
遊戯王5D's After ~子蟹冒険記~

キューマル式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's After ～子蟹冒険記～

【Nコード】

N2883Y

【作者名】

キューマル式

【あらすじ】

かつて、この街…いや、世界は滅びの危機に瀕していた。だが、英雄と呼ばれる男、不動遊星とその仲間たちによって世界は救われた。

そして…時は流れた。

平和な日々と幸せな日常を生きる一人の少年。

その名は、不動遊輝。

英雄・不動遊星とその妻アキとの間に生まれた、まさにデュエリストになるべくして生まれた少年である。

この物語は少年と彼を取り巻く少女たちの、平和な、そして時に危険な冒険の物語である。

注意：作者は初投稿なうえ、デュエルタクティクスは驚くほど低く文才もありません。

さらにテンプレな部分も多く面白くない部分も多々あるかもしれませんが、どうか生温かい目で見てください。

第00話 不動さんちの日常（前書き）

初投稿ですがよろしくお願ひします。

第00話 不動さんちの日常

かつて、この街：いや、世界は滅びの危機に瀕していた。だが、英雄と呼ばれる男、不動遊星とその仲間たちによって世界は救われた。

そして…時は流れた。

平和な日々と幸せな日常を生きる一人の少年。

その名は、不動遊輝^{ふどうゆうき}。

英雄不動遊星とその妻アキとの間に生まれた、まさにデュエリストになるべくして生まれた少年である。

この物語は少年と彼を取り巻く少女たちの、平和な、そして時に危険な冒険の物語である。

早朝の閑静な街を一人の少女が走る。その少女の視線は住宅街の奥の家へと注がれていた。

豪邸というわけではないが、普通よりは明らかに大きなその家。

少女は呼び鈴を鳴らすとドアを開けた。

「…おはようございます」

少女の決して大きくはない、だが良く通る声が響く。すると奥の台所から、一人の女性が顔を出した。

「あら恵ちゃん、おはよう。いつもごめんなさいね」

「…おはようございます、アキおばさま」

そういつて少女　レイン「恵はぺこりと頭を下げる。

ここはあの英雄、不動遊星一家の住む不動産だ。

今声をかけてきた女性は、不動アキ。不動遊星の妻である。

「…ユウはまだ寝てますか？」

「ええ、さつきゆまちゃんが来て起こしに行ってくれたんだけど、まだ起きてこないのよ…」

そういつてアキは呆れたようにため息をつく。

「また夜更かししてたみたいで…まったく、誰に似たんだか…」

そんな風に愚痴るアキを尻目に、恵は靴を綺麗に揃えると不動産に上がり込む。

「…私が起こしてくる」

「ええ、お願いね」

そういつて恵は迷うことなく一階の奥まった部屋のドアへとたどり着く。

「…ユウ、すでに起床時間を過ぎている」

そしてノックを数回するとドアを開けた。

部屋はパソコンが電源が入ったままで放置されており、ところどころに機械の部品が置いてある。

そしてベッドが一つに、さらに奥へと続くドアが一つ。
奥のドアからは独特の機械油の匂いが鼻についた。

「…ユウ、起きて」

ベッドに近付き声をかけるがいつころにベッドから起き上がる気配はない。

恵はため息をつくど、ふとおかしなことに気が付いた。
ベッドの膨らみがどうにも一人分とは思えない。
それに、さっきアキは何て言っていた？

「…まさか」

気付いた恵はバツと布団を跳ね上げる。
そこにいたのは一人の少年、そして…

「ふにゃ…ユウくん…」

何やら幸せそうな顔で眠る一人の少女がいた。
それを見て恵は眉をひそめる。

「…ゆま、何をしているの？」

「ふえ…あ、メグちゃんおはようございますう」

肩を揺さぶると、ゆまと呼ばれた少女は眠そうな目を擦りながら焦点の合っていない視線を恵に向けた。

「…ユウを起こしに行ったはず。なにをやってるの？」

「あー、それはユウくんを起こしにきたら…なんだか私も眠くなっ
てしまって…。」

こう、つられるように温かいユウくんの布団に入っちゃってまし
たあ」

「……」

「い、いはいれすメグひゃん！」

恵が無言でバカなことをほざく幼馴染の頬を引っ張ると、ゆまは涙
目になりながらぱんぱんと恵の手を叩く。

どうやらギブアップということらしいが、無慈悲にも恵はそのまま
捻りを加えようとしたときだった。

「ううん…」

眠っていた少年がゆっくりと目を覚ます。

無駄なものなど無いように引き締まった身体に、ちよつとワイルド
な感じの茶色い髪。

そんな外見にも関わらず、いかつい印象を与えない柔和そうな顔立
ち。

「あ、おはよう。 ゆま、恵」

笑顔と共に少年が少女たちへ朝の挨拶をする。

この少年こそ、あの英雄不動遊星とその妻アキの間に生まれた一人
息子、不動遊輝である。

「おはようございますっ、ユウくん」

「おはよう、ユウ…」

少女たちはそんな遊輝に挨拶を返す。

ゆまはニコニコ満面の笑みで。

恵はいつも通りの落ち着いた佇まいに微笑を乗せて。

これが不動家の朝の日常だった。

第00話 不動さんちの日常（後書き）

今回は、デュエル無しの導入のみです。

次回からはデュエルが始まります。

第01話 新入生代表デュエル（前書き）

今回からやっとデュエルシーンがあります。

対戦デッキは、デュエルアカデミアと言えはやっぱりアレ。

第01話 新入生代表デュエル

Side 遊輝

校長先生の長い話を、僕は直立不動で聞いていた。周りには僕と同じ制服の生徒たちが、同じように直立不動で壇上に注目している。

ここはデュエルアカデミア・ネオドミノシティ校。

その高等部の入学式の真っ最中だ。

僕は今日からこの学校に入学になる。

「うう…」

長い話と緊張で喉はカラカラだ。

というのも、僕はこの入学式で『あること』をすることになっている。

それを思うと、緊張で胃が痛い。

(早く終わってくれないかなあ…)

そんなことを思いながら、僕は周囲に視線を巡らせるとゆまと恵の姿を見つけた。

ゆまからは寝る一歩手前みたいな雰囲気がある。確実に話が左から右に抜けていってるんだろうなあ。

逆に恵は直立不動で、真面目に話を聞いているみたいだ。

ただ、いつも通り表情が変わらないからどう思ってるのか分からないけど。

そんな風に思っていると、長かった校長先生の話は終わったみたいだ。

進行役の先生の声が響く。

「では式の最後に、新入生代表によるデュエルを行う！」

…来た、出番だ。

「新入生代表、不動遊輝！！」

「はいっ！！」

緊張のしすぎか、返事の声が少し震えた。

ともすれば右足と右手が一緒に前に出そうな、ぎこちない足取りで僕は壇上へと向かって行く。

『あれが噂の…？』

『不動遊星の息子…』

微かに聞こえてくるヒソヒソ話が、さらに僕の心を重くする。

そんな中ちらりとゆまと恵を見ると、ゆまは小さくガッツポーズ、恵は小さく頷いて僕を送り出してくれた。

…おかげで少しだけ緊張がほぐれた。二人には感謝だ。

壇上では、デュエルアカデミアの実技担当教官が待っていた。

「新入生代表、不動遊輝！」

「は、はい」

改めて校長に呼ばれた名前に僕が答える。

「これより入学式の代表デュエルを行う！ 新入生代表として恥ずかしくないデュエルを行うように！！」

校長の宣言が終わり、実技担当教官が僕に話しかけてきた。

「君のことは聞いているよ、不動遊輝くん。君とはぜひデュエルしてみたかった。」

お手柔らかに頼むよ」

「はい！ おねがいします！」

そう僕が返すと実技担当教官は笑顔でデュエルディスクを構えた。それに合わせ、僕も構える。

「デュエル！！」

遊輝	LP 4000
教官	LP 4000

デュエルは教官の先攻で始まった。

「先行は私が貰う！ ドロー！！ 私は《グリーン・ガジェット》を攻撃表示で召喚！」

《グリーン・ガジェット》 星4 / 地属性 / 機械族 / 攻1400 / 守600

「その効果によって私はデッキから《レッド・ガジェット》を手札に加える。 さらに手札からフィールド魔法《ギア・タウン歯車街》を発動！」

《ギア・タウン歯車街》∴ アンティーク・ギア系モンスターをサポートするフィールド魔法。

となれば教官のデッキはアンティーク・ギアデッキなのかな？

「私のデッキはこのアカデミア教員に伝わる由緒正しきデッキだ！ さらに手札からフィールド魔法《ギア・タウン歯車街》を発動！」

その言葉に会場がざわつく。

同じカードを使ってフィールドを張りなおしたのだから普通は無駄な行動だ。

ただ《ギア・タウン歯車街》とアンティーク・ギアデッキに関してはこれは無駄でも何でもない。

「《ギア・タウン歯車街》が破壊されたことによって私はデッキから『アンティーク・ギア』と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる！」

現れる！ 《アンティーク・ギアガゼルドラゴン古代の機械巨竜》！！！！」

《アンティーク・ギアガゼルドラゴン古代の機械巨竜》 星8 / 地属性 / 機械族 / 攻3000 / 守2000

いきなりの最上級モンスターの出現に会場がざわめく。

「まだまだ！ 再び《ギア・タウン齒車街》を発動！！ 二体目の《アンティーク・ギア古代の機械巨竜》を特殊召喚！！」

私は二枚のカードを伏せる！ ターンエンドだ！！」

「「おお！！」」

1ターン目にして最上級モンスター2体を呼び出した教官の戦術に会場から歓声が上がった。

「どうだ遊輝くん、これが私の全力だ！ さあ、全力でかかってきたまえ！！」

「はい！ 僕のターン、ドロー！！」

ドローしたカードと手札…。

あ、これって…。

「僕は手札から魔法カード《ギア・タウン大嵐》を発動！」

発動した《ギア・タウン大嵐》の効果で、《ギア・タウン齒車街》と二枚の伏せカードが砕け散った。

「《ギア・タウン齒車街》が破壊されたことによって私はデッキから『アンティーク・ギア』と名のついたモンスター1体を特殊召喚する！
現れる！ 《アンティーク・ギア古代の機械巨竜》！！！！」

3体目の《アンティーク・ギア古代の機械巨竜》が召喚されるが、僕にとってはどうでもいい。

「僕は魔法カード《おろかな埋葬》を発動！ デッキから《ゾンビキヤリア》を墓地に送る！」

そして手札の《ジャンク・シンクロン》を通常召喚！」

現れる《ジャンク・シンクロン》。

父さんとずっと一緒に戦ってきた相棒であり、僕にとってもかけがえのない相棒。

僕のデッキを支える頼もしい仲間だ。

「《ジャンク・シンクロン》の効果発動。墓地の《ゾンビキヤリア》を復活させます。

同時に、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウオリアー》を手札から特殊召喚！」

僕の間には一気にチューナーを含む3体のモンスターが出そろった。

「チューナー…シンクロ召喚か…！」

「行きます！ レベル2の《ドッペル・ウオリアー》にレベル3《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

2 + 3 = 5

光の中で、モンスターの姿が輝く光へと変わっていく。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！

いでよ、《ジャンク・ウオリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》 星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1300

現れたのは鋼鉄の拳を持った戦士。僕や父さんが信頼をよせる歴戦の戦士だ。

「だが、攻撃力は2300。それでは《古代の機械巨竜》は倒せまい！」

それは分かっている。

でも、《ジャンク・ウォリアー》の効果なら！

「《ジャンク・ウォリアー》の効果発動！

《ジャンク・ウォリアー》のシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

さらに《ドッペル・ウォリアー》の効果発動！

《ドッペル・ウォリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドッペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

《ドッペル・ウォリアー》、《ジャンク・ウォリアー》の順で効果は発動します！」

場に現れる2体のドッペル・トークン。

ドッペル・トークン 戦士族・闇・星1・攻/守400

「パワー・オブ・フェローズ！」

そして2体のドッセル・トークンとゾンビキャリアから光が《ジャンク・ウォリアー》へと吸収されていく。

《ジャンク・ウォリアー》 攻撃力2300 3500

「《古代の機械巨童》の攻撃力を超えた！」

教官は驚いた様な声を上げるけど、まだ終わりじゃない。

「さらに場の2体のドッセル・トークンにレベル2《ゾンビキャリア》をチューニング！」

来い《アームズ・エイド》！！！」

1 + 1 + 2 = 4

《アームズ・エイド》 星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1800 / 守1200

「《アームズ・エイド》の効果発動！」

装備カード扱いとしてモンスターに装備、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップ。

《アームズ・エイド》を《ジャンク・ウォリアー》に装備！！！」

《ジャンク・ウォリアー》 攻撃力3500 4500

「こ、攻撃力4500だと!?!」

「行け、《ジャンク・ウォリアー》! 《古代の機械巨竜》に攻撃
!!

パワーギア・フィスト!!」

(ハア!!)

雄叫びと共に飛びかかった《ジャンク・ウォリアー》が、《古代の
機械巨竜》に拳を叩きつけた。

機械の身体にひびが入り、《古代の機械巨竜》が砕け散る。

「くっ!?!」

教官

LP4000 2500

「さらに《アームズ・エイド》の効果発動!

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った
時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与え
ます!」

「何!?!」

「《古代の機械巨竜》の攻撃力は3000。 3000ダメージを
受けてもらいます!」

「う、うわあああ!!」

教官

LP25000

デュエル終わると、入学式場は大歓声に包まれていた。とはいえ、実は僕の方が驚いていたりする。

手札が良くて一撃必殺、1ターンキルしてしまった…。心なしか落ち込んでる教官を見ると、ちょっと悪いことしたかなと心の片隅で思う。

「君は強いな。私の完敗だ」

「いえ、運が良かっただけです」

「いや、君の実力だよ。」

さすが、あの不動遊星の息子だ」

「…」

教官の賞賛の言葉に僕は、『ああ、またか』…と黙ってしまった。この人は僕とデュエルしたんじゃない。

『英雄・不動遊星の息子』とデュエルしたのだ。

いつものこととはいえ…嫌な気分になってしまう。

僕はひそめた眉を気付かれないようにしながら、ゆっくりと席へ戻っていく。

『さすが不動遊星の息子』

『すっごーい、デュエルの腕も親譲りなのね』

「……」

そこかしこで囁かれるヒソヒソ話。

さっきまでのデュエルの興奮は僕の中には無く、僕は努めて無表情で席に戻った。

つつがなく式が終わりすでに解散の時刻になった頃、僕は校庭側の芝生に寝転がってゆまと恵のことを待っていた。

さっきまで父さんや母さんと記念写真を撮ったけど、どうやら父さんたちは他の人たちと話をするらしく、帰りは僕たちだけだ。

しばらくするとゆまと恵が手を振りながらやってきた。

「おまたせです、ユウくん」

「おまたせ、ユウ……」

「ううん、全然待ってないよ」

そうやって立ち上がろうとしたら、二人が僕の顔をじっと見つめてきた。

「な、何？ 何か僕の顔についてる？」

「ユウくん、なんだか『満足できねえぜ！』って顔してますです！」

いや、僕は鬼柳おじさんじゃないから。

「…ユウ、さっきのデュエルは楽しめなかった？」

恵の言葉に僕は首を振った。

「とんでもない。あの教官は立派なデュエリストだった。

そんな人と、全力を出すデュエル自体には満足してるよ」

「…やっぱり周りが不満？」

そうやって恵は心配そうに、幼馴染の僕にしか分からないくらいほんの少し眉をひそめる。

みると、同じようにゆまも僕を見ていた。

「…やっぱりずっと一緒にいた幼馴染だ。すっかり僕の心なんてバレている。」

「いつものことだけど…僕の名前は不動遊輝であって、『不動遊星の息子』とか『英雄の子』とか言う名前じゃないんだけどね。」

なんで…みんな分らないんだろうね」

それは僕の物心ついたところからの悩みだった。

僕は『英雄・不動遊星』の一人息子だ。

父さんが立派なのはよく知っているし、僕だってそんな父さんを尊敬し憧れてる。

でも、誰もかれもが父さんを通してしか僕を見てくれないということには忸怩たる思いがあるのも隠せない事実だった。

そんな風に考えていたら、僕はいつの間にか手を取られていた。右手はゆまに、左手は恵に。

そして二人は僕に、優しく語りかけるように言う。

「大丈夫、ユウくんはユウくんです！」

「ユウは私たちの幼馴染、不動遊輝。それ以外の誰かでは決してない……」

「ゆま…恵……」

そっだ、この二人はいつだって僕、不動遊輝を見てくれる。他の誰でもないこの僕を…。

そう思うと、スウッと胸のつかえが取れていくように軽くなる。

「帰ろっか？」

「はい！」

「うん……」

二人は頷くと、僕たちは連れだって家路へとつく。

こうして、僕のデュエルアカデミアへの入学初日は過ぎていった。

不安はあるけれど、この二人と一緒になら大丈夫…そんな風に、僕は

思った。

「これからの騒がしい日常と、非日常のことなど夢にも思わず」…。

……T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまとー！」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「ここでは今回もっとも活躍したカードを紹介するんです！」

恵「今回のカードは…これ」

《ジャンク・ウォリアー / Junk Warrior》

シンクロ・効果モンスター

星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1300

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

ゆま「始まりのシンクロカードであり、遊星おじさんの相棒ですね！」

恵「《ジャンク・シンクロン》が使いやすいため、とても出やすい…。

特にユウのような『ジャンクドッペル』に属するデッキだと、今回のように攻撃力3100になることが多い。

3100…この数値は重要」

ゆま「最上級モンスターの攻撃力基準値3000を1000上回っています。

攻撃力3000のモンスターを一方向的に戦闘破壊できるのは凄いですう！」

恵「効果なしでも《A・O・Jカタストル》を一方向的に倒せるのもいい。

もつとも、それだけなら《TGハイパー・ライブラリアン》の方がいいけど…」

ゆま「今回はここまでです！」

恵「また次回…」

第01話 新入生代表デュエル（後書き）

ごめんなさい、ワンキルです。

LP4000の戦いは難しい…今後もっと精進が必要ですね…。

第02話 結成、ライディングデュエル同好会（前書き）

今回の対戦デッキは、プロなデッキ。

自分で作って、まわすのが難しくてびっくりしました。

第02話 結成、ライディングデュエル同好会

Side 遊輝

僕は今、アカデミア内のデュエルスペースに立っている。

「さあ、来な。ボウズ！」

そして目の前に立っているのは、このアカデミアの教師であり元プロデュエリストのケイト＝モヘア先生だ。

「…どうしてこうなるの？」

僕は小さくため息をついた。

事の次第は数時間前のことだ。

入学してからすでに1週間、学園生活にも慣れ始めた僕たち3人はかねてからの希望を叶えようとしていた。

それは部活動、ライディングデュエルの部活だ。

父さんの影響もあって、僕はライディングデュエルに興味があった。父さんが戦ったスピードの世界、いつかそこに飛び込んでみたい…そんな思いを僕は持っていた。

ゆまや恵もライディングデュエルには興味があるらしい。

そこがかねてから高校に入ったら一緒にライディングデュエルをやるうと約束をしていたのだ。

そのための準備は万全。

僕と恵はすでにライセンス取得済で、ゆまは勉強中。

僕はこの間の誕生日に父さんからDホイールを貰ったし、恵は僕と一緒にジャンクからDホイールを一台完成させた。

ゆまが一步出遅れてる感じだけど、ゆまのDホイールだって今ジャンク品をかき集めて作ってる真っ最中。

休日は三人で教習所で練習用のDホイールを動かし、特訓にも余念がない。

そう、全ては万全のはずだったんだけど…。

「…ない。ライディングデュエル部が無くなってる!？」

僕は愕然としながら、部活動の案内をまじまじ見つめる。

でも、どこをどう見てもライディングデュエル部は見つからない。

おかしい、確か3年前の学園祭の時にはあったはず。

その時のライディングデュエル部の公開デュエルを3人で見たから間違い無い。

「部員さんが居なくなっって廃部になっちゃったんでしょうか？」

「うーん…」

ゆまの言葉に僕は首をひねる。

ライディングデュエルは世界的に人気があるんだし、入部希望者が少ないとは思えないんだけど…。

「どちらにしろ、無いことは事実。ユウ、どうするの…?」

「そんなこと言われたって、無いものはどうしようもないよ…」

恵の言葉に、僕は肩を落とす。

学外のライディングデュエルチームに入るといふのは正直避けたい以前、僕の『不動遊星の息子』というネームバリューを欲しがったチームに勧誘され、手ひどい目にあっているからだ。そうなれば部活が一番なんだけど…。

「はあ…」

何だか学園生活の第一歩にしかけられた奈落の落とし穴にはまった感じだ。

すると、ゆまが突然大きな声を出した。

「そうです！ 逆に考えるんです！ 無くたっていいさって考えるんです！」

「…ゆまが何をいつてるのか僕にはわからないよ」

「えーと、とどのつまりですね…別に無いなら無いで、作っちゃえばいいんです！…」

びしりと指さしながらゆまが言う。

どうでもいいことだけど、人を指さすのはあんまりお行儀がいいことじゃないよ、ゆま。

「そんな無茶苦茶な…」

「…待つて。ゆまの意見、あながち間違いではない…」

恵は何やら考えながら、部活動の案内を見はじめる。

「やはり。部としては無理でも、同好会としてなら立ち上げは可能……」

「本当!？」

僕の言葉に、恵はコクンと頷く。

「新規同好会立ち上げの条件は、希望生徒3名以上。そして……顧問となる教師の存在……」

「顧問の先生か……」

この学校、部活動は結構盛んだから顧問になってない先生なんているのかな……?

すると、隣でPDAを操作していた恵が言ってくる。

「該当者が一人だけいる……」。

実技担当ケイト「モヘア先生……」

「そうと分かれば全速前進、ですう!!」

言うのが早いか、ゆまは僕の手を引いて職員室へと走り始めた。

「はあ？ アタイに顧問になってくれって？」

「はい…」

うう…なんか睨むみたいに僕のこと見てくるよ。
僕なんかやったかな？

「オマエら、ライディングデュエル同好会を作ろうって？」

「はい！ 私たちライディングデュエルをしたいんですう！！！」

ゆまの答えに、ケイト先生は何やら頭をぼりぼりと掻きながら思案顔だ。

やがてケイト先生が口を開く。

「それじゃ、ボウズ。 アタイとデュエルだ。」

お前がアタイに勝ったら、顧問になってやるよ。 それでどうだ
い？」

「って僕ですか？」

「オマエ以外に誰がいるってんだ？」

それに…デュエルに強くなきゃ、ここでライディングデュエルな
んて出来はしないよ」

え？

ケイト先生、いましんみりとした雰囲気で妙なことを言ったよ。
強くないとライディングデュエルが出来ないって、一体…？

「とにかく、だ！ 顧問になって欲しけりゃアタイにデュエルで勝負ことだね！！」

そして冒頭へと戻るといふ訳だ。

「デュエル！！」

遊輝 LP4000

ケイト LP4000

先攻は僕だ。

「僕のターン、ドロー。モンスターを裏守備表示で召喚、伏せカードを1枚伏せてターンエンド」

「アタイのターン、ドロー！ まず手札から魔法発動^{サイクロン}。伏せカードを破壊する！」

「ミラーフォースが…」

「アタイは《俊足のギラザウルス》を召喚」

《俊足のギラザウルス》 星3 / 地属性 / 恐竜族 / 攻1400 / 守400

「さらにアタイは《俊足のギラザウルス》を手札から特殊召喚。こいつを特殊召喚する場合、相手は墓地に存在するモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

でも今あなたの墓地はゼロ。復活はできないよ」

実質ノーコストで特殊召喚をされてしまった。

「バトルだ。 《俊足のギラザウルス》で攻撃」

「このカードは《ライトロード・ハンター ライコウ》。

効果によって僕は攻撃前の《俊足のギラザウルス》を破壊し、自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送ります」

落ちたカードは《ダーク・アームド・ドラゴン》と《ライトロード・マジシャン ライラ》に《グローアップ・バルブ》。

《グローアップ・バルブ》が落ちたのは嬉しい。

「ちい、アタイはカードを3枚伏せてターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！」

ケイト先生の場合は攻撃表示の《俊足のギラザウルス》1枚に伏せカードは3枚…守りとしては鉄壁だ。

僕の手札に除去系カードは無い。

除去系カードが来るまで待つか：いや、ケイト先生の手札はゼロ。
ここは臆せず攻めよう！

「手札から魔法発動、《死者蘇生》。墓地の《ライトロード・マジシャン ライラ》を特殊召喚」

《ライトロード・マジシャン ライラ》 星4 / 光属性 / 魔法使い
族 / 攻1700 / 守 200

「さらにデッキトップのカードを一枚墓地へ送ることで墓地の《グローアップ・バルブ》を特殊召喚」

《グローアップ・バルブ》 星1 / 地属性 / 植物族 / 攻 100 /
守 100

墓地に送られたのは2枚目の《ライトロード・ハンター ライコウ》。
よし、これで父さんの友達のカードが召喚できる。

「レベル4の《ライトロード・マジシャン ライラ》に、レベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

4 + 1 = 5

「集いし英知が、未来へ続く懸け橋となる！ 光さす道となれ！
シンクロ召喚、《TGハイパー・ライブラリアン》！！！」

《TGハイパー・ライブラリアン》 星5 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2400 / 守1800

「おっと、トラップ発動！ 《奈落の落とし穴》！」

ああ、《TGハイパー・ライブラリアン》が：やっぱりそんなに甘くはないよね。

でもこれで場の伏せカードは2枚、臆せず攻める。

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚。

《ジャンク・シンクロン》の効果発動。墓地の《ライトロード・ハンター ライコウ》を復活させます。

レベル2の《ライトロード・ハンター ライコウ》にレベル3《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

2 + 3 = 5

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！

いでよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》 星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1300

「バトル！ 《ジャンク・ウォリアー》で《俊足のギラザウルス》

を攻撃！」

「くっ！」

ケイト

LP4000 3100

攻撃が通った？

てつきり伏せカードはミラーフォースか何かだろうと踏んでいただけ…。

攻撃反応型のトラップじゃないとしたら、あのカードは一体？

「僕は一枚カードを伏せて、ターンエンド」

「おつとそつちのエンドフェイス時に伏せカードを発動させてもらうよ。速攻魔法《終焉の焰》！」

ケイト先生の場に黒い焰のトークンが2体現れた。

あのトークンは呼び出したターンはリリース出来ない。

だが今のタイミングで発動なら、次のケイト先生のターンリリース要員として活用できる。

なら…次のターン最上級レベルのモンスターが出せる。

でも、大丈夫。

今伏せたカードは《次元幽閉》。どんなモンスターでも次元の彼方に吹き飛ばしてやれる。

《ジャンク・ウォリアー》だっているんだ、そう簡単には貫けないはず。

それにケイト先生の手札はゼロ。そうそう都合よく切り札を引けるとは…。

「アタイのターン！ ふっ…」

カードをドロ―した先生が、笑った。
ということは切り札を引いたんだろっか。

「やっぱり勝利の運命はいつだってアタイの手の中に来るもんだね！
アタイは手札から《E・HERO エアーマン》を召喚！

効果によりアタイはデッキから「HERO」と名のついたモンス
ター1体を手札に加える。

アタイが手札に加えるのは…《D・HERO BLOOD・D》！
！」

S i d e o u t

S i d e ゆま

「アタイが手札に加えるのは…《D・HERO BLOOD・D》！
！」

はう、あのカードは！

昔、おじいちゃんから聞いたことがあります！

おじいちゃんの友達の大事なエースカードで、その友達が大きなデユエル大会で入賞した際に僅か数枚だけ量産されたとんでもないレアカードですう！
あんなレアカードがケイト先生のエースだなんて…。

「あれは不味い…」

メグちゃんが隣で渋い顔で呟きます。

私も同じ気持ちです。だってあのカードの効果は強力なんだもの。

「場の黒焰トークン2体と《E・HERO エアーマン》の合計3体をリリースし、手札から《D・HERO B L O O - D》を特殊召喚！

来な、 B L O O - D ! ! 」

《D・HERO B L O O - D》 星8 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1 9
00 / 守 600

(オオオオオオオ)

悪魔のような羽をもったHEROがユウくんに威嚇するように雄叫びを上げます。

「《D・HERO B L O O - D》の効果発動！

相手モンスター1体を指定してこのカードに装備し、装備したモンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。

《ジャンク・ウォリアー》を吸収、クラブティール・ブラッド！」

ユウくんの《ジャンク・ウォリアー》が《D・HERO B L O O

- D》の羽の中に吸収されちゃいました。

蠢く羽が…うう…なんだか気持ち悪いですう…。

《D・HERO B100-D》 攻撃力1900 3050

「バトル！ B100-Dでダイレクトアタック！！

ブラッディ・フィアーズ！！」

「トラップ発動！ 《次元幽閉》！！」

B100-Dの前に次元の割れ目が現れて、B100-Dを吸い込もうとします。

さすがユウくん、しっかり防御のカードを伏せてたんですね。そう私がホツとしたその時です。

「させるかい！ カウンタートラップ発動、《神の宣告》！！」

ケイト

LP3100 1550

B100-Dを吸い込もうとしてた次元の割れ目がパリンと言う音とともに割れちゃいました。

これでユウくんを守るものは何ありません。

「うわああ！！」

遊輝

LP4000 950

大きくライフを削られて仰け反るユウくん。

「く…でも、この瞬間僕は手札から《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚する」

《冥府の使者ゴーズ》 星7 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2700 / 守2500

ユウくんはこの状況でも強力なモンスターを呼び出しました。

でも、本来なら一緒に現れるはずの「冥府の使者カイエントークン」は出てきません。

これがBlood-Dのもう一つ的能力、存在するだけで相手のモンスター効果を無効にする能力です。

似たような効果に罫の《スキルドレイン》があるけど、Blood-Dは相手の効果だけを無効にすることができます。

つまりユウくんはモンスター効果が使えず、ケイト先生はモンスター効果が使いたい放題なんです。

「不味い…ユウのデッキはモンスター効果に多くを依存している。それが使えないとなると、Blood-D1体に場を制圧されかねない…」

メグちゃんが言う通りだ。

「ユウくん…」

私は戦うユウくんの勝利を祈ることしかできないです…。

Side out

マズい。本当にマズい。
モンスター効果封じとなれば、トラップや魔法で戦うしかない。
でも今の僕の手札にはそれは無い。いるのはモンスターカードのみ
だ。

このままだと負ける。
負けたら…3人で一緒にライディングデュエルをしようって約束が
守れない!?

「僕のターン!」

カードたちよ、僕に勝利のカードを!

「ドロオオー!!」

引いたカードをゆっくりと見る。それは…。

「行きます、ケイト先生!!」

「来な、ボウズ! アタイの勝利の運命、打ち砕いて自分の力を見
せてみる!!」

それぐらい出来なきゃ、認めてはやれないよ!」

なら、このカードで認めてもらいます!

「僕は魔法カード《禁じられた聖杯》を発動! 対象は: 《D・HERO Blood-D》!」

《禁じられた聖杯》はエンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力を400ポイントアップし、効果を無効化できる。

これでエンドフェイズまで僕もモンスター効果を使えるようになった。

それに、効果によって装備されていた僕の《ジャンク・ウォリアー》は破壊され攻撃力が落ちる。

《D・HERO Blood-D》 攻撃力3050 2300

「くっ…効果封じかい。

でも、それだけじゃアタイのBlood-Dをぶち抜いてライフをゼロにはできないよ!」

確かにその通り、Blood-Dはゴーズで倒せる範囲内に入ったがそれでもライフは1000以上残る。

通常召喚でそれ以上の攻撃力のモンスターを出せればそれでいいが、生憎そんなモンスターは手札にいない。

なら、Blood-Dを倒すだけか?

答えは否!

ケイト先生は強力なデュエリストだ。

1ターンでも与えたらそれこそまた起死回生の一手を打ちかねない。このターンで、間違い無く決着をつける!!!

「僕は手札から《スポーア》を召喚！」

《スポーア》 星1 / 風属性 / 植物族 / 攻 400 / 守 800

「レベル7の《冥府の使者ゴーズ》にレベル1《スポーア》をチュ
ーニング！」

7 + 1 = 8

「集いし鋼が、新たな命となつて動き出す！ 光さす道となれ！！
シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻280
0 / 守2000

そこに現れたのはガラクタを継ぎ合わせた龍だった。

父さんや母さんのドラゴンのような綺麗さはない。

でも…僕はこいつが大好きだった。大事な僕の相棒の1枚だ。

「墓地の《スポーア》の効果を発動、《グローアップ・バルブ》を
除外し《スポーア》のレベルをその分だけ上げて特殊召喚。

そして《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！1ターンに1度、
自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して互
いに破壊する事ができる！

選択するのは《スポーア》ともちろん《D・HERO BLOO
-D》だ！

ダストブレイズ！」

《スクラップ・ドラゴン》からくず鉄混じりのプレスに巻き込まれ、
《スポーア》と《D・HERO BLOO-D》が碎け散る。

これでケイト先生を守るものは何もない！

「《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！ スクラップ
デスバーナー！！」

《スクラップ・ドラゴン》からブレスが吐き出される。
放っている《スクラップ・ドラゴン》の方が吹き飛ばしてしまうんじ
やないかと思えるほどの勢いだ。

「うわああああ！！」

ケイト

LP15500

「アタイの負けだ。 約束通り、アンタたちのライディングデュエ
ル同好会の顧問になってやるよ」

それから一週間後、僕たちは部室棟の一番隅に看板をたてかけてい
た。

『ライディングデュエル同好会』と書かれたその看板に嬉しさがこ
み上げる。

本来、同好会はまともに部室など与えられないらしいけど、ケイト

先生が色々掛け合ってくれたそうだ。
ただ、そのことでお礼をした時にケイト先生は不思議なことを言っていたのを覚えている。

「ボウズがデュエルで勝つたんだから、礼はいいさ。

アタイも楽しいデュエルが出来たしね。

全く、こういうのがあるから教師ってのはプロより面白い。

それに…顧問は『2度目』だしね」

『2度目』って、一体何が2度目なんだろう？

それに『強くないとライディングデュエルが出来ない』って言うていたのは一体…？

色々考えることはあるけど、僕たちは目標の第一歩を踏み出したのだった。

…T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまとー！」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「今回は色々な強力カードが出てきました！私、興奮しっぱなしですよ！！！」

恵「ゆま、落ち着いて。今回のカードは…これ」

《スクラップ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8/地属性/ドラゴン族/攻2800/守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して発動する事ができる。

選択したカードを破壊する。

このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する

「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

ゆま「作者の好きなカードで、ユウくんの頼もしい相棒、切り札の1体ですね！」

恵「《スターダスト・ドラゴン》と並んでレベル8シンクロの代表格に上げられるこのカード…。とても強力…」

ゆま「攻撃力も頼もしい2800、効果は案外コスト高いように見えるけど各種トークンや《レベル・ステイラー》などの蘇生可能モンスター、

さらにシンクロして場に残った 《リビングデッドの呼び声

《などで効果発動には案外困らないです！》

恵「単純に手札のカードが単体除去に変換できると考えると、その優秀さが分かる…」

ゆま「後半の効果は専用のスクラップデッキを組んでいないとあんまり発動しないです。

これで《ギガンテック・ファイター》さんみたいに『シンクロモンスター以外』の一言が無ければ最高だったんですが…」

恵「ゆま、それはただの壊れカードになる…」

ゆま「今回はここまでです！」

恵「また次回…」

第02話 結成、ライディングデュエル同好会（後書き）

友人に指摘されましたが、一部プレイングおかしいですね。
ライラ出したとき、効果使えばもっと簡単だったと後で気付きました。

2011/11/9

デュエルでの間違いを訂正。

Bloo-Dのあたりで勘違いをしていました。

第03話 風の中にある太陽（前書き）

今回は試験的な内容のデュエルですが…先に謝ります、ワンキルです。

本当にあのカードは鬼だ…。

第03話 風の中にある太陽

Side ゆま

今日は休日、私はユウくんのところに行ってみるとユウくんはガレージでDホイールを組み立ててる真っ最中でした。

「こんにちわです、ユウくん」

「ああ、ゆま」

顔を上げたユウくん。少し疲れたように見えるところをみるとまた夜更かししたんですね。

それでも心底楽しそうな笑顔を見せてくれて、ドキッとしちゃいます。

「また夜更かししたですね。駄目ですよ、ユウくん」

「あはは…ちょっと作業に熱が入っちゃって」

ユウくんの頬についた機械油の汚れをハンカチで拭いてあげながら言うと、ユウくんは照れたように笑いました。

「ゆまは何しに？」

「私も作業見たいなって思って来ました」

「そうだね。なんたって…ゆまのDホイールなんだし」

そう、今ユウくんが組み立ててくれるのは私のDホイールです。私一人Dホイールがないって話をしてたら、ユウくんが手作りしてくれることになったんです。

アルバイトで、こつこつためたお小遣いも大盤振る舞い。でも普通のDホイールと比べたら格安で…本当にユウくんには感謝です！

「でも、これ以上は作業はできないよ」

「？ どうしたんですか？」

「必要なパーツがないんだ。だからこれからサテライト地区のジャンク市まで買い出しに行こうかと思って…」

「あ、それなら私も行きたいですっ！」

こうして、私はユウくんと一緒に出かけることになりました。

エンジンをスタートさせたDホイール　ユウくんの誕生日に遊星おじさんから贈られたDホイールと一緒に乗り込みます。

これってちょっとしたデートですよ、うれしいです！

ジャンク市場での買い物を済ませ、遅めの昼食をとハイウェイのサービスエリアへ入った時でした。

「これでゆまのDホイールも完成に近付くね」

「はい！　うれしいです！！」

今日買ってきたパーツで私のDホイールがまた完成に近づきました。ユウくんもメグちゃんと一緒にDホイールで走るのが今から楽しみです。

今思えば…そんな風に浮かれていたのが悪かったです。

ドンッ

「きゃっ！？」

浮かれた私は誰かにぶつかって尻もちをついちゃいました。

「いたた…」

「おいっ！」

「ひう！？」

腰をさすりながら立ち上がろうとすると、怖い顔の2人組に睨まれてしまいました。

見ると手にしていた飲み物がこぼれて、怖い顔の人にかかっちゃってます。

「てめえのせいで服がよごれたじゃねえか、どうしてくれるんだよ」

「い、ごめんなさいですう！」

慌てて立ち上がった私は怖い顔の人たちに謝ります。

「あの、汚れた服はクリーニングしますから…」

「ああ、足りねえよ。それじゃ…」

そう言ってニヤリと笑うと、怖い顔の人たちは私に手を伸ばしてきました。

その時です。

スッ

「ユウくん！」

ユウくんが私を庇うように間に割り込んできました。

「なんだてめえは」

「この子の友達です。あ、ゆまが服を汚しちゃったことは謝ります。」

服もしっかり洗ってお返ししますから……」

「だからそれじゃ足りねえって言ってるんだよ」

「じゃあ、何をすればいいんですか？」

「なあに、そこの嬢ちゃんにちょっと付き合ってもらえればいいんだよ」

そう言っつてニヤニヤ笑いながら、すごく嫌な視線で私を見ます。

「あう……」

その粘つくような視線から逃げるように、私はユウくんの背中に隠れちゃいました。

そんな私に、ユウくんは囁きます。

（大丈夫だよ）

そのたった一言が、怖くて震えそうだった心を支えてくれました。

「さあ、わかったらとっとその嬢ちゃんをこっちに渡しな！」

「嫌だ、っていったらどうなります？」

「なんだと？」

「確かに不注意で服を汚したのはゆまですが、それでゆまを連れていく理由にはなりません。」

「この行為、下手をしなくても脅迫ですよ。」

「…おい、小僧。 女の前だからって見栄張ってんじゃねえぞ！」

今にも飛びかかって来そうな雰囲気怖い人たちに、ユウくんはデュエルディスクを構えました。

「おい…デュエルしろよ。」

「なにに？」

「あなたたちもDホイラーなんでしょ？
ならデュエルで決めましょう。 僕が勝ったら、僕たちの謝罪を受け入れて服のクリーニングで許して下さい。」

「あはは、おもしれえ！ ならアンティはお前のデッキとその女だ！」

ユウくんが私に振り返りました。

ユウくんには私は頷きます。

私は…ユウくんのことを信じます！

「…わかりました。」

「じゃあ、ルールはバトルロイヤル形式。 俺たちは二人で行かせ

てもらっぜー!」

「…いいでしょう。そのかわり、先攻は貰います」

ルール

- ・LPは全員4000。
- ・場、墓地、除外ゾーンはお互いに独立。干渉しない。
- ・全員1ターン目は攻撃できない。
- ・順番は遊輝 不良1 不良2

「『デュエル!!』」

遊輝	LP4000
不良1	LP4000
不良2	LP4000

「僕のターン、ドロー。手札から《光の援軍》を発動。デッキの上からカードを3枚墓地へ送って、手札に《ライトロード・ハンター ライコウ》を加えます。

モンスターを裏守備表示で召喚。

さらに手札から《おろかな埋葬》を発動。デッキから《グロー

アップ・バルブ》を墓地に送りターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

《切り込み隊長》を召喚。そして効果により手札からもう一枚《切り込み隊長》を召喚！

永続魔法《強者の苦痛》発動。カードを一枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー。」

《切り込み隊長》を召喚。そして効果により手札からもう一枚《切り込み隊長》を召喚！

カードを一枚伏せてターンエンドだ」

「うわあ……」

私は思わず呻いてしまいました。

二人とも、《切り込み隊長》によるロック効果を発動しています。

これでユウくんはどちらにも攻撃が出来なくなっていました。

よしんばロックを砕いても《強者の苦痛》があります。生半可なモンスターでは太刀打ちが出来ません。

そして2枚の伏せカード…まさに鉄壁の布陣です。

私は少しだけ不安になってユウくんの方を見ました。

すると…ユウくんはただ静かに、目の前だけを見つめていました。

そこにいつもの優しい顔はありません。

戦いに臨むデュエリストの顔、私の大好きなユウくんがそこにはいませんでした。

それをみて私は安心しちゃいました。

大丈夫、ユウくんは絶対に勝つ。だってあんなに本気になっているユウくんが、一度だって負けたことはないんだから。

「僕のターン、ドロー！」

…僕は手札から《大嵐》を発動します」

《強者の苦痛》と2枚の伏せカードが砕けていきます。

伏せカードは《奈落の落とし穴》と《グラヴィティ・バインド・超重力の網》でした。

危なかったですう。

すると、ユウくんはニヤリと笑いながらこんなことを言いました。

「悪いけれど…このターンで少なくとも一人は脱落してもらいますよ！」

「なにい！」

この言葉には私も驚きました。

未だ《切り込み隊長》のロックは健在の上、二人とも無傷の状態。ここから一気にライフを削りきるなんて…。

そんな私たちの前でユウくんは動き出します。

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚

《ジャンク・シンクロン》の効果発動。墓地の《グローアップ・バルブ》を復活させます。

同時に、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウオリアー》を手札から特殊召喚！

そして場のモンスターをリバース、《ライトロード・ハンターライコウ》の効果発動。

効果によって僕は《切り込み隊長》を破壊し、自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送ります」

これで一人目のロックは崩れました。

「レベル2の《ライトロード・ハンター ライコウ》とレベル2の《ドツペル・ウォリアー》に、
レベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

2 + 2 + 1 = 5

「集いし英知が、未来へ続く懸け橋となる！ 光さす道となれ！
シンクロ召喚、《TGハイパー・ライブリアン》！！！」

《TGハイパー・ライブリアン》 星5 / 闇属性 / 魔法使い族 /
攻2400 / 守1800

「《ドツペル・ウォリアー》の効果発動！」

《ドツペル・ウォリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドツペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる」

ユウくんの場合にドツペル・トークンが2体現れた。

「デッキトップのカードを一枚墓地へ送ることで墓地の《グローアップ・バルブ》を特殊召喚」

《グローアップ・バルブ》 星1 / 地属性 / 植物族 / 攻 1000 /
守 1000

「レベル1ドッペル・トークンにレベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

1 + 1 = 2

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》！」

《フォーミュラ・シンクロン》 星2 / 光属性 / 機械族 / 攻 20 / 守 1500

「《フォーミュラ・シンクロン》と《TGハイパー・ライブラリアン》の効果によってカードを2枚ドロ！」

さらにレベル1ドッペル・トークンにレベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！来い《アームズ・エイド》！！！」

1 + 1 + 2 = 4

《アームズ・エイド》 星4 / 光属性 / 機械族 / 攻 1800 / 守 1200

「《TGハイパー・ライブラリアン》の効果によってカードを1枚ドロ！」

すごい、あつという間にシンクロモンスターを3体も召喚した。
加えて3枚のドローで手札も万全。でもユウくんはまだ止まらない。

「続けてレベル5《TGハイパー・ライブリアン》にレベル2の
《フォーミュラ・シンクロン》をチューニング！」

2 + 5 = 7

「集いし鋼が、悪魔となつて呪いを降らす。光さす道となれ！シン
クロ召喚！降誕せよ、《スクラップ・デスデーモン》！」

《スクラップ・デスデーモン》 星7/地属性/悪魔族/攻270
0/守1800

「まだまだ！ 手札から魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動。
手札からモンスター1体を墓地へ送つて、手札またはデッキから
レベル1モンスター1体を特殊召喚する。

手札の《黄泉ガエル》を墓地に送り、デッキから《スポーア》を
特殊召喚。

レベル7の《スクラップ・デスデーモン》に、レベル1の《スポ
ーア》をチューニング！」

7 + 1 = 8

「集いし鋼が、新たな命となつて動き出す！ 光さす道となれ！
シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》……！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻280
0 / 守2000

「墓地の《スポーア》の効果を発動、《グローアップ・バルブ》を除外し《スポーア》のレベルをその分だけ上げて特殊召喚。

そして《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる！

選択するのは《スポーア》と《切り込み隊長》！
ダストブレイズ！」

《スクラップ・ドラゴン》からくず鉄混じりのプレスに巻き込まれ、《スポーア》と《切り込み隊長》が砕け散りました。
やった！これで二人ともロックが解けた！

「そして…これが最後！」

墓地の闇属性モンスター《ジャンク・シンクロン》と、光属性モンスター《ライトロード・ハンター ライコウ》を除外し、《カオス・ソルジャー》 - 開闢の使者 - 《を特殊召喚！」

《カオス・ソルジャー》 - 開闢の使者 - 《 星8 / 光属性 / 戦士族
/ 攻3000 / 守2500

「あ、ああ…」

すでに不良の二人は声もありません。私だって同じ心境です。

ユウくんの中では目まぐるしくモンスターたちが召喚されていき、最終的に《スクラップ・ドラゴン》に《アームズ・エイド》、そして《カオス・ソルジャー》 - 開闢の使者 - と高レベルモンスターが大量に並んでいるんですから。

「《アームズ・エイド》の効果発動！

装備カード扱いとしてモンスターに装備、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップ。

《アームズ・エイド》を《カオス・ソルジャー》 - 開闢の使者 - 《に装備！！》

《カオス・ソルジャー》 - 開闢の使者 - 《 攻撃力3000 4000

「こ、攻撃力4000!?!」

「バトル！ カオス・ソルジャーで《切り込み隊長》を攻撃！ 開闢双破斬！」

カオス・ソルジャーの剣戟が衝撃波となって《切り込み隊長》を襲いました。

不良1

LP4000 1200

「さらに《アームズ・エイド》の効果発動！

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与えます

「！」

「何、それじゃあ!?!」

「残り1200ダメージを受けてもらいます!」

「う、うわあああ!?!」

不良1

LP1200 0

「そして《カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -》の効果発動。このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

つまり……」

「ひい!?!」

ユウくんの視線を感じ、もう一人の不良が後ずさる。

「バトル! 時空突刃・開闢双破斬!?!」

「ぎゃああああ!?!」

不良2

LP4000 1200 0

「わ、ワンターン2キル…」

目の前のユウくんは戦いに言葉も出ません。

「ふう…勝ったよ、ゆま」

「ユウくん」

そう言っただけユウくんは私にほほ笑みます。それに釣られるように、私はユウくんを駆け寄りました。

ユウくんはゆっくりとデッキとデュエルディスクをしまい2人組に向き合います。

「…約束です。クリーニング代はお支払しますから、どうかそれで許して下さい」

腰を抜かした2人組に、ユウくんはぺこりと頭を下げました。すると、その言葉で2人は我に返ったように飛び起きます。

「ふ、ふざけんな！ あんなのは無効だ！！」

「…でも約束したはずですよ。デュエルで僕が勝てば謝罪を受け入れて終わりにするって」

「知るか、そんなもん無効だ！ 分かっただらこっちに来やがれ！」

「!?!?」

そう言って私を捕まえようと一人が迫ってきました。
怖くなって私はぎゅっと目を瞑ります。
その時です。

「でりゃー!!」

一瞬のことでした。

私を捕まえようとしていた手をユウくんが掴み、巧みにバランスを崩させて投げ飛ばす…それが流れるようになめらかに、一瞬の間に起こったのです。

あまりに一瞬のことに、周りの誰も、投げられた人も含めてぼかんとしてしまいました。

そんな呆けていた私の手を取って、ユウくんが走りだします。

「逃げるよ、ゆまー!!」

その言葉に私も我を取り戻して走り出しました。

「ま、待ちやがれ!!」

私たちが走りだし、やっと我に返った2人組が追って来ます。

ユウくんとは私はDホイールに飛び乗ると、アクセルを一気に廻しDホイールをスタートさせました。

「まだ追ってくるよ…」

ユウくんの眩きにちらりと後ろを見ると、あの2人組がDホイールに乗って私たちを追ってきていました。

「振り切るよ！ ゆま、しっかりつかまって！！」
「は、はい！！」

言われて、私は力いっぱいユウくんの中身に抱きつきました。
同時にユウくんがアクセルを一気に全開にして、スピードが上がっていく。

スピードの風の中、私はユウくんの背中の中身に感じながらギョツと目を閉じたのでした。

結局、私たちはあの人たちと2時間ほど追いかけてここをする羽目になってしまい、逃げ切った時にはもうへろへろ、ユウくんが家まで送ってくれることになりました。

「とんでもない休日になっちゃったね」

「あうう…ごめんなさいです、ユウくん」

私のドジのせいでせつかくの休日が潰れちゃいました。

「謝らなくていいよ。 それに…ゆまと一緒に過ごさせて楽しかったしね」

そう言って夕日を背にユウくんはほほ笑みました。

その姿はとってもカッコ良くて、顔が赤くなっちゃいます。

「それじゃまたね、ゆま」

そう言っつてユウくんは帰っていきました。

ご飯を食べて、お風呂に入って、私はベッドに寝転びながらデッキを眺めます。

私のデッキ、それはおじいちゃんも使っていたというカッコいいHEROたちのデッキです。

でも、今日のユウくんはそんなどのHEROよりもカッコよくなって

「えへへっ」

ユウくんを抱きしめていた時のあの温もり、スピードの風の中ですぐそばにあった太陽のように優しい温もりを思い出して、私の顔はだらしなく緩んじやいます。

今夜は、いい夢が見れそうですね。

……T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまとー!」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「今回もすっごいデュエルでした…って、メグちゃん、部屋の隅で何やってるんですか？」

恵「私：今回除け者だった。やる気出ない…」

ゆま「あはは、安心して下さい。次回の第四話はメグちゃんの話らしいですよ」

恵「ゆま、早くコーナーを進めるべき…」

ゆま「何と言うか、メグちゃん分かりやすすぎです…今回のカードはこれですう！！」

《カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -》

効果モンスター（制限カード）

星8 / 光属性 / 戦士族 / 攻3000 / 守2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを1体ずつゲームから除外して特殊召喚する。

自分のターンに1度だけ、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。

フィールド上に存在するモンスター1体をゲームから除外する。

この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

ゆま「何て言うか…問答無用ですう…」

恵「いくら考えても制限に復帰した理由が分からない、まさに壊れカード…」。

比較的ゆるい召喚条件に除外能力に連続攻撃…バランスという言葉を知っているのか小一時間ほど問いただしたくなる…」

ゆま「光属性というのも曲者ですう！ 《オネスト》って言われた時点でほぼ死亡確認状態ですう！」

恵「破壊耐性はないから比較的簡単に処理できることは嬉しい…」。

ただ、召喚された時点で次のターンがある可能性は低いのだけど…」

ゆま「今回はここまでです！」

恵「また次回…」

第03話 風の中にある太陽（後書き）

ワンターントウキル：はつきり言えばこれがやりたいだけの話でした。

ワンターンスリーキルは現実には難しすぎる…。

第04話 親の存在（前書き）

今回は本編キャラとTFキャラの繋がりについて。
当然、独自設定です。

第04話 親の存在

No side

「遊星、あなたは生きなければならない…!」

「Z-ZONE!？」

もう20年以上も前のこと。

未来のため、約束のため、今を壊そうとした者。

絆のため、今と未来を守ろうとした者。

どちらも、まぎれもなく英雄と呼ばれるべき2人の男の激突。

その戦いの果てに、一人は死に、一人は託された未来のために生き続ける。

だが…この二人の間にある約束があったことを知るものはいない。

「遊星、最後にお願ひがあります。私の、私たちのただ一つの我が儘を聞いてください…。」

それは…」

それは散りゆく英雄が、未来のために生き続けた英雄が、最後に見せた自分のための我が儘。

その内容は…。」

S i d e 恵

本日は日曜日、私は不動家へとやってくると即座に目標を発見。
裏のガレージにてユウはDホイールを弄っていた。
顔色を確認。あまり寝ていないことがありありとわかる。

「おはよう、ユウ」

「おはよう、恵」

「ユウ、顔色が優れない。睡眠不足の兆候が見られる…」

「あはは、わかっちゃう？」

昨日、ゆまとDホイールのパーツを買いに行つてね。その組み込みをやつてたらこういつの間にか朝に…」

そう言つてあははとユウが笑う。それを聞いて私は軽いめまいを覚えた。

「それで、恵は今日どうしたの？」

「ユウには不平等の是正を要求する…」

「不平等の是正？」

訳が分からないと言つた顔のユウに、私は言葉を続ける。

「昨日、ゆまとデートをしたことは、ゆまからのメールで知っている」

「いや、ただの買い物でデートじゃないんだけど…不良に追いかけられて散々だったし」

困った顔で反論してくるユウを無視して、会話を続行。

「これから私は用事がある。でも、私一人では手が足りない。

そこでユウに協力を要請する…。ユウの力が必要、昨日ゆまに付き合ったように、今日一日私に付き合っ欲しい」

「協力？ いいよ、恵の頼みだもん。僕に出来る事だったらなんでもするよ」

そう言ってほほ笑みながら返してくるユウ。その笑顔に、私の胸はドキリと高鳴る。

…どうしてこうユウは無自覚に、私の心を揺さぶるのだろうか？

「ありがとう、ユウ。早速、出発を」

そう言って私の乗ってきた、まるで骨のように病的に白い私のDホイール　メモントモリーを指した。

「場所は旧サテライト地区…用意をして…」。

一度、シャワーを浴びてくることを推奨する…」。

「わかったよ」

そう言ってユウは不動態に戻っていく。残された私は、ガレージの

椅子に腰かけてユウを待つ。
日頃、使いもしない手鏡で、髪と服に乱れが無いことを確認しながら…。

ユウと共に私がやってきたのは旧サテライト地区の孤児院、マーサハウスだ。

私にとっては、ここは古巣となる。

私は孤児として、ここで暮らしていた。

私は3歳以前の記憶が曖昧だ。気が付いた時には、身元不明の捨て子としてこのマーサハウスに身を寄せていた。

そんな私に、ある時現れた遊星おじさまが私を引き取りたいと申し出てくれた。

聞けば、どうやら私は遊星おじさまの知り合いの娘らしい。

そこで私を養子にと言ってくれたが、私はその話を断った。

他の姉妹たちの手前、自分だけ家族を手に入れると言うことには抵抗があつたからだ。

それに…遊星おじさまは巧みに真実を言っではくれないが、私は自分の親について心当たりがある。

よく私は夢を見る。

砕けた瓦礫の街に4人の老人、仮面に覆われた顔に金属の冷たい、

それでも優しい手…そんな夢…。

素性不明の我が身、物心ついたときから備わっている人並み外れた知識、そしてこの街の記録…それらを合わせれば自分自身の出自の

予測は立てられる。

その出自ゆえ、どうしても遊星おじさまに甘えきることが出来ない。それなら、と遊星おじさまは私の後継人と保護者に名乗り出てくれた。

おかげで今、私はシティの不動産の近くで何不自由なく一人暮らしが出来ている。

だが、私の故郷はあくまでここ、マーサハウスだ。

そのため、頻繁に時間を作ってはマーサハウスを訪れ、手伝いなどを行っている。

「恵、遊輝！ よく来たね！！」

少し太めの老女が私たちを力いっぱい抱きしめて迎えてくれた。

この人はマーサ母さん。この孤児院の主であり、遊星おじさまの親代わりだった人だ。

私にとっては母であり、ユウにとっては祖母と言えるだろう。

「あはは、久しぶりです。　マーサおばあちゃん」

「ただいま、母さん…」

そう言っつて挨拶する私たちを迎え入れてくれた。

だが、ここで私は異常に気付くことになる。

私たちの姿を認めるとすぐに駆け寄ってくる私の妹や弟たちが寄ってこない。

それにマーサ母さんも表情がかたく、どうも雰囲気重い。

「何か、あった…?」

「恵姉さんに遊輝お兄さん…」

答えたのは私の妹の一人、瀬良あゆみである。泣き腫らした眼が痛々しい。

「どうしたの…?」

「そ、それが…」

聞けばあゆみは学校帰りに、最近この周辺に出没する悪質な不良グループによって大切なカードを巻き上げられてしまったようだ。さらに悪いことに、そのことを知ったあゆみと同一年の私の弟…戦士手島が出て行ったきり戻ってこないそうだ。

居なくなつた手島のこと、皆相当心配している。

治安警察（旧セキュリティ）に連絡をして手島を探してもらっているが、未だ連絡は無いらしい。

その話を聞いた途端、私はユウを見た。

ユウは私の意図を知ったように頷くと、私たちは連れだってマーサハウスから出て行こうとする。

「あんたたち、どこに行くつもりだい!!」

「…その不良グループのところ。手島の性格なら、間違い無く取り返しに行ってる…」

「お待ち！ そんな危険なことは治安警察に…」

私たちは最後までマーサ母さんの話を聞かず、表に止めてあったDホイールに飛び乗る。

「どつするの？」

「場所は分かる。 あゆみのカードと手島を取り戻す…」

ユウの問いに私は簡潔に答えると、メモントモリーのエンジンをスタートさせた。

あゆみの奪われたカードは大切なものだ。

両親が蒸発し、その両親が唯一残してくれたカードだ。

あゆみはそのカードを見ながら、いつか両親が迎えに来てくれると信じているのを私は知っている。

言ってみればあゆみにとって、家族の絆の象徴たるカードなのだ。そして

戦士手島：短気でケンカばかりの手のかかる弟。

でも、周りの友達が傷つけられたら誰よりも怒り、いの一に動き出す優しい弟。

「取り戻す…必ず…！」

私はそう呟き、メモントモリーを発進させた。

「……」

私たちが着いたのは旧サテライトB地区にある廃工場群の一画だった。

こういった場所がまだ多いこの地区は、不良たちの格好の隠れ家になっている。

「う、うあああ…!!」

私たちの後ろでは、すでに無力化された不良たちが蜘蛛の子を散らすように逃げ出している。

全員、私とユウの二人でデュエルで制圧した。あとはこの扉の向こう、リーダー格の不良だけだ。

すると、扉の向こうから声が聞こえてきた。

「う、うう…ちくしょう…」

呻くような声、間違い無く手島の声だ。

私はドアを思い切り開け放った。

「誰だ!？」

「め、メグ姉に遊兄…!」

部屋の中の不良は3人、意外に数が多い。

私は倒れた手島に駆け寄って抱き起こした。

私の隣では、ユウが油断なく不良たちに睨みを利かせている。

「メグ姉…」

「…ひどい」

私は不良たちを睨みつける。

「へ、ガキが！俺たちにたてつこうなんて10年早えんだよ！」

「うるせえ！そのガキからカード巻き上げてて、何偉そうにしてんだ！」

返せよ、あゆみのカード返せよ！！」

私の腕の中で、手島が叫んだ。

「何言ってるんだ？ガキには過ぎたカードだから俺たちが有効活用してやるうってるんだ、なあ？」

ゲラゲラと耳障りな不良たちの笑い。

「それによお、お前の言う瀬良あゆみって、あの悪党どもの娘だろ？」

その言葉に、私はピクリと反応した。

あゆみの両親が、悪行の数々を行っていたのは有名だった。

人生を終わらされた人間は数知れず、そうやって他人の屍の上に地位を築いていた人間だ。

だが、そんな栄華は長くは続かない。結局は復讐を恐れ、雲隠れ。

後に残ったのは事情を知らず、他者からの憎悪の対象にされてしまったあゆみ唯一人だった。

「悪党の娘なんだからどうせ悪党に決まってる。

そんな悪党からカードを取り上げたんだから逆に俺たちは正義の味方ってわけだ」

悪の娘は悪…そんな不良の言葉が私の心に小さな楔を打ち込む。

だが…それを二つの声が打ち消した。

「親は関係ねえだろ、親はよお!!」

あゆみはよお、いつだって一生懸命で、いつだって笑顔で、辛いと苦しいとか言わねえ!!

でも、いつだかお前らの奪ったカードを見ながら一人で寂しそうに泣いてたんだよ!!

お前らの持つてったのは、あゆみの親との大事なカードなんだよ! あゆみはいい奴だ、親なんか関係ねえ!!

そんないい奴から大切なカードを奪ったお前らが正しいはずねえだろ!!」

「その子の言う通りだ!

親が何であれ、子供には関係ない。子供の人生は子供のものだ!! それを勝手な屁理屈をこねて、子供の未来を決めつける!

そんなの、正しいはずが無い!!」

そう言つてユウはデュエルディスクを構えた。

「デュエルだ! 僕が勝つたらあなたたちが今まで巻き上げたカードを返してもらおう!!」

すると不良たちのリーダーらしき男はニヤリと笑つ。

「ほーう、モヤシのお坊っちゃんが俺とデュエルかよ。

ならお前もそれ相応のものを賭けてもらうぜ! お前らのデッキと、その女だ!!」

さあ、賭けるよ!!」

「私は構わない、ユウ…私はユウを信じてる…」

私の言葉にユウが頷いた。

「わかった、そのアンティルールを受ける！」

「よし、それじゃちよっくら遊んでやらあ！！」

リーダー格の不良がデュエルディスクを構える。

「デュエル！！」

遊輝 LP4000

不良リーダー LP4000

「俺のターン、ドロー！俺は手札から《バンディモニウムジェネラルデーモン》を墓地に捨て、《バンディモニウム万魔殿 - 悪魔の巣窟 - 》を手札に加える。そしてフールド魔法、《バンディモニウム万魔殿 - 悪魔の巣窟 - 》を発動。
そして手札の《デーモン・ソルジャー》を攻撃表示で召喚。
カードを2枚伏せターンエンドだ」

《デーモン・ソルジャー》 星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1900 / 守1500

バンディモニウム

《万魔殿》…恐らく相手のデッキは『チェスデーモン』デッキ。

維持にライフコストを要求するが、強力な効果をもつ下級モンスター軸のビートダウンデッキだ。

「僕のターン、ドロー！ 手札から《サイクロン》を発動。

伏せカード一枚を破壊！」

「ちい！」

砕け散ったカードは《奈落の落とし穴》、いいカードを破壊出来た。

「裏守備表示でモンスターを召喚。 ターンエンド」

ユウは伏せカード無し…どうも初手は良くないようだ。

「俺のターン、ドロー！ 《インフェルノクインデーモン》を攻撃表示で召喚！」

《インフェルノクインデーモン》 星4/炎属性/悪魔族/攻 9
00/守1500

「さらに手札から装備魔法発動！ 《デーモンの斧》を《デーモン・ソルジャー》に装備！」

《デーモン・ソルジャー》 攻撃力1900 2900

「行くぜ、バトルだ！！ 《デーモン・ソルジャー》で裏守備モンスターに攻撃！

切り裂け、デーモンスラッシュュ！！」

「このカードは《ライトロード・ハンター ライコウ》。効果によつて僕は攻撃してきた《デーモン・ソルジャー》を破壊！」

ライコウの効果で墓地に落ちて行く3枚のカード…。

《サイクロン》に《ライトロード・マジシャン ライラ》、そして《ダーク・アームド・ドラゴン》…ユウの運があまり良くない。

「ならば《インフェルノクインデーモン》でダイレクトアタック！」

「くう」

遊輝

LP4000 3100

「でもこの瞬間、僕は手札から《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚します！」

《冥府の使者ゴーズ》 星7/闇属性/悪魔族/攻2700/守2500

「さらに効果によつて「冥府の使者カイエントークン」を召喚！」

「冥府の使者カイエントークン」 星7 / 光属性 / 天使族 / 攻90
0 / 守900

バトルは終了、ユウはライフにダメージを受けたが切り札の一つ《冥府の使者ゴーズ》が場に召喚出来た。これならいける。そう私が考えた時、不良はニヤリと笑った。

「待ってたぜ、お前が強力なモンスターを召喚するのを！
装備魔法発動、《フォーリン・ダウン墮落》！」

黒いオーラのようなものがゴーズを覆い、ゴーズが苦しみに悶える。

「ライフを800払ってお前の《冥府の使者ゴーズ》に装備、そのコントロールを得る！」

ゴーズ、こっちに来い！」

不良リーダー

LP4000 3200

…不味い、攻撃力の高いゴーズのコントロールが奪われた。

「これでターンエンドだ」

ユウ……どうする？

そう思って見てみれば、ユウの顔が笑っている。

これは…行くの？

「僕のターン、ドロー！」

「おっと、お前がスタンバイフェイズに移ったことで《インフェルノクインデーモン》の効果発動！」

「デーモン」という名のついたモンスターカード1体の攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイントアップする。

俺は《インフェルノクインデーモン》の攻撃力をアップ！」

《インフェルノクインデーモン》 攻撃力900 1900

「僕は手札から魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動。

手札からモンスター1体を墓地へ送って、手札またはデッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する。

手札の《ドツペル・ウオリアー》を墓地に送り、デッキから《グローアップ・バルブ》を特殊召喚。

レベル7の「冥府の使者カイエントークン」にレベル1《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

7 + 1 = 8

「集いし鋼が、新たな命となつて動き出す！ 光さす道となれ！！シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8/地属性/ドラゴン族/攻2800/守2000

「さらにデッキトップのカードを一枚墓地へ送ることで墓地の《グローアップ・バルブ》を特殊召喚。

そして《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを

1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる！」

「な、なんだと!?!」

明らかにうるたえだす不良。

「僕が選択するのは《グローアップ・バルブ》と…その伏せカードだ!

ダストブレイズ！」

《スクラップ・ドラゴン》からくず鉄混じりのプレスに巻き込まれ、
《グローアップ・バルブ》と伏せカードが砕け散る。
砕けた伏せカードは…ミラーフォース!?

「やっぱりミラーフォースを伏せてたね…」

「お前…なんで分かった!?!」

「手札がゼロなのにその余裕の表情から、それが強力な『何か』だ
ってことは分かってたよ。

そこでなんであろうと潰せる体制を整えたんだ。

《奈落の落とし穴》のような召喚起動型のトラップなら《スクラ
ップ・ドラゴン》を犠牲にするつもりだった。

そうならそうで、通常召喚が残ってるからね。

でも《スクラップ・ドラゴン》は無事に召喚できた…それで、そ
れがミラーフォースのような攻撃反応型のトラップ、または速攻魔
法だとわかったのさ」

「くう…」

悔しそうに不良の顔が歪む。

「分かっていると思うけど、《フォーリン・ダウン墮落》の維持には場に「デーモン」と名のついたカードが必要。

現在、「デーモン」という名前のついたカードは《インフェルノクインデーモン》のみ。

そして身を守るトラップはもう無い」

その意味することは…

「バトル！ 《スクラップ・ドラゴン》で《インフェルノクインデーモン》を攻撃！ スクラップデスバーナー！！」

《スクラップ・ドラゴン》からのプレスが《インフェルノクインデーモン》を跡形もなく燃やしつくす。

不良リーダー

LP3200 2300

「そして「デーモン」という名前のついたカードが無くなったことにより、《フォーリン・ダウン墮落》は破壊。

戻ってこい、ゴーズ！！」

「あ、あああ…」

黒いオーラを振り払ったゴーズが、ユウの元へと帰ってきた。それを見ながら不良が一步後ずさる。

「そしてゴーズの攻撃が残っている。ゴーズでダイレクトアタック！

冥府葬送斬!!」

「うわああああ!!」

不良リーダー

LP2300

不良のリーダーはその衝撃で倒れる。

「さあ、約束通り奪ったカードたちを返してもらおうよ!」

「く! そんなの知るかあ!!」

飛び起きたリーダー格の男が拳を放つ。

危ない、ユウ!?

「はっ!」

だがユウは、殴りかかってきた拳を避けると逆に顎に拳を打ち込んでいた。

「...!!?」

声を上げる間もなく、リーダー格の男は崩れ落ちる。

あの様子だと、しばらくは気を失ったままだろう。その様子を見ていた取り巻きたちは我先にと逃げ出してしまった。

「ああ、やっちゃった…この中から、あゆみちゃんのカードを見つけるのは結構骨だね」

巻き上げられていたカードの数々を前にユウはそう、少し困った顔で呟くのだった。

「ふう…」

私たちがマーサハウスへと帰って来たのは、日が暮れ始めてからだった。

あの後、あゆみのカードを回収した私たちはすぐに治安警察（旧セキリティイ）に連絡した。

あれだけのカードたちを持ち主に返すには、私たちだけではどうしようもないからだ。

だが、そこで少し問題が起きた。

あの不良グループだが、かなり手広く悪いことをやっていたようで窃盗などの余罪が多数で私たちも事情を聞かれることになってしまったのだ。

おかげで帰るのが大幅に遅れてしまった。

「これを…」

「メグ姉？」

メメントモリーから降りた私は手島に一枚のカードを差し出した。そのカードは《アンデット・スカル・デーモン》。：あゆみの奪われたカードだ。

「手島からあゆみに渡して…」

「だって…取り戻したのは遊兄とメグ姉じゃんか。俺、何にも役に立ってない…」

そう言っ下を向く手島の頭を、私は撫でる。

「ううん、手島は立派だった…」。

あゆみのために立ちあがって、たった一人であいつらに立ち向かって行った…」

「だって…取り戻さなきゃ、あゆみのやつが可哀想じゃんか…」

「そう思えても、みんな行動出来ない。やっぱり手島は立派…」

「そつだよ、僕だって君くらいの歳じゃそんなことできない。手島くんは立派だよ。」

だから、このカードは君からあゆみちゃんに返してあげるんだ」

「遊兄、メグ姉…」

手島は私とユウの顔を交互に見ると、やがて頷いた。

「ただいま…」

私たちがマーサハウスに帰ってくると、あゆみが弾かれたように弾かれたように走ってきてきて手島に抱きついた。

「お、おい」

「し、心配だったんです」

それだけ言うとおゆみの手島に抱きついたまま泣き始める。

あゆみが落ち着くまで何も言わなかった手島は、あゆみが落ち着いたのを見計らって《アンデット・スカル・デーモン》のカードを差し出した。

「ほら、取り返してきてやったぞ」

「ひつく…あ、ありがとう…」

そっぽを向きながらカードを差し出す手島と、泣きながらカードを受け取るあゆみ。

「大事なカードなのにあんな奴らに奪われるし、どん臭くて見られないよ、お前」

「う、うん…ごめんなさい…」

シユンとするあゆみに、手島はそっぱを向きながら続ける。

「しょうがねえから…これからは俺様がいてやるよ」

「え、それって」

あゆみは言葉の意味が分からずに目をパチクリさせる。

その様子に、顔を真っ赤にした手島は大声で叫ぶように言った。

「あー、もう！ 守ってやっからこれからは俺様から離れんじゃねえぞ！ いいな…！」

きよとんとしていたあゆみだが、その言葉の意味をゆっくり飲み込む。

そして、顔を赤くしながら頷く。

「う、うん。 ずっと傍にいるから、守って…」

「お、おう…！」

お互いに顔を真っ赤にした手島とあゆみの姿に、私も自然と笑みが漏れる。

「一件落着だね」

「うん…」

「そろそろ僕たちも帰ろうか」

「うん…」

「ごちそうさまでした…」

「はい、恵ちゃん。お粗末さま」

私は今、不働家で夕食を御馳走になっている。

あの後、ユウとマーサハウスから帰ったところアキおばさまと遊星おじさまに夕食に誘われ、御馳走になったのだ。

相変わらず、アキおばさまは料理が上手い。

夕食が終わり、ユウが部屋へ引き上げていく中、私は遊星おじさまに呼び止められた。

「何度も言っていることだが…俺は君を大事に思っている。大切な友人との約束だ。」

君を俺の家族として迎えたいと思っているのだが…」

「すみません、おじさま…。その話はお断りします」

「…理由は聞いてもいいか？」

「遊星おじさまは言わないけれど…私は自分の親について、予想がついている」

「!?!? まさかそのことで…」

遊星おじさまの驚いた顔に、私は首を振る。

「親は親、私は私…おじさまの提案を受けない理由は、ごく個人的な我が儘です…」

「我が儘？」

「だから遊星おじさまは気にしないで下さい。私は今のままでも…幸せです」

そう言っつて私はユウを追っつて食堂から出て行くこととする。

そして、出て行く前に遊星おじさまに向き直ると一ツ宣言した。

「安心して下さい、おじさま。ユウの妹以外として…いつか家族になっつてみせますから…」

そう言っつて一礼すると、今度こそ私はユウを追っつて部屋から出て行つた。

「…どっついつことだ？」

俺は今、恵の言葉の意味を考えてみるがよく分からない。

「…なるほどねえ」

見ると妻のアキは納得したように、何度も頷いていた。

「わかったのか、今の言葉の意味が？」

「ええ。まあ…女のこだわりということね」

「…遊輝の妹より、姉の方がいいという意味か？」

「いや、そうじゃなくて」

？

ますます意味が分からない。

だが、彼女が俺の家族に対して心を開いていることは分かる。
今はそれでいいだろう。

俺は居間の片隅に飾られた写真へと近づいて行く。

それはあのWRGPで優勝した時の俺達の写真だ。

そしてその写真の隣には壊れたサングラスが一つ…。

俺はそのサングラスを手に取り、語りかける。

「ブルーノ…アポリア…パラドックス…そして、Z・ONE。」

お前たちの娘は…元気に育っているぞ」

No side

「遊星、私たちの娘をお願いします…」

「娘だと？」

「はい…。人類を再生させるための計画の一つ、それは人工的に人を産みだすことでした…」

「クローンの様なものか？」

「クローンのように寿命などに問題の無い、文字通り普通の人間です。」

「ですが…資源も時間もなく、その計画は一人を生み出したただけで中止としました。」

「そこで生みだされた娘…その子は私たち4人の娘です。」

「しかし滅んだ未来に残しても、孤独な破滅が待っているだけ…。」

「私たち4人は時間転移装置で娘を過去へと飛ばしました。」

「未来を変えるこのアーククレイドル計画の発生から十年後、未来の変わったこの世界で迎えに行こうと…」

「それじゃあ…」

「今から十年後、私たちの娘はこの世界に転移してきます。
しかし…私にはもはや迎えに行くことも育てる時間ありません。
だから…」

「…分かった。お前の、いやお前たちの娘は俺が必ず育ててみせる！」

「…ありがとう、遊星」

「それで、お前たちの娘の名前は？」

「名前は…」

それは何もかも滅んだ未来、絶望のみが残された4人に訪れた奇跡。
その子の笑顔は、まるで乾いた大地に降る恵みの雨の様で…4人の
心に染みわたっていた。
だから、その子の名前は…

「恵。 レイン＝恵です」

…T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまと!」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「今回は予告通りメグちゃんの話でしたね…って、なんで部屋の隅に？」

恵「私…ゆまみたいに全然甘えられてない。何故？何がゆまと違うの…？」

ゆま「ほへ？」

ドタプーン

恵「…」

ペターン

恵「くっ…質量差が敗北要因だというの…!？」

ゆま「あ、でも今回はメグちゃんの出生についてとか設定が出る話で、そういうイチャイチャはまた今度ということだ…」

恵「…仕方ない。今はこのコーナーを進める」

ゆま「今回のカードはこれですう!…」

《冥府の使者ゴーズ》

効果モンスター（制限カード）

星7 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2700 / 守2500

自分フィールド上にカードが存在しない場合、

相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、

このカードを手札から特殊召喚することができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。

戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエン トークン」

（天使族・光・星7・攻/守?）を1体特殊召喚する。

このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

カードの効果によるダメージの場合、

受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

ゆま「1キル封じのカードですね。高い攻撃力に、強力なトークンを生み出す能力と、劣勢からの反撃の狼煙になるカードです」

恵「このカードのせいで場がガラ空きでも安心して攻撃に行けなくなった…」

ゆま「このカードを警戒して攻撃順も重要ですね」

恵「…攻撃力の高いモンスターから攻撃をするのはNG。攻撃力の低いモンスターから攻撃するというプレイングをいつも念頭に置いておくといい」

ゆま「後半の効果なんですけど…メグちゃん、発動したとこ見たことあります?」

恵「無い…」

ゆま「作者も見たこと無いらしくて、どうにも評価できないみたいです」

恵「そこはおまけのようなものと割り切る…。正直前半の効果だけで十分強すぎる…」

ゆま「今回はここまでです!」

恵「また次回…」

第04話 親の存在（後書き）

というわけで、恵ちゃんの素姓についてでした。

ここまでが導入編の第一部となります。

書き溜めていたのはここまでなので、また書き溜めてから投稿します。

閑話 人物紹介

人物紹介

不動 遊輝（15）……本作品主人公。不動遊星と十六夜アキの一人息子。

父と母の才能を正しく受け継ぎ、絆を大切にするように真っ直ぐ育った。

生きた伝説である父を尊敬している反面、『英雄の息子』ということとで有名になり過ぎなかなか同年代の友人が出来なかったことから疎ましく思っていることも。

性格はおとなしく、一人称は僕。

父親へのコンプレックスのためちょっと気弱で、一言で言うとな蟹の外見のAIBO。

ただ、守るもののためには恐れず突き進む強さを持つ。

エースモンスターはスクラップドラゴン。他にも切り札になりえるモンスターたちを多数所持している。

機械いじりにデュエルの腕前、Dホイール運転技術などなどチートな才能を誇る。

だが、父がそれ以上にチートのため自分の才能に自信が持てない。誕生日に父遊星から贈られたDホイールと、母から贈られたカードが宝物。

使用デッキ：『ジャンクドッペル』

Dホイール名：遊輝号

宮田ゆま（15）……本作ヒロイン1号。タッグフォースキャラの一人。

伝説のデュエリストであり、不動遊星とも繋がりがあった『遊城十

代』の孫娘。

不動態とは家族ぐるみでの付き合いであり、幼いころから遊輝と共に過ごしていた。

天然でボケボケしているが、正義感が強く、どんな人物も改心させてしまうような不思議な魅力の持ち主。

祖父から貰ったとてつもないカードを所持しているのだが…。

使用デッキ：『属性E・HERO』

Dホイール名：トライハート（未完成）

レイン＝恵（15）……本作ヒロイン2号。タッグフォースキャラの一人。

無口で静かな少女。無表情が基本であり、彼女が顔色を変えることを見たことがある人間は少ない。

遊輝たちの幼馴染の一人。物心ついたときから家族はおらず、幼少期は孤児院で過ごしていた。

遊星は彼女に何かと世話を焼き、後継人になっている。

遊星は何度も彼女を養子として引き取るうとしたが、彼女自身に断られた。

実は彼女の親は『彼ら』であり、本人はその出生になんともなく気付いているようだ。

使用デッキ：『アンデット』

Dホイール名：メメントモリー

第05話 廃部危機！？ 開催、部活対抗トーナメント（前書き）

今回から第二部、学園物の王道、トーナメント大会に入ります。
タグフオースキヤラが次々登場予定。

お楽しみに。

第05話 廃部危機！？ 開催、部活対抗トーナメント

Side ??

私はライディングデュエルが大嫌いだ。

その名前を聞くだけで虫酸が走る。

だから、ライディングデュエル部などこの手で潰してやった。

だと言うのに…何故今年になって同好会が出来ているの！？

顧問は…ケイト…モヘア教官？

成程…2年前の意趣返しというわけ。

いいわ、何度だって潰してあげる！

ライディングデュエルなどこの学園には必要無いのよ…！

Side out

Side ケイト

「ちい！」

アタイは肩を怒らせながら校内を歩いていた。

あー、イライラする！

ここが家だったらビールを一気にあおって暴れまわりたいぐらいだ。それと言つのも、ついに『あいつ』が動き出したからだ。

「あいつ、またライディングデュエルを潰そうつてのかい…」

その姿勢は2年前とちつとも変わっていない。

「どうしようかねえ…？」

自問してみるが、どうするもこうするもない。

すでに決定事項、賽は投げられた後だ。

となれば、後はその賽の出目で博打に勝つしかない。

だが、あの3人はその博打に勝つことが出来るだろうか…？

「とにかく、早いとこボウズたちに教えてやらないと…」

アタイは部室棟の一番隅、ライディングデュエル同好会のドアをバシッと開け放った。

「あんたたち、揃ってるね！ 実は…」

そこまで言って、アタイの目は点になった。

何故なら、目の前ではあの3人が重なるように倒れていたからだ。

遊輝のボウズがゆまと恵の2人を押し倒すように覆いかぶさっていた。

ボウズはヤバツという顔でアタイを見てるが、ごく丁寧なことに右手

はゆまの、左手は恵の胸をしつかり掴んでいるあたり言い訳出来る状況でもない。

ゆまと恵の方も、何かを期待するように目を瞑って心なしか唇を突き出してる。

「…おい、学校内で何やってるんだエロガキども…」

「ち、違っ!」

「『クリボーが勝手に』とか訳分んないことでもほざくつもりかい?」

「いやそんなこと言いませんよ! これには訳が!」

「男が2人も女押し倒して胸揉みしだく、正当な訳なんざあるわけないだろ!」

ゆっくりとアタイは3人に近付く。

「この…バカガキどもがあ!!!」

3つほど軽快な音が夕方の学園に響き渡った。

S i d e o u t

「痛いですう…」

「痛い…」

ゆまと恵が叩かれた頭を涙目で抑えている。
僕も泣きそうだ。

「こんなときにバカやってるんじゃないよ、全く…」

そう言われても事故で偶然倒れかかって、二人が支え切れなかった
っただけでやましいことは何にもしてないのに。

「とにかく、真面目な話があるんだ。

全員、心して聞きな」

そう言って話し出したケイト先生の話は…とんでもないことだった。

「僕たちのライディングデュエル同好会が…廃部!？」

「その可能性が濃厚だったことだ」

そう言ってケイト先生は事情を説明しはじめる。
いわく、生徒会からの陰謀だという。

部費は各部活動のこれまでの活動内容や部員数によって基本的に決

まる。

だから新参で実績が無く、人数の少ない同好会である僕らライディングデュエル同好会は部費が少ないのは仕方ない。

だが、ライディングデュエル同好会の部費はそれを考えても少なすぎだった。

どうやら、生徒会が『学生にライディングデュエルは好ましくない』などの理由でライディングデュエル同好会の部費を操作したらしい。そのため、このままではこの部室の維持費すら捻出できなくなり事実上の廃部となってしまうということだ。

「今年度の部費はいくら…?」

「ほら、これだよ」

恵に何やら数字の書かれた書面をケイト先生が渡す。

僕とゆまも、その書面を覗き込んだ。

そこに書かれていた数字は…。

「はう…この金額じゃ、どう節約したって無理ですう…」

「それ以前に、来月の維持費すら危ういんだけど…」

僕とゆまは揃って頭を抱えた。

どうしたらいいんだろう?

アルバイトでもしてそれを部費として入金していけばいいのかな?

僕は同好会を存続させる方法をあれやこれやと考える。

しばらくして、何かを考え込んでいた恵が口を開いた。

「ケイト先生、単刀直入に聞きたい。 私たちはもうおしまい…?」

その言葉を待っていたかのように、ケイト先生はニヤリと口をゆがめた。

「方法が一つだけある。正規に認められた方法で、部費を大幅に増やす方法がね」

「本当ですか！」

「ああ、但しここにいる全員が勝たなきゃならない分の悪い賭けになるよ」

「構わないです！ 教えてくださいです、ケイト先生！」

「分かった。実は…」

ケイト先生の話はこうだ。

今から一週間後、新入生歓迎イベントである部活対抗トーナメントというデュエル大会が校内で開催される。

その大会で上位の成績を収めれば、特典として『特別部活動予算』という部費がでるらしい。

デュエリストを育てるデュエルアカデミアらしく、デュエルでの勝利で得られるこの『特別部活動予算』と言うのはかなりの金額のようだ。

「これなら全校生徒の前で実力を示した上で受け取れる。

新参だの実績が無いだの、いらん横槍で減額することもできないだろうね。

ただし、ここでの成績が悪ければ問答無用で早晚廃部決定。

ちよっとした博打ってわけだ」

そう言つてケイト先生が肩を竦める。

「しかも悪いことに、今後使つたろう部費を試算してみたが、こりや優勝しないと遅かれ早かれ予算切れで廃部だろっね」

「つまり僕らが存続するためには…優勝するしかない？」

「そういうことだ」

立ちあげ早々に廃部の危機、いくらなんでも急展開に過ぎる。それを乗り切るためにはデュエルに勝たないと…。

「あ、もしかしてケイト先生が言つてた、『強くないとライディングデュエルできない』つて言うのはこのことなんですか？」

以前ケイト先生が言つていた言葉を思い出して聞くと、ケイト先生は頷いた。

「まあね。あんたたち、この学校に以前ライディングデュエル部があつたつて知ってるかい？」

「ええ、文化祭の公開デュエルを見たことありますから」

「それが今無いのはなんでだと思う？」

「まさか…」

何かを思い当たった恵に、ケイト先生は頷いた。

「同じさ、予算の都合が出来なくなつて2年前の部活対抗トーナメ

ントで廃部になったんだ。

当時は部活對抗戦のルールが違ってね、バトルロイヤル形式だったんだ。

勝った部が負けた部の部費の一部を奪えるってアンティルールでね」

「でも、それだと弱い部活は一方的に部費が盗られちゃうじゃないですか…」

「参加しない、って選択も出来る。

でも過酷なライディングデュエルをしようって部活だ、参加しないなんて選択はない。

そして…当時のライディングデュエル部はたった一人に根こそぎ部費を取られて廃部に追い込まれたのさ…。

アタイは当時、ライディングデュエル部の顧問だった…。
その全てを間近で見ていたんだ」

そんな風にケイト先生はしんみりと語る。

なるほど、だから『顧問は2度目』と言っていたのか…。

それにしても、ライディングデュエル部をたった一人で廃部に追い込んだデュエリストか…。

とんでもないデュエリストだ。

「一体誰なんですか？ その当時のライディングデュエル部を廃部に追い込んだデュエリストは？」

僕の問いに、ケイト先生は一呼吸置いてはつきりと答えた。

「現生徒会長にして学園最強の異名を持つデュエリスト、天宮照子。

このライディングデュエル同好会を潰そうとしている張本人さ」

ケイト先生から廃部の危機を聞かされてから一週間後、今日はライディングデュエル同好会の運命の決まる部活対抗トーナメント開催日だ。

今日僕たちの運命が決まると思うと緊張してしまう。

「はわわ…きつと大丈夫です、ユウくん…」

「ゆまも緊張で顔、引きつってるじゃないか」

「ユウもゆまも落ち着くべき…」

「そういうメグちゃんだって制服のボタンかけ違えてますう」

「むう…」

どうやら、僕たち3人はこの大一番に随分緊張してしまっているようだ。

「おい、おまえら調子はどうだい…?」

「あ、ケイト先生…」

やってきたケイト先生は、僕たちの様子を見るなり呆れ顔になって

いた。

「おいおい、何だい何だい。 全員揃ってブルっちまってるのかい？」

「仕方ないじゃないですか、このトーナメントに同好会の運命がかかってるんですから」

「だからってブルってたら実力がでないだろうが。 ほら、気合い入れな！」

「痛っ！」

ケイト先生にお尻をバシンと叩かれた。

ちよっと手加減して欲しいくらいだったけど、おかげで緊張はほぐれた。

ここで改めて今回の大会のルールを思い出す。

今回の戦いはトーナメント戦だ。つまり一回負けたら即ゲームオーバーだということである。

さらに出場選手には制限があり、同じ選手は少なくともその後2戦は戦ってはいけないというルールがある。

つまり、強い選手一人がいる部活が勝ち上がれるというわけではないのだ。

僕たちの目指すものは優勝、トーナメント表によれば優勝するには4戦を戦って勝つ必要がある。

僕たちの場合には全員が一度ずつ勝ち、さらに一戦目に出た選手が決勝で勝利する必要がある。

出場順については3人で話し合って決めていた。

一回戦目が僕、二回戦目がゆま、三回戦目が恵で、決勝戦が再び僕

という順番だ。

しかし…本当に僕たちは勝てるんだろうか？

トーナメント表を見たが、僕たちがおそらく戦うだろう相手は強敵揃い。

ケイト先生の話では、生徒会…もっと言ってしまえば会長の天宮照子さんが僕たちを潰すために刺客として組んだという話だ。

どうしてそこまで僕たちを目の敵にするのか分からないが、その執念は本物である。

大丈夫なんだろうか…？

すると、ケイト先生に今度は背中を叩かれた。

「い、痛っ！」

「ボウズ、お前がブルってどうするんだい？ あんたはこのアタイ、元プロデュエリストのケイト…モヘアに勝ったんだ。

胸を張りな、自信を持ちな！ 自分を信じられないデュエリストにはカードたちは応えてはくれないんだよ！」

「ケイト先生…」

そっだ、ケイト先生の言う通りだ。

まずは胸を張ろう。そしてみんなの、カードたちの想いに答えよう。

「そろそろ一回戦だ。行って来い、ボウズ！！」

「いってらっしゃい、ユウくん」

「ユウ、頑張って…」

「うん！　いつてくるよ！！」

僕はみんなの声に答えると、胸を張って会場へと歩いて行く。
もうさつきまでの緊張はない。

ケイト先生には感謝だ。やっぱり、立派ないい先生なんだなあ。

「……ところでケイト先生に質問がある。　部費が全額消えていたけど、行方を知りませんか……？」

「ああ、全額生徒が隠れてやってるトトカルチョにつき込んだ。
うちの部の優勝にな」

「えう！？　ま、不味いですよケイト先生。　先生はそういうの取り締まる立場なんじゃ……」

「アタイは固いことは言わないんだよ。　それに優勝できなきゃどうせ廃部なんだ。　いいじゃないか」

ぜ、前言撤回……。　やっぱり少し問題ある先生かも……。

僕は後ろから聞こえてくる先生のカラカラ笑う声に、強烈な頭痛がして頭を抱えるのだった……。

「あら、誰かと思えば不動博士の息子さんじゃありませんか？」

一回戦の会場へと着いてみると、そこにいたのは知っている人だった。

「ああ、一回戦の相手は喜多嬉さんだったんですか」

一回戦の相手は社交ダンス部所属、メイ＝喜多嬉さん。この街でかなりの財力をもつ家のお嬢様だ。

父さんが色んな晩餐会などに招かれることもあり、そういった席で彼女とは何度か顔を合わせたことがある。

「あなたも運のないことですね。一回戦目からこのわたくしと戦うことになるんですから。」

まあ、庶民から這い上がってきた家系ですから、その雑草のようなしぶとさで精々わたくしを楽しませてみなさい」

特徴的な金の縦ロールの髪を振りながら高飛車に宣言する喜多嬉さん。

いや、父さんはトップス出身だし、母さんの家系は名門政治家揃いだし、家系的には悪くないと思うんだけど…。

普通は不快に思うところなんだろうけど、この人の場合、一片の曇りもなく本気でそう思ってるっていうのが伝わってきて何故か悪い感情が持てないんだよね…。

しかも、言うだけの実力を持ってるし…。

「あ、あはは…よろしく願います、喜多嬉さん」

「と・く・べ・つに、お相手して差し上げるわ！」

「デュエル!!」

遊輝 LP4000

喜多嬉 LP4000

「身の程を知りなさい！ わたくしのターン、ドロー！」

そういえば晩餐会で何度か戦ったことがあるけど、確かこの人のデツキって…。

「手札から、《黒魔術のカーテン》を発動！ わたくしはライフを半分払ってデッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚しますわ！」

喜多嬉

LP4000 2000

《ブラック・マジシャン》 星7 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻250
0 / 守2100

でた、初代デュエルキング、武藤遊戯さんのエースカードとして有

名な《ブラック・マジシャン》だ。

そう、喜多嬉さんのデッキは《ブラック・マジシャン》とそのサポートで戦う《ブラック・マジシャン》デッキなのだ。

「わたくしはカードを1枚伏せてターンエンド」

「僕のターン、ドロ―！ 手札から魔法発動、《ブラック・ホール》！」

フィールドにブラックホールが発生して、《ブラック・マジシャン》が砕け散った。

よし、攻撃力の高い《ブラック・マジシャン》は処理できた。ただ、僕の手札に伏せカード除去はない。

だが…防御のトラップカードは手札に十分、ここは攻めよう。

「僕は《カードガンナー》を攻撃表示で召喚します」

《カードガンナー》 星3/地属性/機械族/攻 400/守 400

「《カードガンナー》の効果発動、デッキトップから墓地へ3枚のカードを送り、エンドフェイズまで攻撃力を1500ポイントアップ」

《カードガンナー》 攻撃力400 1900

墓地に落ちたカードは…《ダーク・アームド・ドラゴン》に《カオス・ソルジャー》 - 開闢の使者…に《冥府の使者ゴーズ》。
…ありえない運の悪さだ。

僕の切り札的なカードが3枚も墓地に落ちちゃったよ。

というか《ダーク・アームド・ドラゴン》！ 君は毎回毎回、墓地に落ちすぎだよ！

もはや墓地が定位置になってるよ！

…あまりのことに若干めまいを覚えたけど、とりあえずここはバトルを続行しよう。

「バトル！ 《カードガンナー》でダイレクトアタック！」

「トラップカードオープン！ 《正統なる血統》！！
墓地から《ブラック・マジシャン》を復活させますわ！」

伏せていたのは蘇生カードだったのか。

「《カードガンナー》の攻撃は中止、バトルフェイズを終了させます。僕は2枚のカードを伏せてターンエンド」

「わたくしのターン、ドロー！」

さて…どうするつもりかな？

僕の伏せカードは《次元幽閉》に《砂塵の大竜巻》だ。

攻撃してきたら二度と蘇生できないように《ブラック・マジシャン》を次元の彼方へ葬れる。

万全の体制のはずだが…。

「手札から魔法発動！ 《黒・魔・導》ブラック・マジック！！！」

あなたの場の魔法・トラップをすべて破壊しますわ！」

そうだ、忘れていた。

《ブラック・マジシャン》の真価：それは数々のサポートカードにあることを。

「くう！ その効果にチェーンしてトラップ発動！」

《砂塵の大竜巻》！ 《正統なる血統》を破壊する！」

こちらの《次元幽閉》は破壊されてしまったが、代わりに《ブラック・マジシャン》を再び葬れた。
これで…。

「手札から魔法発動、《死者蘇生》！」

墓地から《ブラック・マジシャン》を復活させますわ！」

「また蘇生!?!」

「バトル！ 《ブラック・マジシャン》で《カードガンナー》を攻撃！」

ブラック・マジック!?!」

黒い波動に巻き込まれ、《カードガンナー》が粉々に砕け散った。

「くう!?!」

遊輝

LP4000 1900

「ターンエンドですわ」

「僕のターン、ドロ。僕は裏守備表示でモンスターを召喚。カードを2枚伏せてターンエンド」

「わたくしのターン！ ドロー！！ …ふふっ！」

笑った？

「これで終わりですわ！ 手札から《千本ナイフ》サウザン下発動！ そのモンスターを破壊しますわ！！」

！？

《ライトロード・ハンター ライコウ》が！？

「そして手札から魔法発動！ 《黒・魔・導》ブラック・マジック！！
あなたの場の魔法・トラップをすべて破壊しますわ！」

二枚目の《黒・魔・導》ブラック・マジック！？
マズい、これが通ったらガラ空きだ！？

「速攻魔法発動！ 《月の書》！！
《ブラック・マジシャン》を裏守備表示にする！！」

伏せていた《聖なるバリア・ミラーフォース》は粉々に砕け散るが、なんとかギリギリで防ぐことは出来た。

「くっ、運のいいこと！ わたくしはターンエンドですわ」

「くう…」

正直戦況は悪い。

こちらの場はガラ空きであちらの場には裏守備表示とはいえ強力な《ブラック・マジシャン》。

おまけにこちらは防御用のトラップの多くと、切り札の数々を失っている。

相手は豊富な蘇生カードを持っていることから、トラップが伏せられていない今が恐らく最大のチャンスだ。

このターンで《ブラック・マジシャン》を突破し、押しきる。次のドロウ、これに賭けるしかない！

「僕のターン、ドロオオオオー！！」

僕は気迫と共に引いたカードを見る。

そのカードは…。

「来た！ 魔法発動、《おろかな埋葬》 ……！！

デッキの《グローアップ・バルブ》を墓地に送ります」

これで準備は整った。

母さん、使わせてもらおうよ！

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚！

効果によつて墓地の《ライトロード・ハンター ライコウ》を特殊召喚！

同時に、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウオリアー》を手札から特殊召喚！

レベル2の《ライトロード・ハンター ライコウ》とレベル2の《ドッペル・ウオリアー》に、

レベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

2 + 2 + 3 = 7

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！
シンクロ召喚！現れよ、《ブラック・ローズ・ドラゴン》！」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》 星7 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻
2400 / 守1800

「な、何故そんなレアカードをあなたが！？ わたくしですら持っていないのに！」

喜多嬉さんが悔しそうに声を上げる。

父さんはこの街を救った英雄になった。

そんな父さんとその仲間を記念して、実は父さんたちのエースモンスターたちは数枚つつ生産され、世の中に出回っているのだ。

だが、これはそのとき量産されたものではない。

誕生日に母さんから贈られた、オリジナルのカード…正真正銘の母さんのエースカードだ。

誰もが現れた黒い薔薇の華麗なる龍の美しさに見とれる。

だが綺麗な薔薇には棘がある。

特にこの黒薔薇龍の棘は特大だ。

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動！

1ターンに1度、自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に存在する守備表示モンスター1体を攻撃表示にし、

このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を0にする！」

「な、なんですって!?!」

「墓地の《グローアップ・バルブ》を除外し、効果発動! ローズ・リストリクション!」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》から茨の触手が伸び、裏守備状態だった《ブラック・マジシャン》を縛り上げ、強制的に表側攻撃表示にした。

苦しみ悶える《ブラック・マジシャン》の攻撃力が0になる。

《ブラック・マジシャン》 攻撃力2500 0

「バトル! 《ブラック・ローズ・ドラゴン》で《ブラック・マジシャン》を攻撃!

ブラック・ローズ・フレア!」

「きゃああああ!」

喜多嬉

LP2000 0

ワアアアアアア

「ありがとうございます。楽しいデュエルでした」

そう言って頭を下げると、尻もちをついた喜多嬉さんへと手を差し伸べる。

「ふ、ふん！ いまのは…負けて差し上げたのです！！
感謝することですわね！！」

赤くなりそっぽを向きながら、喜多嬉さんは僕の手を取って立ちあがった。

「ま、まあ、わたくしも楽しめましたわ。
褒めてあげてもよかったですよ」

「あ、あはは…」

この人のどんな時でも変わらない姿勢には見習つところがあるかもしれない。

「それじゃ、僕はこれで…」

「お待ちなさい、不動遊輝」

会場から下がるうとしていた僕に喜多嬉さんが声をかけてきた。

「なんですか？」

「不動遊輝、生徒会は…いえ天宮照子はあなたの作ったライディングデュエル同好会をどうあっても潰すつもりですわ。」

全ては個人的な八つ当たりのために…」

八つ当たり？

どういうことだろうか？

「わたくしも面白そうということでああなたの相手を受けましたが、わたくしに勝った以上、他の有象無象に負けることなど許さなくてよ！」

いいですわね!！」

おそらく、これがこの人流の精いっぱいの励ましなのだろう。

「ありがとうございます、喜多嬉さん。」

大丈夫、僕は負けません」

そうお礼を言って僕は会場を後にした。

これで一回戦突破、でもまだまだ四分の一を超えたにすぎない。僕たちライディングデュエル同好会の、長い一日は始まったばかりだ。

……T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまと！」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「いきなりの急展開！ 学園物の王道、部費争奪トーナメントが始まりましたね、メグちゃん」

恵「次回はゆまの戦いになる…ゆま、ふぁいと」

ゆま「はい！ 今から次回が楽しみです！！」

恵「…敵は恐らく今までの中で最強の敵らしいけど（ボソッ）」

ゆま「へ？ なんですか、メグちゃん？」

恵「何でも無い…。それより今回の最強カードは…これ」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星7/炎属性/ドラゴン族/攻2400/守1800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外する事で、

相手フィールド上に存在する守備表示モンスター1体を攻撃表示にし、

このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を0にする。

ゆま「アキおばさんのエースカードですう！」

恵「出た瞬間、場をリセットできるのは強力。さらに召喚制限も緩く、シンクロ召喚を使用するデッキならほぼ間違いない入っているカード……」

ゆま「後半の効果は以前は植物族以外ではめったに使われなかったんですが、

《グローアップ・バルブ》、《スポーア》、《ローンファイア・ブロッサム》、《ダンディライオン》などデッキを選ばない優良カードが増えて、結構色んなデッキで見れるようになりました！」

131

恵「《冥府の使者ゴーズ》や《バトルフェーダー》のように、

ダイレクトアタックで効果を発動するモンスターの存在から、通常戦闘の方が都合がいい場合もある。

そんなとき今回のようにフィニッシャーになることも……どちらにしる良カード」

ゆま「今回はここまでです！」

恵「また次回……」

第05話 廃部危機！？ 開催、部活対抗トーナメント（後書き）

遂に出ました、シグナードラゴン。

アキさんは非シンク口型植物族になり、ブラックローズは遊輝にプレゼントされました。

ちなみに遊輝の保有しているシグナードラゴンはこれだけです。

間違っても星屑龍とかは入っていませんのでご安心を。

第06話 ゆま、危機一髪(前書き)

何度テストプレイしても、デュエルがこれ以上長くならない…。
アニメみたいに長々戦うのは難しいなあ…。

第06話 ゆま、危機一髪

Side ??

ふふふ、あれが私の相手ね。

生徒会長に相手をしろって言われた時には、正直乗り気じゃなかったわ。

だって英雄の息子だって言っても、男だもん。

男なんて臭くって不潔でサイテー！

そんな汚いものなんかとデュエルなんかしたくない。

でも、実際に私の相手になるのは、何とも私好みな可愛い女の子。

天然ボケ巨乳っ子なんて、すっごく好み！

うん、これはもう、うちの部に連行…いやいや監禁…もとい保護するしかないわね！

そうとなれば、すぐにあの汚らしい男の魔の手からすぐに救い出してあげるからね。

待っててね、ゆまちゃん！

Side out

Side ゆま

「ほう!?!」

何でしょう、今ぞわって背中に悪寒が走りましたあ!

「? どうしたの、ゆま?」

「な、何でもないです、ユウくん」

心配そうに私の方を見てくるユウくん、私は愛想笑いを返すけど嫌な予感がひしひしとする。

そう、何か大切なものが狙われているような、すごい嫌な予感。

「ゆま、もう時間…」

「あ、はい!」

メグちゃんに言われて私は会場の方へと歩いて行きます。

今度の相手は女子テニス部部长、三年生の大庭ナオミ先輩です。

とっても強いつて有名な人らしいんで、気を引き締めないと負けちゃいます。

「よし! 行って来ます、ユウくん、メグちゃん、ケイト先生!」

「頑張つて、ゆま!」

「ゆま、応援してるから…」

「負けるんじゃないよ、ゆま!」

ユウくんたちの声援を背に、私は会場へと歩いて行きました。

「来たわね、ゆまちゃん」

「はい、お待たせしましたあ」

会場では、すでにナオミ先輩が待っていました。
仁王立ちで何やら自信満々…これは強そうです。
さっそくデュエルディスクにデッキをセットして準備に入ります。
すると、

「ねえ、ゆまちゃん。私と賭けをしない？」

「ほえ？ 賭け、ですか？」

私は何のことか分からず、首を傾げる。

「生徒会長から聞いているわ。あなたたちのライディングデュエル同好会はこのトーナメントで優勝しないと廃部なんですよ？
なら、この勝敗で賭けをしないかしら？
あなたが勝ったら…そうね、郊外のカイバーシーランドの年間フリーパスをあげるわ。

そのかわりあなたが勝ったら、私の女子テニス部に入部すること。

「どうかしら？」

その言葉に、私は考えてしまいます。

この賭け、私に損がどこにもないのです。

カイバーシーランドの年間フリーパスはとっても魅力的ですし、このデュエルに負けたらライディングデュエル同好会は続けられない。だからその後、女子テニス部に入部というのも無理な話ではないです。
でも…。

（あう…何だか、すっごく嫌な予感がします…）

ナオミ先輩の視線がさつきからものすごく…こっ、絡みつくみたいなんです。
でも魅力的な話だし…。

（助けて、私のHERO！）

そう心の中で叫ぶと、どこからか声が聞こえた気がした。

（ここで退いたら女がすたる！！）

女の子のHEROから、そんな声が聞こえた気がします。

「分かりました！ その賭け受けて立ちますです！！」

「OK、そうこなくっちゃ！」

私はデッキをデュエルディスクにセットする。

「デュエル!!」

ゆま LP4000

ナオミ LP4000

「先攻は私です! ドロー!」

あうう…手があんまり良くない…。
でも行くしかない!

「《E・HERO エアーマン》を通常召喚!」

《E・HERO エアーマン》 星4/風属性/戦士族/攻180
0/守 300

「《E・HERO エアーマン》の効果発動、デッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加えます!

手札に加えるのは《E・HERO オーシャン》!
そしてターンエンド!」

「あら、伏せカード無し？ 手加減してあげようか？」

ナオミ先輩が鼻で笑います。

うう…：そう言われても無いものはどうしようもないですう…。

「私のターン、ドロー！ 私は手札から《ライトロード・パラディン ジェイン》を通常召喚！」

《ライトロード・パラディン ジェイン》 星4 / 光属性 / 戦士族
/ 攻1800 / 守1200

「バトルよ、ジェインでそこの空気男を攻撃！」

く、空気男って…。

「ジェインは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップするわ！」

00 《ライトロード・パラディン ジェイン》 攻撃力1800 21

「ライトスラッシュー！！」

「あう！？」

ゆま

LP4000 3700

ジェインの剣によってエアーマンが切り倒されてしまいました。
ごめんなさい、エアーマン。

「私は手札を2枚伏せターンエンド！ エンドフェイズ時、ジェインの効果によってデッキの上からカードを2枚墓地へ送る」

墓地に送られたカードは《ライトロード・プリースト ジェニス》
に《ライトロード・レイピア》。

「私はデッキから《ライトロード・レイピア》が墓地に送られたため、《ライトロード・レイピア》を「ライトロード」と名のついたモンスター1体に装備。ジェインに装備よ！

ターンエンド！！」

00 《ライトロード・パラディン ジェイン》 攻撃力1800 25

この一連の動きを見て、私はすぐにナオミ先輩のデッキが分かりました。

(はう！？ ライトロードですう！？)

ライトロード…光属性で統一されたシリーズモンスター群で、デッ

キから墓地にカードを送ることで強力な効果を発揮したり、モンスターを維持したりします。

デッキのカードがすごいスピードで墓地に落ちるため短期決戦用なのですが、まさに『やられる前にやる』デッキです。

考え方を変えると、墓地を肥やしてくれるカードなので色んなデッキでそのパーツが使われており、ユウくんも《ライトロード・マジシャン ライラ》と《ライトロード・ハンター ライコウ》を使っています。

確かメグちゃんも使っていたような…。

それだけ優秀なカードたちであり、それを操るナオミ先輩はとんでもない強敵です。

お願い、いいカードが来て！

「私のターン。 ドロー！ …ほえ？」

「何？ 変なカードでも引いたの？」

いえ、変と言うより…。

「手札から今引いた魔法カード《大嵐》を発動ですう」

「なっ！？ このタイミングで引いたの！」

ナオミ先輩が驚きの声を上げますが、私だってびっくりです。本当にいいカードが来ちゃいました。

ナオミ先輩の2枚の伏せカードと、《ライトロード・レイピア》が碎け散ります。

《ライトロード・パラディン ジェイン》 攻撃力2500 18

砕けた伏せカードは《ライト・パニッシュ》と《ライトロード・バリア》だった。

ふう…よかったです。

そして…私はフェイバリットカードが召喚出来ます！

「行きます！ 手札から魔法発動、《融合》！

手札の《E・HERO ネクロダークマン》と《E・HERO

オーション》を融合！

来て、私のフェイバリット！ 《E・HERO アブソルートZero》！」

《E・HERO アブソルートZero》 星8 / 水属性 / 戦士族
/ 攻2500 / 守2000

瞬間、私のフィールドに現れたのは氷を纏ったHEROでした。

氷のようにクールで、熱い激情を心に秘めたそのHEROが静かに私の隣に降り立ちます。

「バトル！ アブソルートZeroでジェインに攻撃！

瞬間氷結！！」

アブソルートZeroから放たれた絶対零度の吹雪が、ジェインを粉々に砕きました。

ナオミ

LP4000 3300

「私はカードを1枚伏せてターンエンドです」

「くっ…結構強力なモンスターじゃないの！ 私のターン、モンスターを裏守備表示で召喚、さらに1枚カードを伏せてターンエンドよ！」

「ナオミ先輩のエンドフェイズに私はトラップ発動！ 《リビングデッドの呼び声》で《E・HERO エアーマン》を特殊召喚です！そして《E・HERO エアーマン》の効果発動、その伏せカードを破壊します！」

「な、なんですって!?!」

砕けた伏せカードは…ミラーフォース!?!
危なかったです。でもこれで心おきなく攻撃出来ます。

「私のターン、ドロー！ 《E・HERO プリズマー》を攻撃表示で召喚！」

《E・HERO プリズマー》 星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻170
0 / 守1100

「《E・HERO プリズマー》の効果発動、エクストラデッキから融合モンスター1体を相手に見せ、そのモンスターにカード名が

記されている融合素材モンスター1体を自分のデッキから墓地へ送って発動。このカードはエンドフェイズ時まで墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。

私は《E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン》を見せ、その融合素材の《E・HERO スパークマン》を墓地に送り、このターンの間プリズマーはスパークマンとして扱います。

リフレクト・チェンジ!!

そしてバトルです!

プリズマーで裏守備モンスターに攻撃!

プリズムレイ!!

「く…このカードは《ライトロード・ドルイド オルクス》よ」

《ライトロード・ドルイド オルクス》 星3 / 光属性 / 獣戦士族
/ 攻1200 / 守1800

「あう…」

ゆま

LP3700 3600

失敗しました。プリズマーでは防御を突破出来ません。

先にアブソルトZeroで攻撃をしておくべきでした…。

「ではアブソルトZeroでオルクスに攻撃!

瞬間氷結!!

さらにエアーマンでダイレクトアタック！ エア・プレッシャー
！！」

「くう……」

ナオミ

LP3300 1500

「私はターンエンドです！」

「くう、なんなのよそのうざいモンスターたち！ インチキ、イン
チキよ！！」

ナオミ先輩が劣勢のためかHEROたちをインチキ呼ばわりしてき
ます。

ライトロードは十分インチキの部類に入る強さだと思っています。
それでどの口がインチキと言いますですか……。
それにデュエリストとして、ちょっと感心出来ないう……。。

「私のターン、ドロオオオー！！」

そんな風に参加の中でナオミ先輩の評価がダダ下がりなのですが、ナ
オミ先輩がカードをドロした瞬間に、背中にゾクリと悪寒が走り
ました。

はう！ すごくマズイ予感が……。

「私は手札から《光の援軍》を発動。デッキの上からカードを3枚
墓地へ送って、手札に《ライトロード・パラディン ジェイン》を

加える！

「これが勝負所よ！」

そう言つてデッキから墓地に落ちて行くカードは《ライトロード・モンク エイリン》に《ライトロード・エンジェル ケルビム》、そして《死者転生》です。

それを見て、ナオミ先輩は笑いました。

「私は賭けに勝つた！」

墓地の「ライトロード」と名のついたモンスターが4種類以上存在する今、私の切り札が召喚できる！

手札から《裁きの龍》ジャッジメント・ドラゴンを特殊召喚！」

《裁きの龍》ジャッジメント・ドラゴン 星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2600

146

閃光が走り、光の中から一体のドラゴンが現れます。
その神々しさに私は思わず、怯んじやいました。

「ライフを1000ポイント払い《裁きの龍》ジャッジメント・ドラゴンの効果発動！！

《裁きの龍》以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊する！ ラスト・ジャッジメント！！」

ナオミ

LP1500 500

瞬間、《裁きの龍》ジャッジメント・ドラゴンの咆哮に答えるように、稲妻が降り注ぎます。

その直撃を受けて私のHEROたちが砕け散って行きました。
でも…私のHEROたちはタダではやられません！

「《E・HERO アブソルーツZero》の効果発動！

フィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊するです！

砕け散れ、エターナルアイスブリザード!!！」

効果、のモンスター相手は死ぬ、ですう！

絶対零度の猛吹雪に巻き込まれ、凍りついた《裁きの龍》ジャックシメント・ドラグーンがバリんと音をたてて砕け散りました。

「でもこれですっきりしたわ！ 私は手札から《ライトロード・パラディン ジェイン》を通常召喚！」

《ライトロード・パラディン ジェイン》 星4 / 光属性 / 戦士族
/ 攻1800 / 守1200

「バトルよ、ジェインでダイレクトアタック!!！」

ゆま

LP3300 1500

「そしてターンエンドよ。 エンドフェイズ時、ジェインの効果によってデッキの上からカードを2枚墓地へ送る」

墓地に送られたカードは《ライトロード・ハンター ライコウ》に
《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》。

「あう……」

一気にライフを詰められてしまいました。

これで私も、ナオミ先輩の射程圏内に入ってしまった。

とはいえ、私の2枚の手札は《E・エマーゼンシーコール》に《
パラレル・ワールド・フュージョン
平行世界融合》。

これなら次のターンで決められそうで……。

そこまで考えた時、私はゾクリと背中に悪寒が走るのを感じました。
ナオミ先輩が1枚手札を残している……。

この土壇場なら使えない罫も魔法も、伏せればブラフにはなりません。
そうしないところをみるとあれはモンスターカード。

でもそれで一体、なんでこんなにイヤな予感が……？

そこまで考えて、私はハッと気付きました。

そうです、ライトロードは『光属性』で統一されたシリーズ。
いるじゃないですか、光属性の強力サポートカードで、手札にいな
いと意味の無いモンスターカードが……。

……ダメです、あの最後の手札が私の考えている通りなら、この2枚
の手札だけじゃ勝てません。

次のドロウ、これが運命の分かれ道です。

私は祈る思いで、カードに手を伸ばします。

「おじいちゃん、私に力を……ドロオオー、ですう……！」

そして引いたカードは……。

Side out

Side ナオミ

ふう…一時はどうなる事かと思ったけど、勝ちが見えたわね。

ゆまちゃんのデッキは明らかなパワーデッキ、ジェインを戦闘で破壊して突破を試みるだろう。

だがそれならこっちのもの、そのパワーをそっくりお返しするまでだ。

私の最後の手札…それは《オネスト》だ。

手札に《オネスト》がある以上、私に戦闘での敗北はありえない。

ジェインに攻撃をしかけて来た時…それでゲームエンドよ。

そうすれば晴れて、ゆまちゃんは私のハーレム…じゃなかった、女子テニス部に入部だ。

さあ、ゆまちゃん、男なんてばっちいものより、綺麗で清潔な女の子のほうがずっといいって言うことをこれから手とり足とり教えてあげるわ。

「私に力を…ドロオオー、ですう!!!」

ゆまちゃんがカードをドロウするけど、無駄よ無駄。

そうそうこの状況を突破できるカードなんて引けるはずが…。

「やったあ！　ありがとうございます、おじいちゃん！」

ゆまちゃんが引いたカードを手に満面の笑み。

まさか…この状況で勝利のキーカードを引いたというの！？
何よ、そのドロー運！　インチキ、インチキよ…！

S i d e o u t

S i d e ゆま

「やったあ！　ありがとうございます、おじいちゃん！」

引いたカードは今を打開してくれる勝利のカードでした。

祈りを聞き届けてくれたおじいちゃんに感謝、です。

あ、ちなみにおじいちゃんは別に元気ですよ。

田舎で今でも近所の子供たち相手にデュエルしてます。元気すぎる
って、明日香おばあちゃんが呆れてました。

「私は手札から《E・エマーシエンシーコール》を発動させます。

この効果で《E・HERO エッジマン》を手札に加えます」

「この状況で最上級モンスターを手札に？」

ナオミ先輩は訳が分からないようです。

確かにリリースが2体必要になる最上級モンスターを、このタイミングで手札に加えても普通意味はありません。

でも…それを墓地にいる《E・HERO ネクロダークマン》が意味をもたせませす。

「墓地の《E・HERO ネクロダークマン》の効果によって、1度だけレベル5以上の「E・HERO」と名のついたモンスター1体をリリースなしで召喚する事ができます。

《E・HERO エッジマン》を通常召喚！」

《E・HERO エッジマン》 星7/地属性/戦士族/攻260
0/守1800

攻撃力満点の、巨躯を誇るHEROエッジマンが場に現れます。

これで勝利のための全てのピースが揃いました。

私はさつき引いたカードを発動させます。

「私は手札から魔法発動、《ミラクル・フュージョン》ですう！」

《ミラクル・フュージョン》は自分のフィールド上または墓地から融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚します」

そう、だからこそ《E・HERO エッジマン》を場に召喚する必

要があつたんです。

そしてこの状況突破するHEROは…。

「場の《E・HERO エッジマン》と墓地の《E・HERO スパークマン》を除外。

来て私のHERO！ 《E・HERO プラズマヴァイスマン》
ですう！！」

《E・HERO プラズマヴァイスマン》 星8 / 地属性 / 戦士族
/ 攻2600 / 守2300

「《E・HERO プラズマヴァイスマン》の効果発動です。手札を1枚捨てる事で相手フィールド上の攻撃表示モンスター1体を破壊します」

「な、なんですって！」

「手札の《パラレル・ワールド・フュージョン平行世界融合》を捨て、《ライトロード・パラディン
ジェイン》を破壊します！

スパークヴァイス！！」

プラズマヴァイスマンから放たれた雷撃が、ジェインを押しつぶしました。

私の思っているとおり、手札が《オネスト》なら単体では何の役にも立ちません！

これでナオミ先輩を守るものは何もないはずです！

「バトル！ 《E・HERO プラズマヴァイスマン》でダイレク

トアタック！

プラズマエッジ！！」

「きゃああああー！！！！」

ナオミ

LP5000

「やったあ！ ラッキーでした！！」

本当にラッキーでした。最後にあの引きが出来なかったら恐らく負けていたと思います。

「く、くやしいい。私の計画が…」

ナオミ先輩は心底悔しそうです。

やっぱりデュエリスト、自分の信じたデッキが負けたから悔しいんだと思います。

「ナオミ先輩、ありがとうございました。
それと…」

私はぺこりと頭を下げ、そしておじいちゃんから教わったあの言葉

を言います。

「ガツチャ！ 楽しいデュエルでした！」

そう言うと、悔しそうにしていたナオミ先輩は毒気が抜けたような顔を見せた後、コロコロと笑いました。

「ふう… やっぱりあなた、私が見込んだだけあって憎めないわね」

「あはは、ありがとうございますです」

「約束通り、今度フリーパスはあげるわ」

そう言って手を振りながら会場から去って行くとするナオミ先輩。その途中、ナオミ先輩は思い出したかのように振り向きましました。

「そうそう、女子テニス部への入部はいつでも大歓迎だから、ライディングデュエル同好会が潰れることになったらいつでも来なさい。無論、それ以外でも来ていいわよ。

掛け持ちだつて大歓迎。

私、あなたのことますます気に入っちゃったから」

そうやってニヤリと笑うナオミ先輩に、何故かぞくりと悪寒が走りました。

「…女子テニス部に近付くのはやめた方が良さそうです」

そんな風に私は心に決めたのでした。

……To be continued

ゆま「ゆまと！」

恵「恵の……」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「初デュエルを勝利で飾り、今なら誰にも負ける気がしねえ！
って感じのゆまです」

恵「ゆま、それは負けフラグ……」

ゆま「ほえ？」

恵「それより今回の最強カードの紹介……」

ゆま「そうでした！ 今回の最強カードはこれですう！」

《E・HERO アブソルトZero》

融合・効果モンスター

星8 / 水属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

「HERO」と名のついたモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する
「E・HERO アブソルートZero」以外の
水属性モンスターの数×500ポイントアップする。
このカードがフィールド上から離れた時、
相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

恵「…トドメをさしたカードじゃないけど、いいの？」

ゆま「はい、この子が私のフェイバリットカードですう！」

恵「…そのフェイバリットの出番が敵を巻き込んで退場、トドメを
他に任せるといっなのはどっなの？」

ゆま「はう！？ まあ、今回は仕方なしですう」

恵「…まあいい。このカードは強力な効果を持つ属性HEROの
中でも特に強力」

ゆま「擬似的とはいえ、あの禁止カード《サンダー・ボルト》の効
果は凄いですう！

しかも墓地に落ちた時じゃなく、『フィールド上から離れた
時』なので除外だろうとバウンスだろうと効果が発動します！

《亜空間物質転送装置》や《パラドックス・フュージョン》
なんかと抜群に相性がいいです」

恵「…攻撃力の上昇効果も悪くない。水属性は優良なカードに恵
まれてる」

ゆま「あと今回はできませんでしたが、《M・HERO ヴェイパー》に繋げるのもいい感じですよ。

ダイレクトアタック後、《マスク・チェンジ》で《M・HERO ヴェイパー》に変えて合計4900ダメージとかお得ですよ」

恵「…伝統的な主人公モンスターの攻撃力2500のステータス、強力な効果、そして外見…まさに最強のHERO」

ゆま「私のお気に入りですよ！」

恵「今回はここまで…」

ゆま「次回はメグちゃんの試合です。メグちゃん、がんばって！」

恵「うん…」

第06話 ゆま、危機一髪（後書き）

遊輝がシンクロによる柔軟な戦術なら、ゆまは融合による爆発力と祖父譲りのドローク力で戦うタイプ。

HERO、ライロともにパワーカードで決まる時は一瞬になってしまうのでデュエル展開を考えるのが大変でした。

HEROは選択肢がたくさんある分、考える事が多くて…正直今までが一番難儀したデュエルです。

今回はもっと頭抱えるデュエルです。

第07話 それぞれの戦う理由（前書き）

今回は恵ちゃんの初陣です。

第07話 それぞれの戦う理由

Side ???

ちくしょお、生徒会長のヤロー！

ライディングデュエル同好会に勝たなきゃ、あいつの部活が廃部だ
あ！？

好き勝手言ってくれやがってー！！

…ちい！ 気に入くわねえけど、やるしかない。

ライディングデュエル同好会のやつらも、どうやら優勝できなきゃ
廃部らしい。

同じような境遇で同情はしてやるが、どうあっても勝たせてもら
うぜ。

でも…生徒会長、テメエの思い通りに行くと思うなよ！

ライディングデュエル同好会をぶっ潰したら、次はテメエだ！！

決勝戦の舞台で、必ず吠えづらかかせてやる！！

Side out

Side 恵

「…問題ない」

そろそろ準決勝の時間。

私は最終確認をしたデッキをデュエルディスクへセットする。

ユウもゆまも勝った。

私も勝つて繋げなければならぬ。私たちライディングデュエル同好会の存続への希望の道を…。

「恵、頑張つて」

「メグちゃん、ファイトですう！」

「負けんじやないよ、恵！」

「大丈夫…任せてほしい…」

私は頷くと、大会会場へと歩き始めた。

相手は二年生でも最強ランクに位置する緋紫先輩率いる茶道部だ。

でも…負けない。倒してみせる。

そう思いながら会場へと到着した私を出迎えたのは、意外な人物だった。

「…来やがったな、ライディングデュエル同好会」

「…？」

そこには赤い野球帽をかぶった女子の姿があった。制服の学年を表すラインから、二年生だとわかる。

鋭い目つきと言葉遣いから、ボーイッシュというより男らしいと言った方がしっくりくる。

この人は確か…。

「…ジャツカル…岬？」

「先輩を付けな、一年！」

私の言葉に、岬先輩は機嫌を悪くしたように吠える。

…これは悪いことをしたかもしれない。

「…失礼しました、岬先輩」

「わかりやいいんだよ、わかりや」

そう言つて帽子を深く被りなおす岬先輩。

彼女、ジャツカル…岬は、この学園でも有名な人だ。

自称『デュエルアカデミアの女番長』。口調も性格も荒っぽく、ケンカっ早い。

デュエルの腕も凄まじく、二年の中では紬紫先輩と並び最強の一人として数えられている人だ。

しかし…。

「…質問？」

「なんだよ？」

「…私たちの相手は…茶道部のはず。 ……茶道部？」

「合わない、ってか？」

「はい。 どう鼻屑目に見ても茶道部に合わない…」

「はつきり言うな、一年」

私の言葉に、岬先輩は苦笑する。

「安心しな、俺にもその自覚はある。

紫とはダチでな、俺は人数合わせの部員だよ。

紫は身体が弱くてな、かわりに俺がお前らライディングデュエル同好会をぶっ潰すことになった！」

「岬先輩も…生徒会からの刺客？」

「…ああ」

目をそらすように目深に帽子を直しながらのその言葉に、私は眉をひそめる。

伝え聞いた彼女の人柄とは違う。彼女は曲がったことが嫌い、それに助けられた生徒も多く一年生の間で人気がある。

今回の生徒会からの圧力は彼女の言うところの『曲がったこと』だろう。

それに静観するのならまだしも、協力するというのはいくらなんでもおかしい。

「とにかく、お前の相手はこの俺だ。悪いがブツ潰させてもらっ
ぜ！」

「どっからでもかかってこいや!!」

「私も…負けられない。」

「勝敗を…!」

「デュエル!!」

恵 LP4000

岬 LP4000

「…私の先攻、ドロ!。 ……モンスターを裏守備表示。 カードを
1枚伏せターンエンド」

「俺のターン、ドロ! 手札からチエーンソー・インセクト《電動刃虫》を召喚!」

《チエーンソー・インセクト電動刃虫》 星4 / 地属性 / 昆虫族 / 攻2400 / 守 0

私はそれを見て眉をひそめる。

《チエーンソー・インセクト電動刃虫》は上級モンスター並みの攻撃力を持つが、ダメージス

テップ時に相手プレイヤーにドロウを許すデメリットを持つカードだ。

通常のデッキに入るモンスターではないが…。

「シメてやるよ…バトル！ チエーンソー・インセクト 《電動刃虫》で裏守備モンスターに攻撃！

スタッグチエーンソー！！」

「裏守備表示モンスターは《ライトロード・ハンター ライコウ》。

チエーンソー・インセクト 効果により墓地にデッキトップから3枚のカードを送り《電動刃虫》を破壊する…」

墓地へ落ちたカード… 《馬頭鬼》に《リビングデッド呼び声》に… 《オネスト》。

《馬頭鬼》が落ちたのはうれしいが、戦闘能力が低い私のデッキの切り札である《オネスト》が落ちたのはいただけない。

「さらに チエーンソー・インセクト 《電動刃虫》の効果で私はカードをドロウ…」

「ちい…俺はカードを二枚伏せターンエンドだ」

「…そちらのエンドフェイズ時、伏せカード発動、《サイクロン》… 右側のカードを破壊…」

砕け散る伏せカード。それは…。

「… 《スキルドレイン》」

そのカードを見て、私は彼女のデッキを悟る。

彼女のデッキ、それは《スキルドレイン》によって攻撃力のあるデ

メリットアタッカーのデメリットを無効化し、相手を圧倒するデッキだ。

除去カードが少なく、効果によって戦う私のデッキでは相性が悪い。

(《スキルドレイン》発動前に決着を…！)

私は若干の焦りを持ちながら自分のターンを開始した。

「私のターン、ドロ。手札から魔法カード、《死者蘇生》を発動…」

「させるかよ！ カウンター罠《魔宮の賄賂》！ 《死者蘇生》を無効だ！」

伏せカードは《魔宮の賄賂》だった…運がいい。

最初の《サイクロン》で《スキルドレイン》を破壊出来ていなかったら、除去は困難なものになっていただろう。

だがこれで後顧の憂いなく攻められる。

「《魔宮の賄賂》の効果によって私はカードを1枚ドロ…。

手札から《闇竜の黒騎士》ブラックナイト・オブ・ダークドラゴンを通常召喚…」

《闇竜の黒騎士》ブラックナイト・オブ・ダークドラゴン 星4 / 光属性 / アンデット族 / 攻1900 / 守

1200

「バトル、《闇竜の黒騎士》ブラックナイト・オブ・ダークドラゴンで攻撃…大きい…」

「くう!?!」

岬

LP4000 2100

「だがこの瞬間、俺は手札から《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚するぜ！」

《冥府の使者ゴーズ》 星7 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2700 / 守2500

「さらに効果によって「冥府の使者カイエントークン」を召喚！」

「冥府の使者カイエントークン」 星7 / 光属性 / 天使族 / 攻1900 / 守1900

「むう……」

ゴーズを召喚してしまった。全体的に戦闘能力が低く、除去の少ない私のデッキにとってこのクラスの攻撃力のモンスターはかなり強大だ。

「…私はカードを2枚伏せ、ターンエンド……」

「俺のターン、ドロー！ 来やがったぜ、俺のエース！」

手札から《神獣王バルバロス》を召喚！

このカードは最上級モンスターだが攻撃力を1900にすることでリリースなしで通常召喚する事ができる！」

《神獣王バルバロス》 星8 / 地属性 / 獣戦士族 / 攻1900 / 守

1200

これ以上モンスターを増やされるのはまずい。

「…トラップカード発動、《激流葬》。

フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する…」

私の《闇竜の黒騎士》ブラックナイト・オブ・ダークドラゴンも破壊されるが、相手のモンスター3体を破壊出来た。

これなら…。

だが、岬先輩はニッと凶悪な笑みをもって私の自信を打ち消した。

「読んでたぜ、手札から魔法発動《死者蘇生》！」

墓地の《神獣王バルバロス》を復活だ！」

《神獣王バルバロス》 星8 / 地属性 / 獣戦士族 / 攻3000 / 守

1200

墓地からの特殊召喚のため、攻撃力が通常の3000の状態でバルバロスが復活してきた。

「さらに最後の手札、装備魔法《愚鈍の斧》をバルバロスに装備、攻撃力を1000ポイントアップ」

《神獣王バルバロス》 攻撃力3000 4000

「!？」

一撃必殺の攻撃力圏内！？

「オラ！ この一撃で終わりだ！ 《神獣王バルバロス》でダイレクトアタック！

トルネード・シエイパー！！」

「速攻魔法発動、《収縮》…。 《神獣王バルバロス》の攻撃力を下げる…」

《神獣王バルバロス》 攻撃力4000 2500

「それでも十分だ！ ぶつ飛べ、オラア！！」

「くっ…痛い…」

恵

LP4000 1500

「俺はこれでターンエンドだ」

「私のターン…」

私は焦りを含みながらカードへと手をかける。

私のデッキは墓地からの特殊召喚がしやすいアンデット族を大量展開し、相手を倒すデッキだ。

だが、アンデット族には除去系の効果を持つモンスターはほぼ皆無…その弱点を補うため《ライトロード・ハンター ライコウ》などの相性のいい除去カードを加えている。

だが、除去カードの絶対数は他のデッキよりも少ない。引き当てられるだろうか…？

「ドロー…」

引いたカードは…ダメ、除去系カードじゃない…。

「モンスターを裏守備表示で召喚…ターンエンド…」

「ハん…俺のエースに手も足も出ないみてえだな…俺のターン、ドロー…！」

俺はスタンバイフェイズに《愚鈍の斧》の効果で500ポイントのダメージを受ける！」

岬

LP 2100 1600

「へへっ…これで終わりだ！
《ゴブリン突撃部隊》を召喚！」

《ゴブリン突撃部隊》 星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守0

「攻撃力2300…」

「バトル、《神獣王バルバロス》で裏守備モンスターに攻撃！ トルネード・シエイパー！」

あっさりと破壊されたカードは《ネクロ・ガードナー》だ。これでこのターンを凌ぐ。

「続けて《ゴブリン突撃部隊》の攻撃！」

「墓地の《ネクロ・ガードナー》を除外し効果発動…。相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

この効果で《ゴブリン突撃部隊》の攻撃を無効にする…」

私に向かって突撃をしかけてきたゴブリンたちは、私のそばに影のように現れたネクロ・ガードナーの不可視の盾によって防がれていた。

「運のいい奴だな…《ゴブリン突撃部隊》を効果によってバトルフェイズ終了時に守備表示に変更、これでターンエンドだ」

「私のターン…」

私にはすでに後が無い。

そう何度も4000を超える攻撃力を凌ぐことはできない。

そう思つて手札を見るが、除去のカードなどは無く単純に壁の役割しかこなせないものばかり。

今回のようにモンスターカードを引かれ、2体で攻撃されればどうしようもない。

しかし…今の手札でも、あのカードを引くことができれば勝利できる。

私のアンデットデッキを中核を成すあのカードを…。

「どんなカードを引こうが、勝つのは俺だ。

茶道部は俺が守る！」

茶道部を守る？

岬先輩の良く分からない言葉に、私はそのまま聞き返した。

「岬先輩…どういふこと？」

「…こつちもお前らと同じだ。生徒会長のヤツにお前らに勝たなきゃ廃部を言い渡されてんだよ。

紫はな、身体が弱くて学校に来てても保健室とを行ったり来たりだ。そのせいで留年だつてしまつてる…。

茶道部はな、そんな紫の学校での心許せる数少ない場所なんだよ。その場所を俺は守る…！」

「…」

「生徒会長のヤツのやり口は気に入らねえ。でもあいつの居場所を守るためなら…俺は汚れ仕事だつて請け負つてやるぞ。」

だから…ライディングデュエル同好会、お前らを潰す！
お前らも、生徒会長もぶっ潰してあいつの居場所を守ってやるんだよ！」

…そうか。このトーナメントに何かを賭けているのは私たちだけではなかったのか…。
それぞれの理由と、それぞれの訳…それがこのトーナメントには入り組んでいる。
でも…。

「私は…退かない…！」

そう、私はユウとゆまが繋げたものを無駄にできない。
ユウとゆまと、楽しく語り合ったライディングデュエルの世界を旅したい。
だから…。

「俺だつて退けるかよ。だからデュエリストらしく全力でかかってこい。」

俺のエースを踏み越えられるもんならな…！」

「超えて見せる、このドローで…！」

これがラストドロー。

カードたちよ…私の声に応えて…！

「最後に…ドロー…！」

私は決意と共にカードを引いた。そのカードは…。

「…来てくれた」

私の願いに応えてくれたカードたちに、少しの笑みがもれる。
そして私は真つ直ぐに岬先輩を見ながら言った。

「岬先輩…あなたのバルバロスを倒す…！」

手札から《邪神機 - 獄炎》ダイクネスキアを召喚…！」

《邪神機 - 獄炎》ダイクネスキア 星6 / 光属性 / アンデット族 / 攻2400 / 守

1400

「このカードはリリースなしで召喚する事ができる。但し、この方法で召喚したこのカードは、エンドフェイズ時にフィールド上にあるカード以外のアンデット族モンスターが存在しない場合、墓地へ送られる。」

この効果によって墓地へ送られた時、私はこのカードの攻撃力分のダメージを受ける…！」

「成程、バルバロスと同じ妥協召喚能力か…。」

でもバルバロスの攻撃力の足元にも及ばないぜ」

確かにそう。今のままでは、バルバロスには勝てない。
だが、今引いたこのカードを使えば話は違う。

「私は手札からフィールド魔法を発動…！」
アンデットワールド

瞬間、周囲の景色が変わる。

そこにあるのは毒の沼に、骨。屍の山に、漂う瘴気。

死者の世界がそこにはあった。

「なんだこりゃ!?!」

「…ようこそ先輩。死人の世界へ。」
アンデットワールド

ここは不死者だけが存在を許される、禁じられた世界。

その効果によってアンデット族以外のモンスターのアドバンス召喚をする事はできず、フィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをアンデット族として扱う」

「はん、何か思えば種族変更のカードか。そんなもんでこの状況が変わるはずが…」

「いいえ、変わる…。それを…今、証明する。」

墓地の《馬頭鬼》の効果を発動。このカードをゲームから除外する事で、自分の墓地からアンデット族モンスター1体を選択して特殊召喚する…。

《アンデットワールド》の効果によって、お互いの『墓地』に存在する全てのモンスターはアンデット族として扱っている…。

不死者として…蘇れ《オネスト》!」

《オネスト》 星4 / 光属性 / アンデット族 / 攻1100 / 守1900

そう、そのために墓地にいるモンスターの種族すら変更する《アンデットワールド》が必要だったのだ。

アンデットは墓地からの復活がかなり容易な種族だが、除去カードが少ないことと戦闘能力が低いという弱点がある。

それを補うのがこの《オネスト》だ。
低い攻撃力を補い、《オネスト》をアンデット族専用の蘇生カード
で使い回す…それが私の『光アンデット』デッキのコンセプトだっ
た。

「そして《オネスト》の効果によって、《オネスト》は私の手札に
戻ってくる。

来い、《オネスト》」

手札に戻った《オネスト》と、場にいる光属性の《邪神機 - 獄炎》
これならば攻撃力の差など関係無い。

「バトル！ 《邪神機 - 獄炎》で《神獣王バルバロス》に攻撃。
カオスヘルフレア！」

「迎え撃て、バルバロス！ トルネード・シエイパー！」

獄炎の放つ炎の中を、バルバロスが意にも介さず一直線に駆け抜け
抜ける。

「ダメージステップ時、《オネスト》を墓地に捨て効果発動。
獄炎の攻撃力をアップする！」

炎を吐き散らす獄炎の背後に、後光とともにオネストが現れる。
そしてオネストの後光と共に獄炎の炎が勢いを増した。

《邪神機 - 獄炎》
攻撃力 2400 6400

炎を突き進んでいたバルバロスの歩みが止まる。
そして勢いを増した業火はバルバロスを打ち砕いた。

「俺の…負けか」

岬

LP16000

「負けちゃったか…」

「…」

息を吐く岬先輩に、私は何も告げられないでいた。私たちに勝たなかったら、茶道部は廃部だという。
私は…。

「あん？ そんな辛気臭い顔してんじゃねえぞ、一年」

いつの間にか近寄ってきた岬先輩は、私の顔を覗き込みながらそんなことを言う。

「こいつは公平なデュエルの結果だ。俺だってデュエリスト、デュエルの結果には従うよ。」

…あいつの茶道部を守ってやれなかった、ってのは残念だけだな」
そう言っつて空を仰ぐ岬先輩。

「まあ、よく考えればあいつとの絆がこれでなくなるわけじゃねえんだ。

茶道部が無かったって、あいつの落ち着ける場所を一緒に探してやるよ…」

そう清々しく言う岬先輩だが、その顔はどこか悔しそうで…。
だから、私は思わず言ってしまった。

「先輩…あなたたちの分まで…ユウが生徒会長に手痛い一撃を届けてください。

だから…」

「おいおい、慰めかい、一年？」

「…」

「だがまあ…俺に勝ったお前がそこまで信じる男だ。
任せるよ」

そう言っつて岬先輩は被っていた野球帽をポンと私にかぶせた。

「頼むぜ。あの生徒会長をギャフンと言わせてやれ」

「はい、必ず…」

岬先輩の言葉に私は強く頷いた。

その答えに納得したのか、岬先輩は私の頭をポンポンと叩くと、後ろ手に手を振りながら舞台から降りて行く。

「じゃあな、一年。次は勝たせてもらっせ」

「…私も負けません」

ゆっくりと去っていく岬先輩の背中に、私は頭を下げる。

それぞれに、それぞれの戦う訳がある。

私たちは今、誰かの戦う訳を押しつけてこの場所に立っている。だから、負けられない。

そして…この集う想いをユウなら形にしてくれる。

私も会場を後にすることにした。

託されたものをしっかりとその胸に感じながら…。

…T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまとー！」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「メグちゃん、初デュエル勝利おめでとーですう！」

恵「ありがとう、ゆま…。でも…本音を言うと不完全燃焼。

スキルドレインデッキ相手なのにスキルドレインが発動していなのはどうなのだろう…?」

ゆま「それですが作者曰く、

『何度TFでテストプレイをしてもスキルドレインを本気で発動されたら勝てん!』

…ということでごうなつたみたいですう。

実際に組んだデッキで戦うと、今回みたいにメグちゃんが《オネスト》使い回して勝つか、愚鈍+バルバで一撃死かという状態だったみたいですよ、LP4000ルールだと」

恵「…やはりLP4000だと戦闘の短期化が問題になる…」

ゆま「それは作者も頭を悩ませてるみたいです。それじゃ今回のカード、これですう!!」

《オネスト》

効果モンスター（制限カード）

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻1100 / 守1900

自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事ができる。

また、自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、

エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、

戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする。

ゆま「あの…メグちゃんのデッキって『アンデット』ですよね？

いいんですか、この子紹介しちゃって？」

恵「いい。3人の中でこのカードを使うのは私だけだし、どう考えても今回の最重要カードはこの子…」

ゆま「メグちゃんがいいならいいですが…。

この子はとんでもなく強力な効果を持っています」

恵「このカードのおかげで、どんな光属性モンスターでも戦闘勝利が可能になる…。

デュエルで《月明かりの乙女》にこれを使ってきた猛者を、作者は現実に見たことがある…。

恐らく計算を狂わされるカード、ナンバーワンに輝くと思う…」

ゆま「前半の効果も、今回のように蘇生から手札というように容易に手札に戻って再利用が可能ですう」

恵「光属性…ただそれだけで攻撃をためらわせる…。

まさに悪魔のカード…」

ゆま「いえ、天使ですけど」

恵「…今回はここまで。次回遂に決勝戦…ユウ、頑張つて…」

ゆま「また次回ですう！」

第07話 それぞれの戦う理由（後書き）

デュエルはちょっと不完全燃焼気味。

恵の『アンデット』も岬の『スキルドレイン』も上手く表現できてない気がする…。

精進が必要ですね。

第08話 その憎悪を砕け（前編）（前書き）

第二部、部費争奪トーナメント編の最終決戦。
思ったより長くなったので前後編です。

第08話 その憎悪を砕け（前編）

Side 麗華

私は生徒会長である、天宮照子先輩を…いや、照子お姉さんを尊敬している。

子供のころから私を導いてくれた、やさしい近所のお姉さん。

私にとっては姉のような存在だ。

真面目で品行方正、その正しい生き方はいつだって私の見習うべき手本だった。

だが…そんな照子お姉さんを、5年前のあの事故が変えてしまった。そのせいでライディングデュエルに強い拒絶反応を示すようになった。しまい、ライディングデュエル同好会を潰そうと、生徒会長としての権限まで乱用するお姉さん…でも私では照子お姉さんを止められない。

デュエルで語り合おうにも、私程度の腕では照子お姉さんには敵わない。

でも…彼なら届かせられるかもしれない。

学園最強のお姉さんを相手に、その憎悪で固まった心をデュエルで解きほぐしてくれるかもしれない。

不動遊輝…信じてみる価値はありそうです。

Side out

「遂にここまで来たんだね…」

僕は感慨深く、トーナメントの対戦表を見やる。

ゆまも恵も勝ってくれて、ついに次は最後の決勝戦だ。

そして決勝戦の相手は生徒会…今回の廃部騒動の首謀者とも言える
天宮照子先輩との直接対決である。

「ユウくん…」

「ユウ…」

「…」

相手は今現在、この学園最強と言われている人…今の僕で勝てるかどうかは分からない。

でもゆまと恵が繋げてくれた希望だ。

それに…茶道部のことは恵から聞いている。

大なり小なり、誰もがこのトーナメントには理由を持って参加した。
勝ち進んだ僕たちは、敗北していった人たちの想いも背負っている。

「必ず勝つ…！」

そう言っただけは最後の調整を終えたデッキを、デュエルディスクへとセットした。

その時だった。

「失礼します。 ライディングデュエル同好会の控室はここですか？」

その言葉に僕たちは控室のドアの辺りを振り返ると、メガネをかけた少女が立っていた。

「あう…」

「…何の用？」

その少女をゆまは困ったように、恵は鋭い視線で見る。

彼女は僕たちのクラスの委員長、原麗華さんだ。

真面目でしっかり者、ついたあだ名はそのものズバリ『委員長』。

同時に、生徒会書記でもある。

つまりこれから対戦する天宮照子先輩側の人間だということだ。

「一体何の用ですか？」

「不動遊輝さん、実は少し話があるのですが…お時間を頂けませんか？」

これから戦う相手チームに話？

さすがの僕も警戒心を隠せず眉をひそめながら聞き返す。

「どんな話を？」

「それは会長…照子先輩があなたたちライディングデュエル同好会を潰そうとしていた、その訳を話します」

「その理由を知っているの？」

「はい……」

その話には僕は考える。

今回の廃部騒動、最初から天宮先輩の行動には疑問はあった。

僕たちに圧力をかけてきたことも、色々な部を使って僕たちを潰そうとしてきたことも相当の労力を必要とする。

それを成すだけの執念は一体どこから来るのか、ということだ。

当然、僕たち個人が恨まれていたとは思えない。何と言っても、僕たちは入学して間もない一年生だ。生徒会長に個人的に恨まれるような時間はない。

それに、それなら2年前に執拗にライディングデュエル部を潰そうとした理由にならない。

そうなればライディングデュエルに関する何かだろうとは踏んでいたんだけど……。

「わかったよ。その理由を教えて欲しい」

「では場所を変えましょう」

そう言って外へと促す委員長。

「ユウくん……」

「ユウ……」

ゆまと恵が心配そうに目配せをするけど、僕はそれを手で制すると黙って委員長について行くことにした。

「この辺りでいいでしょう…」

委員長に連れられてやってきたのは会場裏だった。

会場はトーナメントで賑わっているが、裏のここは裏方すら通らない。

秘密の話をしたいならもってこいの場所だ。

「今から話すのは天宮照子先輩…照子お姉さんの話です。

私と照子お姉さんは家が近所で、子供のころから私はあの人に良くしてもらっていました。

優しく、曲がったことが大嫌い。

真面目で誠実で…いつだって正しく綺麗な、真っ直ぐなお姉さん。私はデュエルについてもあの人に学び、あの人のことを実の姉のように思っています。

そんなお姉さんですが…昔はライディングデュエルが大好きでした」

「ライディングデュエルが？」

「はい…。今の様子からは想像もつかないと思いますが、将来はDホーラーになりたいと語っていたんですよ」

とてもじゃないけど、今のライディングデュエル同好会を執拗に潰

そうとしている姿からは想像もつかない。

「お姉さんが変わってしまったのは5年前…『ドミノの悲劇』の時です」

『ドミノの悲劇』…その名称には聞きおぼえがある。

当時行われていたサイドカー型Dホイールによるタッグ形式のデュエル大会で起こった事故だ。

予選周回遅れの1台のチームがクラッシュ。それに巻き込まれる形で何台ものDホイールがクラッシュし、何人もの死傷者を出す大惨事になった大会だ。

WRGP以降、ライディングデュエルの大会ではマニュアルモードが基本になっているため、クラッシュするDホイラーは多くなっているが、死傷者を出すほどの大惨事はそう無い。

あの時は優勝候補だった親子プロデュエリストが事故死したはず。たしか…。

「西日本リーグを制した、光と闇の天宮プロ親子…『天宮』？」

僕の言葉に、委員長は頷いた。

「そう、照子お姉さんのお父さんとお兄さんです。」

照子お姉さんは大好きだった2人の家族をあの大大会の事故で失いました。

しかし、それだけでは済まなかったんです。

残されたお母さんの方もショックによって倒れ、それ以後体調を崩しがちになりました。

そして…照子お姉さんはあれだけ好きだったライディングデュエルを嫌悪するようになっていたんです…。

照子お姉さんはたくさんの大事なものを失って、『何か』を憎悪

せずにはいられなかった…。

そうしなければ自分を保つことが出来なかった…。

でも、あの事故の発端となった人も死亡していて、憎悪の矛先がどこにも存在しなかったんです。

そしてその矛先を…照子お姉さんは『ライディングデュエル』というものに向けました…」

「…何故、その話を僕に？」

語られる生徒会長の過去に、僕は何とかそれだけを言えた。

「照子お姉さんが、あなたたちライディングデュエル同好会に圧力をかけていたのは知っています。無論、それが不当な圧力であることも。」

でも…私の言葉も、デュエルも…照子お姉さんには届かないんです。

だから…お願いします。

今、照子お姉さんと分かり合える可能性を持っているのはあなただけです。

どうか…デュエルで照子お姉さんの心に語りかけて下さい。

どうかお願いします!」

そう言って委員長は深々と僕に頭を下げたのだった。

「来たわね、ライディングデュエル同好会…不動遊輝」

僕が決勝の舞台へと上がると、すでに彼女はそこで僕を待っていた。腰までの艶やかな茶色の髪に、吸い込まれそうな翠瞳。腕を組み立つ姿からは確かな威圧感を感じる。

彼女こそ今現在このデュエルアカデミアで最強の名を冠する女帝、天宮照子生徒会長だ。

「お待たせしました」

「構わないわ。…どうせ、そう長引かせるつもりはないから」

そう言つて、彼女はデュエルディスクにカードをセットする。

そんな彼女に、僕は決意を込めて言った。

「天宮先輩。僕は…いえ、僕たちはライディングデュエルが大好きです！」

その僕の言葉に、天宮先輩の形のいい眉がピクリと跳ね上がった。

「…そう。でも私は嫌い、大嫌いよ！」

まるで吐き捨てるように答える天宮先輩。

「風の中にあるデュエル、そこにあるワクワクする瞬間…そのために…あなたを倒して僕はライディングデュエル同好会を存続させます！」

そう宣言して、僕はデュエルディスクを構えた。

「そう…なら…全力で潰すわ！ ライディングデュエルなんて…この学園のどこにも必要無いのよ！！」

そう言つて天宮先輩は女帝の威厳をもつて、デュエルディスクを構える。

これがこのトーナメント、最後の戦いだ！

「デュエル！！」

遊輝	LP 4000
照子	LP 4000

「先攻は私から、ドロー！ …私は手札から永続魔法《神の居城 - ヴアルハラ》を発動！」

途端に、神々しいまでの光を放つ神殿が現れた。

『ヴァルハラ』ということは天宮先輩のデッキは天使族デッキだろうか？

「《神の居城 - ヴアルハラ》の効果によって手札の《墮天使アスモ デイウス》を特殊召喚するわ」

《墮天使アスモディウス》 星8 / 闇属性 / 天使族 / 攻3000 / 守2500

いきなり攻撃力3000の大型モンスターの召喚！？
この突破は簡単な話じゃないぞ。

「アスモディウスの効果で、私はデッキから《墮天使スペルビア》を墓地に送り、カードを一枚伏せてターンエンドよ」 手札残り3枚

「僕のターン、ドロー。僕は手札から《サイクロン》を発動、その伏せカードを破壊する！」

砕けたカードは《サンダー・ブレイク》。悪くないカードだ。

除去効果を持つモンスターの少ない天使族デッキでは、汎用性の高い除去は重宝するのだろう。

「さらに、僕は手札から《ワン・フォー・ワン》を発動。手札の《グローアップ・バルブ》を墓地に送り、デッキから《レベル・ステイラー》を特殊召喚」

《レベル・ステイラー》 星1 / 闇属性 / 昆虫族 / 攻600 / 守0

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚。レベル1の《レベル・ステイラー》に、レベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

「深遠の闇が、全てを包む黒となる！ 光さす道となれ！ シンク
口召喚、《漆黒のズムウォルト》！！」

《漆黒のズムウォルト》 星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2000 / 守
1000

現れたのは黒い外套を着た悪魔だ。
通常、3000の攻撃力はなかなか突破出来ない。
だが、こいつなら破壊ができる！

「バトル！ 《漆黒のズムウォルト》で《墮天使アスモディウス》
を攻撃！

ダーク・ドラッグ・ダウン！」

攻撃力で圧倒的に低いモンスターで攻撃を仕掛けることは自爆に等
しい。

だが、この《漆黒のズムウォルト》なら話は違う。

「《漆黒のズムウォルト》の効果発動！ 攻撃対象モンスターの攻
撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、攻撃対象モンスターの
攻撃力をバトルフェイズ終了時までこのカードと同じ数値にする。

《墮天使アスモディウス》の攻撃力をダウン！

ダーク・フォルダウン！！」

《墮天使アスモディウス》 攻撃力3000 2000

そう、この効果と戦闘で破壊されない効果の二つを持ったズムウォルトはどんな相手でも必ず一方的に戦闘破壊出来るのだ。

「《墮天使アスモディウス》撃破！そして効果発動、このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、相手のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る」

落ちたカードは《大天使クリスティア》に《サイクロン》、そして《奈落の落とし穴》。どれも嫌なカードだ。

「やるわね…でも、この瞬間《墮天使アスモディウス》の効果発動、自分フィールド上に「アスモトークン」1体を攻撃表示で、「ディウストーン」1体を守備表示で特殊召喚するわ」

「アスモトークン」 星5 / 闇属性 / 天使族 / 攻1800 / 守1300

「ディウストーン」 星3 / 闇属性 / 天使族 / 攻1200 / 守1200

トークンが2体召喚されてしまった…。

でも攻撃力はズムウォルトの方が上、よしんば強力なモンスターが

来てもズムウォルトならもつだらう。

「僕はカードを1枚伏せてターンエンド」 手札残り1枚

「私のターン、ドロ―！」「デウストークン」をリリースし、《墮天使ディザイア》を通常召喚」

《墮天使ディザイア》 星10/闇属性/天使族/攻3000/守2800

「《墮天使ディザイア》は最上級モンスターながら、天使族モンスター1体のリリースでアドバンス召喚する事ができる。

そして《墮天使ディザイア》の効果発動。このカードの攻撃力を1000ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター1体を墓地へ送る事ができる。

私はこの効果で《漆黒のズムウォルト》を墓地に送る」

《墮天使ディザイア》 攻撃力3000 2000

「!?!」

しまった。ズムウォルトは戦闘耐性はあるけど効果での除去には無力だ。

為すすべなくズムウォルトは砕け散る。

「バトル、ディザイアでダイレクトアタックよ！」

「トランプ発動、《次元幽閉》！」

発生した次元の狭間に《墮天使ディザイア》が消えていく。

「くっ、味な真似を…でも、これで真正正銘のガラ空きよ。」「ア
スモトークン」でダイレクトアタック！」

遊輝

LP 4000 2200

「でも、この瞬間僕は手札から《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚します！」

《冥府の使者ゴーズ》 星7 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2700 / 守2500

「さらに効果によって「冥府の使者カイエントークン」を召喚！」

「冥府の使者カイエントークン」 星7 / 光属性 / 天使族 / 攻1800 / 守1800

「やるじゃない…カードを2枚伏せてターンエンドよ」

「僕のターン、ドロー！ デッキトップのカードを一枚墓地へ送ることで墓地の《グローアップ・バルブ》を特殊召喚」

墓地に送られたのは…《ネクロ・ガードナー》、いいカードだ。

「レベル7の「冥府の使者カイエントークン」に1《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

7 + 1 = 8

「集いし鋼が、新たな命となって動き出す！ 光さす道となれ！！
シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻280
0 / 守2000

「墓地の《レベル・ステイラー》の効果発動、《冥府の使者ゴーズ》のレベルを1つ下げて、場に特殊召喚する」

《冥府の使者ゴーズ》 星7 星6

「そして《スクラップ・ドラゴン》の効果発動。1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる。」

僕の選択するのは《レベル・スティーラー》と…」

さてここが重要なところだ。

「アスモトークン」は戦闘でないと破壊できない。そうならば破壊するのは2枚の伏せカードのうちどちらかだ。上手いこと先輩の防御用カードを破壊できればいいけど…。

「僕はその右の伏せカードを破壊します！ ダストブレイズ！」

《スクラップ・ドラゴン》からくず鉄混じりのプレスが、《レベル・スティーラー》と伏せカードが砕け散る。

伏せカードは…《サイクロン》。外した…。

どうしよう。攻撃か、それとも再び除去が出来る次のターンまで待つか…。

…仕方がない、先輩にも有利になるけどこれで除去カードを引けることを祈ろう。

「リバーズカードオープン、《メタモルポット》」

《メタモルポット》 星2 / 地属性 / 岩石族 / 攻 700 / 守 600

「お互いの手札を全て捨てその後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドロウします」

手札が現在0の僕にとっては5枚のドロウだ。

だが先輩にとっても5ドロウは同じこと、先輩の有利になることだ

ってありうる。

見れば先輩が捨てていたカードは《トレード・イン》だった。
あっちもあまり手は良くなかったようだ。

「ドロー！」

僕の5枚ドローの結果だが…トラップの除去はない。

悩んでも仕方ない、攻撃しよう。

「墓地の《レベル・ステイラー》の効果発動、《冥府の使者ゴーズ》のレベルを1つ下げて、場に攻撃表示で特殊召喚」

《冥府の使者ゴーズ》 星6 星5

《レベル・ステイラー》 星1 / 闇属性 / 昆虫族 / 攻 600 /
守 0

「バトル！ 《冥府の使者ゴーズ》で「アスモトクン」を攻撃！
冥府葬送斬！！」

照子

LP4000 3100

攻撃が通った。 これで決まるか！？

「続けて、《レベル・ステイラー》と《メタモルポット》で攻撃

「！」

照子

LP 3100 2500 1800

「《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！ スクラップ
デスバーナー！！」

「トラップ発動、《ドレインシールド》。その攻撃を無効にし、
そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復
するわ」

照子

LP 1800 4600

やはりそう甘くはないか…。

「僕はカードを2枚伏せてターンエンドです」

デュエルはまだまだ続きそうだ…。

…… T o b e c o n t i n u e d

第08話 その憎悪を砕け（前編）（後書き）

後編へ続きます。

第09話 その憎悪を砕け（後編）（前書き）

最終戦、後編です。

第09話 その憎悪を砕け（後編）

Side ゆま

「はう…」

目の前で繰り広げられるすごいデュエルに、誰もが釘付けになっています。

私やメグちゃんだってそう。

「すごいですう…」

「うん…」

私の言葉に、メグちゃんが頷きます。

「さつきから生徒会長のデッキ、次から次に大型モンスターが出てきてますよ」

「それがヴァルハラハラの怖いところ。あれだけの大型モンスターたちを実質コスト無しで召喚している…」。

ヴァルハラを早く壊したいところだけど…ユウもその暇が無く苦しんでいる…」

確かに、ユウくんのデッキはシンクロによるスピードと柔軟性には優れているけど、正面切つてのパワーでは分が悪いです。

どうにかして突破していかないと、パワーに押し切られユウくんのデッキが先に息切れを起こしちゃいます。

「でも…」

あの二人…なんて楽しそうにデュエルをしてるんだろう…。
ちょっと…うらやましいですう…。

S i d e o u t

S i d e 恵

生徒会長のデュエルの腕は、噂に違わぬものだった。
圧倒的な攻撃力と、厄介な効果の天使たち…あのユウが凄まじく苦しめられているのがわかる。

(ユウ…負けないで…)

私はそつと眼を閉じ呟く。

今の私に出来る事はただこれだけだから…。
でも…なんだろう？

ユウの戦っている生徒会長は私たちのライディングデュエル同好会を潰そうとする、いわば敵。

ユウから彼女のことは聞いたが、私は茶道部のことを知っている手

前、あまり同情は湧かない。
だが…ユウの何て楽しそうなことか？
あんないい顔、私たちにも滅多に見せないのに…。
それに生徒会長の方も本当に楽しそうだ。
これが私たちの敵であるなど、信じられないくらいである。
わだかまりを超え、ただ純粹にお互いの力をぶつけ合う二人に、チ
クリと私は僅かな嫉妬を覚えた…。

S i d e o u t

S i d e 照子

(すごい…すごいわ、この子！)

私は目の前の少年に、本当に感心していた。
このデュエルアカデミアで最強などと呼ばれるようになってから、
久しく楽しめなかった本気のデュエルだ。
他の子なら、すでに2回は叩き潰している。
なのにこの子は凌ぐ。どんな強力な天使を出しても、それを凌ぎ反
撃をしかけてくる。
次は何をやってくるのか？
それを思うだけで胸がワクワクする。

(楽しい！ 本当に楽しい！！)

そんな風に思っていると、彼は私に話しかけてきた。

「天宮先輩、僕は楽しいです。こんなに強い人とデュエルが出来る」

「私もよ。あなたは本当に強いわ、だから私も楽しい」

そう返してから、私はハツと思い出した。

彼は敵だった。私の大嫌いな、ライディングデュエルというものを愛する…敵！

そんな私の心境の変化を見透かしたのか、彼は少し悲しそうに切り出してきた。

「先輩、僕はデュエルが大好きです」

「私もよ。でも…ライディングデュエルだけは別！

あれだけは…あれだけは！！」

そう、大好きだった父さんと兄さんの敵とも言えるライディングデュエル。

あれだけは認められない！

「実は…僕は先輩がライディングデュエルにこだわる理由を知っています」

「…麗華ね？」

私の言葉に、彼は頷いた。

「それを知った上で、僕は言います。

ライディングデュエルだって、デュエルです。楽しい…デュエルなんです」

「違うわ、ライディングデュエルは危険な遊戯！ あんなもの、あんなもの！」

「確かに先輩の言うように危険はあります。それは事実です。

でも…それと同じくらい、ワクワクがああ風の中に広がる世界にはあるんです！

きつと…先輩のお父さんとお兄さんも同じだったと思います」

「…」

風の中に広がる新しい世界…確かに眼をキラキラ輝かせながら、父さんも兄さんもそんなことを言っていたっけ。

でも…認めない、認められない！

認めたら…私は何を、誰を憎めばいいの！？

「…デュエルの続きよ。

私はどうあってもライディングデュエルを認めない。

あなたはライディングデュエルを愛してる。

互いの考えが分かり合えないなら…あとは戦うだけ。

言いたいことは、私に勝ってからいいなさい！！」

「…わかりました、あとはデュエルで語りましょう、先輩！」

「ええ、行くわ！ 私のターン！！」

Side out

Side 遊輝

「私のターン、ドロー！！ 手札から魔法発動、《ブラック・ホール》！

場のモンスターを全滅させるわ」

「何！？」

ブラックホールが発生して、僕のモンスターたちを飲み込む。

あれだけ磐石だった場がガラ空きだ。

やはりこの人はすごい。ワクワクする。

でも僕だって負けられない！

「《神の居城 - ヴァルハラ》の効果によって、私は手札の《墮天使ゼラート》を特殊召喚するわ」

《墮天使ゼラート》 星8 / 闇属性 / 天使族 / 攻2800 / 守23

00

「バトル、《墮天使ゼラート》でダイレクトアタック！」

「トラップ発動、《聖なるバリア・ミラーフォース》！」

僕の目の前に現れた光の壁に攻撃を弾かれ、逆にゼラートが崩れ落ちていく。

「くう…伏せていたのね。」

裏守備表示でモンスターを通常召還しターンエンドよ」

「僕のターン、ドロー！ 魔法カード《貪欲な壺》発動。

墓地の《スクラップ・ドラゴン》、《漆黒のズムウォルト》、《メタモルポット》、《ジャンク・シンクロン》、《冥府の使者ゴーズ》をデッキに戻し、カードを2枚ドロー」

やってきたカードは…。

「よし！ 僕は手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召還！

《ジャンク・シンクロン》の効果によって墓地の《グローアアップ・バルブ》を特殊召喚！

同時に、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウオリアー》を手札から特殊召喚！

レベル2の《ドッペル・ウオリアー》にレベル3《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！

いでよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》 星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1300

「《ジャンク・ウォリアー》の効果発動！

《ジャンク・ウォリアー》のシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

さらに《ドッペル・ウォリアー》の効果発動！

《ドッペル・ウォリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドッペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

《ドッペル・ウォリアー》、《ジャンク・ウォリアー》の順で効果は発動します！」

場に現れる2体のドッペル・トークン。

「ドッペル・トークン」 星1 / 闇属性 / 戦士族 / 攻400 / 守400

「パワー・オブ・フェローズ！」

《ジャンク・ウォリアー》 攻撃力2300 3200

「さらにレベル1ドッペル・トークンにレベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

1 + 1 = 2

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》！」

《フォーミュラ・シンクロン》 星2 / 光属性 / 機械族 / 攻 20
0 / 守 1500

「《フォーミュラ・シンクロン》を守備表示で召還。効果によってカードを1枚ドロー！」

墓地の《レベル・ステイラー》の効果発動、《ジャンク・ウォリアー》のレベルを1つ下げて、場に攻撃表示で特殊召喚」

《ジャンク・ウォリアー》 星5 星4

《レベル・ステイラー》 星1 / 闇属性 / 昆虫族 / 攻 600 /

守 0

「バトル、《ジャンク・ウォリアー》で裏守備モンスターに攻撃。
スクラップ・フィスト!!!」

あっさり砕けたカードは《ダーク・ヴァルキリア》、ただの壁モン
スターだったようだ。

「続けて「ドツペル・トークン」と《レベル・スティーラー》でダ
イレクトアタック!!!」

照子

LP 4600 4200 3600

「僕はカードを一枚伏せてターンエンド」

「そして私のターン、ドロー！ ここで決めてあげる。」

《神の居城 - ヴァルハラ》の効果によって手札の《アテナ》を特
殊召喚！」

《アテナ》 星7 / 光属性 / 天使族 / 攻2600 / 守 800

「そして…フィールド魔法《死皇帝の陵墓》発動!!!」

途端に、おどろおどろしい祭壇が現れる。

「私はライフを2000払い、手札から《ライトニングギア光神機 - 轟龍》を通常召喚！！」

照子

LP3600 1600

《ライトニングギア光神機 - 轟龍》 星8 / 光属性 / 天使族 / 攻2900 / 守1800

「轟龍が召喚されたことにより、《アテナ》の効果発動！
相手ライフに600ポイントダメージを与える。
ホーリーバーン！！」

「ぐっ！？」

遊輝

LP2200 1600

「さらに《アテナ》の効果発動！ 轟龍を墓地へ送る事で、墓地に存在する天使族モンスター1体を選択して特殊召喚する。
来なさい、《墮天使スペルビア》！！」

《墮天使スペルビア》 星8 / 闇属性 / 天使族 / 攻2900 / 守2400

「《墮天使スペルビア》が召喚されたことで再び《アテナ》の効果発動！

ホーリーバーン！！」

遊輝

LP 1600 1000

「《墮天使スペルビア》の効果発動。

このカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「墮天使スペルビア」以外の天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

来て… 《大天使クリスティア》！！」

《大天使クリスティア》 星8 / 光属性 / 天使族 / 攻2800 / 守2300

「《アテナ》の効果発動！

ホーリーバーン！！」

遊輝

LP 1000 400

並び立つ大天使と墮天使と女神。

その神々しさと圧倒的な威圧感が、物理力を伴うように僕に押し寄せる。

そんな僕に照子さんは語りかけてきた。

「私の勝ちね。」

大方、《フォーミュラ・シンクロン》の効果で私のターンにシンクロ召喚をして攻撃力の低いトークンと《レベル・ステイラー》を処理するつもりだったんでしょうけど、《大天使クリスティア》の効果によって特殊召喚は出来ないわ。

あとはその伏せカードだけど…」

そう言っつて僕の伏せた2枚の伏せカードを見る。

「ミラーフォースは使用済。」

今までの消費から見て、防御用のトラップがあっても恐らく1枚。墓地の《ネクロ・ガードナー》を使用したとしても攻撃を防げるのは2回が精々と言ったところでしょうね。

3体で攻撃を仕掛ければ一撃は入るはず。

その一撃があれば十分。あなたの負けよ。」

「…」

…正解。

僕の伏せカードは《次元幽閉》と《リビングデッドの呼び声》。

先輩の言う通り、墓地の《ネクロ・ガードナー》を使っつても攻撃を防げるのは2回だけだ。

でも…。

「天宮先輩…一つ忘れていませんか？」

「何を忘れてるっていうの？」

「デュエリストにとって手札は可能性。僕には…まだ可能性があることを！」

「何を言っているの？ あなたはこのターンを凌げないのよ。可能性があつたところで次が無い！」

「いいえ、あります。」

僕にはこんな可能性が！！

僕は手札から《エフェクト・ヴェーラー》を墓地に送り効果発動！相手のメインフェイズ時、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して、その効果をエンドフェイズ時まで無効にする。

この効果で僕は《大天使クリスティア》の効果を無効にする！！

「な、なんですって！？」

「これによってエンドフェイズ時まで《大天使クリスティア》の特殊召喚ができないという効果は無効になりました。」

そして…《フォーミュラ・シンクロン》の効果発動！

相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。レベル4《ジャンク・ウォリアー》とレベル1《レベル・ステイラー》に、レベル2《フォーミュラ・シンクロン》をチューニング！

4 + 1 + 2 = 7

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！シンクロ召喚！」

現れよ、《ブラック・ローズ・ドラゴン》！」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》 星7/炎属性/ドラゴン族/攻
2400/守1800

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動！」

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。

ブラック・ローズ・ガイル！」

吹き荒れる黒い薔薇の花弁が、周囲の全てを破壊し、砕く。

この薔薇の暴風の前には天使も墮天使も関係ない。等しく全てが塵となる。

これが母さんのエース、《ブラック・ローズ・ドラゴン》が司る破壊の力だ。

その力によって場の全てのカードが崩れていく様を茫然と見る天宮先輩。

「全…滅…。私の天使たちが…」

…カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「僕のターン！！ドロー！！！」

これが正真正銘のラストターンだ！

「手札から魔法発動《死者蘇生》！」

墓地の《ブラック・ローズ・ドラゴン》を復活。

そして手札から《スポーア》を通常召喚。

レベル7の《ブラック・ローズ・ドラゴン》に、レベル1の《スポーア》をチューニング！」

これが最後！ 僕のエース、この戦いに終止符を！！

7 + 1 = 8

「集いし鋼が、新たな命となつて動き出す！ 光さす道となれ！！
シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！」

221

《スクラップ・ドラゴン》 星8 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻280

0 / 守2000

「墓地の《レベル・ステイラー》の効果発動、《スクラップ・ドラゴン》のレベルを1つ下げて特殊召喚」

《スクラップ・ドラゴン》 星8 星7

《レベル・ステイラー》 星1 / 闇属性 / 昆虫族 / 攻600 /

守0

「《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！
1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを
1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる！
この効果で僕は《レベル・ステイラー》とその伏せカードを破
壊する！

ダストブレイズ！」

砕けた伏せカードはミラーフォースだった。

さすがだ、この土壇場でも逆転の一手を伏せていたなんて…。

でも…これでもはや彼女を守るものはない！

「これで終わりです！」

《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！

スクラップデスバーナー！！！」

「きゃあああああ！！！！？」

スクラップ・ドラゴンがその身体を震わせながら、最大火力のブレ
スを放つ。

彼女に、もはやそれを止める術は残されていない。

その火炎に巻き込まれ、天宮先輩のライフは遂にゼロになった。

照子

LP16000

ワアアアアアア

「先輩、大丈夫ですか？」

鳴りやまない歓声を聞きながら、僕は天宮先輩に手を差し出した。

「久しぶりに負けたわ…完敗よ」

フツと笑うと、天宮先輩は僕の手を取り立ちあがった。

「でも、どうしてかしらね。

負けたっていうのに、何だか清々しい気分よ。

きっと…このデュエルが楽しかったからかしら」

そう言っつて天宮先輩は会場から去って行くこととする。

「不動くん、私はやっぱり、ライディングデュエルを好きにはなれないわ」

「…」

「でも…そこには誰かの夢があつて、そこに信念を賭けている人がいる…」。

そのことをあなたから思い出させてもらったわ…」。

約束してあげる、今後私…生徒会からあなたたちへの圧力がかかることは無いわ。

危険には気を付けて、デュエルを楽しむことね」

「ありがとうございます」

去っていく天宮先輩の背中に、僕は静かにお礼を述べたのだった…。

Side out

Side 照子

「照子お姉さん…」

会場から出ると、そこには麗華ちゃんが立っていた。

「ごめんなさい、照子お姉さん。私、お姉さんのことを彼に話してしまいました…」

どうやら私の過去を彼に話したことを気に病んでいるようだ。まったく…この子は少し、真面目すぎる。

「いいのよ。おかげで…いいものを思い出せたから」

そう言つて私は麗華ちゃんの頭をなでる。

そう、私は思い出した。

父さんと兄さんがよく語っていた、あのライディングデュエルへの真つ直ぐな想い。

彼の想いはそれにそっくりで、おかげで思い出した。

あの事故があつてからライディングデュエルを憎んだ私は、父さんや兄さんのそんな真つ直ぐな想いを語った、楽しい思い出すら憎悪の中に埋めて忘れ去っていたのだ。

「不動遊輝…あなたのおかげで救われたわ。

行くわよ、大会の運営も片付けもまだまだ仕事はいっぱいよ」

「は、はい、照子おねえさん！」

ライディングデュエルを認めるのは難しい。そう簡単に5年間もの間続いた思考は変わらない。

でも…少なくとも、ただ嫌悪し憎悪することだけは終わりにしよう。

私はそう決意し、麗華ちゃんを連れて歩き出した…。

S i d e o u t

S i d e ケイト

とうとうやった。

あいつら、本当にトーナメントを優勝しちまいやった！
生徒会の組んだトーナメントは、どれも有名な強豪ぞろいの激戦だった。

それをあいつら、勝ちぬきやった！

教え子が期待に応える姿ってのは、いつ見てもうれしいもんだね。頑張ったあいつらに、せめてご褒美にメシぐらい奢ってやるか…。そう思つて3人を探しているんだけど、どうにも姿が見えない。おかしいねえ、表彰式までは全員いたはずなんだけど。そう思つて同好会にやって来てみると、部室のドアが少し開いていた。

「ん？」

中を覗いてみると、そこには3人の姿があつた。
ボウズが二人を抱え込むように座ってるんで、すわ不純異性交遊かと一瞬焦つたけど、そうじゃなかった。
壁にもたれかかって眠つたボウズと、ボウズに身体を預けるようにして幸せそうに眠る二人。
それを見てアタイは静かに、部室のドアを閉めた。

「…タメシはもうちょっと後にしようかね」

今は少し休ませてやるう。

あいつらは今日一日、本当に良くやったからね。
ポリポリ頭を搔きながら、アタイは残つた仕事をこなすために職員室へ向かうことにした。

S i d e o u t

S i d e 遊輝

あれから…部活対抗トーナメントから2週間が過ぎていた。

部活対抗トーナメントに優勝した僕たちのライディングデュエル同好会は順調、かなりの額の『特別部活動予算』が支給され廃部の危機は免れた。

ちよつと『特別部活動予算』の額が試算していたのよりも多くて首を捻ったけど、そのことは委員長から教えてもらった。

何でも本来ライディングデュエル同好会に来るはずだった費用が上乘せされているらしい。

「今回の件は、生徒会の不当圧力でしたから是正をしたまでです。

照子お姉さんも丸くなってくれましたし」

というのは委員長の談。

どうやら、天宮生徒会長もライディングデュエルを眼の敵にするよ
うなことは無くなったようだ。

あのデュエルで、天宮先輩と少しは分かり合えたんだと僕は思う。

僕たちと同じように廃部の危機にたたされていた茶道部は、存続が決まったらしい。

表向きは部活対抗トーナメントで素晴らしいデュエルを見せた、紬紫先輩とジャツカルⅡ岬先輩の所属する部を潰すのは惜しいとの理由だが、これも天宮生徒会長が圧力をやめた結果のようだ。

「いつでもいらっしやってください。お待ちしております」

「おう、いつでも来いよ。一年ども！」

この間茶道部にお茶を御馳走になったが、そう言って先輩たちは僕らを出迎えてくれる。

恵はちよくちよく顔を出してるみたいだ。

ゆまはあのトーナメントの後、ナオミ先輩に熱心に女子テニス部に勧誘されるようになった。

「ゆまちゃんみたいな子は、きっとテニスが似合うのよ。」

だから私と契約して、テニス部員になってよ！」

そう言って、ニコニコ笑いながら入部届けをゆまに差し出してくるナオミ先輩。

ゆまはちよつとボケつとしてるところもあるけど運動神経いいし、テニスも上手くできるかもしれないけど…。

なんだろう、僕にはナオミ先輩が笑顔で差し出してくる入部届けが悪魔との契約書みたいに見えた。

ゆまもあれ以来、女子テニス部の入っている部室棟には近付かなくなつたし、そばを通る時には何か震えながら僕の影に隠れるようになつちやた。

何かあったのかな？

メイ「喜多嬉さんの社交ダンス部は一回戦敗退のため、『特別部活動予算』はほとんど出なかった。

しかし別段困ってはいないらしい。

普通練習スペースを借りたりで、部費は必要そうんだけど…。

「練習場所？ そんなもの、ウチのダンスホールに決まっていますわ。

部費？ 足りなければポケットマネーから継ぎ足せば良いだけのことではありませんか」

聞いてみると、そう優雅に紅茶を嗜みながら答えられてしまった。

どうにも、社交ダンス部にはそんなことは心配しなくていいらしい。羨ましいかぎりだ。

そして僕たちは、ライディングデュエルの学生大会に向けて整備と練習の日々を送っている。

楽しい、充実した毎日だ。

夢に向かって歩き出した僕たちライディングデュエル同好会の部活動対抗トーナメントは、こうして幕を閉じたのだった…。

……T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまと!」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「第二部、部費争奪トーナメント編が終わりましたね、メグちゃん!」

恵「うん… 私たちもデュエル出来て、満足…」

ゆま「あう… 私としてはおかしな先輩に眼を付けられちゃって困ってるんですが…」

恵「…ガンバレ」

ゆま「あうう! メグちゃん人事だと思って…」

恵「それより今回の最強カード…」

ゆま「はう、そうでした! 今回の最強カードはコレです!」

《漆黒のズムウォルト》

シンクロ・効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2000 / 守1000

闇属性チューナー + チューナー以外の昆虫族モンスター1体

このカードは戦闘では破壊されない。このカードの攻撃宣言時、攻撃対象モンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、攻撃対象モンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時までこのカードと同じ数値にする。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、相手のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る。

ゆま「ダークシンクロ出身のカードです。感想でオススメされていたので、作者が採用したみたいですね。

…ユウくん、このカードをどこで手に入れたんでしょうか？」

恵「カードは拾うもの（キリッ

…遊星おじさまたちは、どんな顔でユウがこのカードを使うのを見てるのだろう…？」

ゆま「とにかくこのカードですが、ユウくんのデッキと何故か相性がいいです。

攻撃時だけとはいえ、どんなカードでも必ず一方的に戦闘破壊に持ち込めます」

恵「ユウのデッキはエースのスクラップ・ドラゴンの2800がほぼ攻撃力の最高ライン…」。

3000クラスの攻撃力は効果破壊する必要があるけど、この子はレベル4の低燃費で戦闘破壊可能とお得」

ゆま「後半の効果ですが…正直、デメリットになることが多いです」

恵「墓地利用を考えたデッキは非常に多い。

それらの墓地肥やしを手伝ってしまうのは大きなデメリットと言えるけど…そこは必要経費」

ゆま「今回はここまでです！」

恵「次回からは新章に突入…」

ゆま「今度は世界の危機クラスの敵と私たち戦うことになるみたいですよ、メグちゃん！」

恵「『廃部の危機』から『世界の危機』…まるで訳が分からない…」

ゆま「まあ、『週一世界の危機』ぐらいの気楽さでいいって作者が言っていましたさう」

恵「…それ何てF・E・A・Rゲー？」

第09話 その憎悪を砕け（後編）（後書き）

第二部はこれにて幕です。

ストックを使いきったので次回の更新までしばらく時間がかかると
思います。

第三章 予告編

少年と少女たちの送る毎日。

「これで…完成だよ、ゆま！」

「ありがとうございますユウくん！これが私のDホイール、『トライハート』…！」

「ユウ、メモントモリーのエンジン制御プログラムについて相談したいのだけど…」

平和な日常と楽しい日々。

それはいつまでも続く…はずだった。

だが、非日常は彼らのすぐ近くまで迫っていた。

「インチキ、インチキよ!？」

「何なんだ…何なんだよテメエはよお!？」

ネオドミノシティを覆う怪しい影。

「医学的には眠っているだけ。でも何故か目覚めないのよ。まるで…魂を抜かれたみたい…」

「これが…『ライファイター』事件…！」

多発する怪事件に巻き込まれていく遊輝たち。

「ゆま…恵…お願いだから目を覚ましてよお…」

大切なものを傷つけられた怒りが、遊輝を戦いへと誘う。

「こんな粗悪なものじゃ『満足できねえぜ』ですう…!」

「私たちの欲望は、この程度じゃ満たされない…!!」

そして、絆と想いを胸にゆまと恵は戦う。

「冥魔神？」

事件の背後に見え隠れする、邪神の影。

そして、不動産に襲いかかる亡霊。

「久しぶりだね、アキ…」

「あなたまさか…!？」

果たして遊輝たちは、世界に忍び寄る影に打ち勝つことができるのか？

「ユウくん、負けないで！」
「ユウ、お願い、勝って…！」

二人の祈りを背負い、遊輝は戦う。

「…行こう、スクラップ・ドラゴン。
あのカビの生えた神様を…スクラップにしてやろう…！」

遊戯王5D's After 〈子蟹冒険記〉

第三章 『冥魔神編』

不定期更新予定

第三章 予告編（後書き）

次の更新までは時間がかかると思うので、とりあえず次回予告だけ投稿。

時間稼ぎともいう。

第10話 父と子 星屑龍VS鉄屑龍(前書き)

新章突入です。

今回は遂に登場、伝説の大いなる蟹。

第10話 父と子 星屑龍VS鉄屑龍

Side ナオミ

「インチキ、インチキよ！」

私の切り札、《裁きの籠》ジャッジメント・ドラゴンが成す術無く碎け散っていく光景に、私は思わず叫んでしまった。

今の攻撃で私のLPはゼロだ。

途端に、身体が重くなっていく…。

「何よ、これ…」

膝をついた私に、ゆっくりとデュエルの相手が近付いてくる。

黒いローブに、目深に被ったフード。

顔は見えない。だが、悲しそうな口元だった。

「…ごめんね」

そんな言葉が聞こえた気がしたけど、もう限界。

私は重苦しさに耐えきれず、意識を手放したのだった…。

Side out

「モーメントエンジン、出力安定。各部へのパワーコントロール正常。」

「恵、そっちは？」

「ブレーキ及びその他駆動系チェック完了、オールグリーン…問題無し…」

パソコンから顔を上げ恵に声をかけると、恵もパソコンを操作しながら言葉を返してくる。

「ここは僕の家のカレージ。」

そして僕たちのパソコンとケーブルで接続された先には、一台のDホイールがある。

「明るい赤と銀を基調とした、どこかヒーローめいた配色のDホイール。」

「やっと…完成だ！」

僕はその様子を見ていたゆまに声をかけた。

「ゆま、完成だよ！」

その言葉にゆまは笑顔でDホイールに駆け寄る。

「これが私のDホイール…『トライハート』！」

そう感慨深そうにDホイールを撫でるゆま。

「ユウくん、メグちゃん、ありがとうございます！」

「いいんだよ、ゆま。半分以上は僕の趣味だもん」

「私も…作ってて楽しかった…」

何かを作り終えた時特有の解放感に僕の頬が緩む。見れば恵も同じように満足げにほほ笑んでいた。その時だった。

「やっているみたいだな、遊輝…」

「あ、父さん」

ガレージに父さんがやってきた。

「お邪魔してます、遊星おじさん」

「遊星おじさま、お邪魔しています…」

ゆまと恵も父さんに慌てて頭を下げた。

「精が出てるな…。調子はどうだ？」

「はい！今完成したですう！」

父さんの問いに、ゆまが嬉しそうに答える。

「そうか…」

そう言って、父さんは僕の操作するパソコンを覗き込んできた。

「…遊輝、このエンジン制御プログラムを組んだのはお前か？」

「そうだけど…」

そう答えると、父さんはじっと画面を凝視する。
やがて、父さんが画面を指差した。

「この部分…これをこう変更すれば、82から96までの工程が省略できる」

「あ、ほんとだ。でも、それだと最大出力が若干下がるような…」

「いや、お前なら最大出力重視でもいいだろうが、実際に扱うゆまちゃんはDホイールにそう慣れていない。

最大出力より機動性と立ち上がりを重視した使いやすいセッティングにすべきだと思う…」

「なるほど…」

「それと駆動系制御プログラムの方だが…」

そう言って今度は恵の方のパソコンを覗き込んだ。

「…ここだ。この場合、ターンバック時のタイヤの回転変更に若干のズレが生じる。

これなら、こう変更した方がズレは少ない」

「…本当。気付かなかった…」

父さんの指摘に恵はプログラムを修正していく。
僕の方も、父さんの指摘通り、一部を修正していった。
それにしても…。

「ほう…おじさんすごいですう。一目でわかつちやうなんて」

僕の思っていた言葉を、ゆまが代弁してくれた。

僕の方も、恵の方もプログラムは会心の出来だったはずだ。
その改善点をひと眼で見抜いてしまうなんて…。
だが、父さんは何でも無いように言ってくる。

「昔、俺もやったミスだからな…。経験で分かるだけだ」

そう言って、今度はDホイール本体を触り、各部を見て回る。

「…いいDホイールだ。だが遊輝、このサスペンションが…」

「でも、それだと…」

僕は父さんと並んで、Dホイールをいじりながらお互いの意見を交換する。

「ユウくんとおじさん、そっくりですう」

「さすが親子…」

背中からどこか笑いを含んだ二人の声が聞こえてくる。
するところ…。

「…あなた、一体何をやっているの？」

見れば入口に母さんが、呆れた顔で立っていた。

「…ああ、そうだった。忘れていた。

お茶が入ったんで呼びに来たんだった。みんな、少し休憩でお茶にしないか？」

母さんの言葉に、父さんは少しぼつが悪そうに言うのだった。

庭の片隅にあるテーブルで、僕たちはお茶の時間となった。

「ふふっ…今日の紅茶は最高級のサイバーエンド・グレイなのよ」

母さんの入れてくれたお茶は、何とも家計に響きそうな紅茶だった。具体的には一杯4000円位。

母さん、いいとこのお嬢様だから結構金銭感覚がおかしいことがあるんだよね。

確かに美味しいんだけど…僕や父さんは悲しいかな安物のインスタントコーヒーをグイグイ飲むタイプなので、美味しい以上の感想が持てない。

「わあ、美味しいですう！」

「本当、美味しい…」

「ふふっ、こっちのキメラティック・マドレーヌも召し上げれ」

これまた美味しそうだけど攻撃力…もといカロリーの高そうなお菓子が出てきた。

ゆまと恵は美味しそうに食べながら、母さんと楽しく話をしている。デュエルのこと、部活のこと…おもに話しているのは学校でのことだった。

父さんもその話を静かに聞きながら、時折頷く。

そんな風に話が進んでいると、二人の話はこの間の部活対抗トーナメントの話になっていた。

「ユウくんったらすごいんです！」

「ユウはすごかった…」

ゆまは興奮気味に僕のデュエルを語り、恵もしきりに頷く。

僕としてはライトロードを正面から粉碎したゆまや、相性の悪そうな相手に勝利した恵の方がすごいと思うんだけど。

「遊輝、すごい活躍したみたいじゃないの」

「母さんから貰った《ブラック・ローズ・ドラゴン》のおかげだよ」

母さんの言葉に、僕は肩をすくめながら答えた。

正直、母さんの《ブラック・ローズ・ドラゴン》がいなかったらあのトーナメント、どちらの戦いにも勝てなかったと思う。

「いや、そんなことはない…」

その時、静かに話を聞いていた父さんがはじめて言葉を発した。

「強いカードがあるから勝てるのではない。

カードとの絆を信じることで、デッキの力を最大限に発揮したデュエリストが勝利を掴むんだ。

その勝利はまぎれもなくお前の実力だ。
強くなつたな、遊輝」

「父さん…」

日頃、余計なことは喋らない無口な父さんが、僕のことを褒めている。

そう思うと、何ともしばゆい。
照れ隠しに頭を掻いていると、ゆっくりと父さんが立ち上がった。

「どうだ遊輝、これからデュエルをしないか？」

「父さんと…僕が？」

「ああ。親として、一人のデュエリストとして成長したお前の実力をこの目でみたくなった。

どうだ、遊輝？」

その言葉に、僕はゆっくり、だけど確かに頷く。

「分かった…父さん、デュエルだ！」

「…」

僕はゆっくりとデッキをデュエルディスクにセットする。

目の前には、同じようにデッキをセットする父さん。

ゆまと恵、そして母さんは椅子に座りながら僕たちのことを見ていた。

「…」

目の前で対峙する父さん…それは、この街、そして世界の誰に聞いても、世界を代表するデュエリストの一人として名前があげられる存在。

今では研究職に専念しているが、その実力が衰えていないことは僕が良く知っていた。

そんな生きた伝説が、今、僕の目の前に敵として存在している。

こんなに…こんなにワクワクすることはない！

はつきり言って、僕は今まで父さんにデュエルで勝ったことは無い。でも、僕だって成長をしている。

今度こそ…！

「始めるか、遊輝」

「ああ、いつでもいいよ、父さん！」

「デュエル!!」

遊輝 LP4000

遊星 LP4000

「俺のターンだ、ドロ！俺は手札から魔法カード、《手札抹殺》を発動！」

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする」

いきなり先攻1ターンで《手札抹殺》…父さんのデッキも、僕のデッキと同じで墓地利用の割合が高い。落ちるカードによってはとんでもないことになりそうだ。

見ると父さんの落ちたカードは《ボルト・ヘッジホッグ》、《クイツク・シンクロン》、《チューニング・サポーター》、《ソニック・ウォリアー》、《レベル・ステイラー》…。

うん、思った通りとんでもないことになってる。若干の頭痛を覚えたものの、僕の方もかなりいいカードが墓地に落ちた。

《ライトロード・ハンター ライコウ》に《ネクロ・ガードナー》、《グローアップ・バルブ》に《冥府の使者ゴーズ》と《クリッター》。

《ライトロード・ハンター ライコウ》と《冥府の使者ゴーズ》が落ちたのは痛いけど、モンスターしかいない事故気味だったし手札

が交換できたことは大きい。
次に父さんがどう動くかだが…。

「俺は手札から、《シンクロン・エクスペローラー》を召喚」

《シンクロン・エクスペローラー》 星2/地属性/機械族/攻
0/守 700

「その効果で墓地の《クイツク・シンクロン》を特殊召喚！
レベル2《シンクロン・エクスペローラー》をレベル5《クイツク・シンクロン》でチューニング！」

2 + 5 = 7

「集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！シンクロ
召喚！

燃え上がれ、《ニトロ・ウォリアー》！」

《ニトロ・ウォリアー》 星7/炎属性/戦士族/攻2800/守
1800

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！」

さすが父さん、先攻1ターン目から高攻撃力の《ニトロ・ウォリアー》を召喚か…この突破は簡単じゃない。

それに伏せカード2枚…墓地が肥えてからが本領発揮の、言ってみれば遅効性のデッキである父さんのデッキには《くず鉄のかかし》を始めとした防御系カードの割合が高めだ。

あの伏せカードも恐らく、というか間違いなく防御用のトラップだろう。

どうやって攻めるべきか…？

…よし、これで行こう。

「僕は手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚。

その効果で墓地の《ライトロード・ハンター ライコウ》を特殊召喚。

レベル2の《ライトロード・ハンター ライコウ》に、レベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

2 + 3 = 5

「氷の静寂が、全てを冷たく凍らせる！ 光さす道となれ！

シンクロ召喚、《氷結のフィッツジェラルド》！！」

《氷結のフィッツジェラルド》 星5 / 水属性 / 悪魔族 / 攻250

0 / 守2500

現れたのは氷の悪魔だ。

攻撃力は2500とこのままでは《ニトロ・ウォリアー》を倒せないが、それなら他のカードで援護してやればいい。

「手札から速攻魔法発動、《月の書》。

《ニトロ・ウォリアー》を裏守備表示にする！！」

「何…？」

《ニトロ・ウォリアー》の攻撃力は2800だが、守備力は1800。

《氷結のフィッツジェラルド》の2500で十分突破できる。

「バトル！ 《氷結のフィッツジェラルド》で《ニトロ・ウォリアー》を攻撃！」

《氷結のフィッツジェラルド》の効果によってダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない！」

これが《氷結のフィッツジェラルド》を召喚した最大の理由だ。

《氷結のフィッツジェラルド》なら伏せてあるものが防御のトラップだろうと関係なしに攻撃できる。

「ブリザード・ストライク！！」

《氷結のフィッツジェラルド》の放った極寒のブリザードに、守備表示の《ニトロ・ウォリアー》が破壊される。

「僕はカードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー！ 手札から速攻魔法、《ダブル・サイクロン》を発動！」

自分フィールド上に存在する魔法・罫カード1枚と、相手フィールド上に存在する魔法・罫カード1枚を選択して破壊する。

俺の伏せカード1枚と、お前の伏せカードを破壊だ」

「く!?!」

伏せていた僕のミラーフォースが砕かれる。

でもなんで使いにくい《ダブル・サイクロン》を…?

その答えはすぐに分かった。

「俺が《ダブル・サイクロン》で破壊したカードは《リミッター・ブレイク》。

その効果で俺はデッキから《スピード・ウォリアー》を攻撃表示で特殊召喚する」

《スピード・ウォリアー》 星2/風属性/戦士族/攻 900
/守 400

…なるほど、伏せていたカードの片方はブラフだったのか。

これで父さんは特殊召喚と、僕の伏せカード除去を同時に行ったことになる。

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚。

その効果で墓地の《ソニック・ウォリアー》を特殊召喚。

自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、《ボルト・ヘッジホッグ》は特殊召喚することが出来る、《ボルト・ヘッジホッグ》を守備表示で特殊召喚！」

《ジャンク・シンクロン》 星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1300 / 守500

《ソニック・ウォリアー》 星2 / 風属性 / 戦士族 / 攻1000 / 守0

《ボルト・ヘッジホッグ》 星2 / 地属性 / 機械族 / 攻800 / 守800

一瞬にして、父さんの場が整って行く。
この状況なら…恐らくあのカードが来る!?

「レベル2《ソニック・ウォリアー》に、レベル3《ジャンク・シンクロン》をチューニング!」

2 + 3 = 5

光の中で、モンスターの姿が輝く光へと変わっていく。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ!シンクロ召喚!

いでよ、《ジャンク・ウォリアー》!」

《ジャンク・ウォリアー》 星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1300

現れたのはやはり、父さんが信頼をよせる鋼鉄の戦士だった。

「《ソニック・ウォリアー》の効果発動、このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

この効果で《スピード・ウォリアー》と《ボルト・ヘッジホッグ》の攻撃力をアップ！」

《スピード・ウォリアー》 攻撃力900 1400

《ボルト・ヘッジホッグ》 攻撃力800 1300

「さらに《ジャンク・ウォリアー》の効果発動！」

《ジャンク・ウォリアー》のシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

パワー・オブ・フェローズ！」

《ジャンク・ウォリアー》 攻撃力2300 5000

「攻撃力…5000!?!」

「バトル! 《ジャンク・ウォリアー》で《氷結のフィッツジェラルド》に攻撃！」

スクラップ・フィスト!!」

「ぐっ!?!」

鋼鉄の拳が、フィッツジェラルドを正面から叩きつぶす。

遊輝

LP4000 1500

大幅にライフを削られたけど、まだ凌げる。

墓地の《ネクロ・ガードナー》は温存しておくべきだろう。

「《氷結のフィッツジェラルド》の効果発動、戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合手札を1枚捨てる事でこのカードを墓地から表側守備表示で特殊召喚する。」

手札の《ゾンビキャリア》を墓地に捨て、《氷結のフィッツジェラルド》復活!」

《氷結のフィッツジェラルド》 守備力2500

「俺はこれでターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー!! 手札を1枚デッキトップに戻し、墓地の《ゾンビキャリア》の効果発動。」

《ゾンビキャリア》を特殊召喚!」

《ゾンビキャリア》 星2 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 400 / 守 200

「よし、レベル5《氷結のフィッツジェラルド》にレベル2《ゾンビキャリア》をチューニング！」

5 + 2 = 7

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！
シンクロ召喚！現れよ、《ブラック・ローズ・ドラゴン》！」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》 星7 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻
2400 / 守1800

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動！」

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。

ブラック・ローズ・ガイル！！」

吹き荒れる黒い薔薇の花弁が、父さんの場を包み込む。

その中で父さんのモンスターと伏せカードが砕け散った。

伏せカードは…《強制終了》。やはり防御系のカードだった。

「僕は魔法カード《貪欲な壺》発動。

墓地の《ブラック・ローズ・ドラゴン》、《氷結のフィッツジェラルド》、《ジャンク・シンクロン》、《冥府の使者ゴーズ》、《クリッター》をデッキに戻し、カードを2枚ドロ―。

そして手札から、《デブリ・ドラゴン》を召喚」

《デブリ・ドラゴン》 星4 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1000 / 守2000

「《デブリ・ドラゴン》の効果発動。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

《ライトロード・ハンター ライコウ》を特殊召喚！

さらに、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウオリアー》を手札から特殊召喚！」

これで準備は整った。

「レベル2の《ドッペル・ウオリアー》とレベル2《ライトロード・ハンター ライコウ》にレベル4《デブリ・ドラゴン》をチューニング！」

2 + 2 + 4 = 8

「集いし鋼が、新たな命となって動き出す！ 光さす道となれ！！シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8/地属性/ドラゴン族/攻280
0/守2000

「来たな…遊輝、お前のエースモンスターが…」

「さらに《ドッペル・ウォリアー》の効果発動！」

《ドッペル・ウォリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドッペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる」

場に現れる2体のドッペル・トークン。

「ドッペル・トークン」 星1/闇属性/戦士族/攻400/守400

「バトル、ドッペル・トークン2体で父さんにダイレクトアタック

！…」

「ぐっ…」

遊星

LP4000 3600 3200

「そして《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！
スクラップデスバーナー！！」

「うおおお！？」

《スクラップ・ドラゴン》がその身体を震わせながら、最大火力の
プレスを放つ。

その炎が父さんのライフを大幅に削った。

遊星

LP 3200 400

父さんの残りライフは400。

このまま削り切りたいけど、僕に追撃の手段はない。

「僕はターンエンド」

僕の残り手札は1枚。

でも父さんだつて残り手札は1枚、次のドローを合わせても2枚だ。
場が全滅状態で、たった2枚で戦況を変えれるとは思えない。

なら、次の僕のターンで決着を着けるはず。

そう思っていたけど、それは甘かった。

「俺のターン、ドロー！」

…俺は手札から魔法カード《戦士の生還》を発動。

墓地から《ジャンク・シンクron》を《ジャンクron》を手札に加える。

《ジャンク・シンクron》を通常召喚、その効果によって《チュ
ーニング・サポーター》を墓地から特殊召喚する。

そして…」

父さんが最後の手札に手をかけた。

「手札から速攻魔法発動、《地獄の暴走召喚》！」

「なあ！？」

このタイミングで！？

「《地獄の暴走召喚》は相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。」

その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

俺はその効果でデッキから残り2枚の《チューニング・サポーター》を召喚」

「くっ…僕は何も召喚出来ない…」

当然ながらトークンには対応していないし、エクストラデッキは範囲外だ。

そもそも、僕の《スクラップ・ドラゴン》は1枚だけ。

一方的に父さんだけが召喚できることになる。

しかも《チューニング・サポーター》…ドロー加速カードだ。

拳句、この状況で行うシンクロと言えば…アレしかない。

「レベル1《チューニング・サポーター》とレベル2になった《チューニング・サポーター》2体を、レベル3《ジャンク・シンクロン》でチューニング!!」

1 + 2 + 2 + 3 = 8

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ!

シンクロ召喚! 粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》!!」

《ジャンク・デストロイヤー》 星8 / 地属性 / 戦士族 / 攻260
0 / 守2500

「くっ!?!」

やっぱり《ジャンク・デストロイヤー》か!?

「まず《チューニング・サポーター》がシンクロ召喚に使用されたことで、俺はカードを合計3枚ドロウする。

そして《ジャンク・デストロイヤー》の効果発動、シンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる。

チューナー以外のモンスターは《チューニング・サポーター》3枚、よって3枚のカードを破壊する。

破壊するのは2体のドッペル・トークンと《スクラップ・ドラゴン》だ!

タイダル・エナジー！！」

《ジャンク・デストロイヤー》から放たれたエネルギー弾が、2体のドッペル・トークンと《スクラップ・ドラゴン》へ直撃する。

「スクラップ・ドラゴン！？」

《スクラップ・ドラゴン》はその鋼鉄の身体に幾筋ものヒビが入ったかと思うと、大爆発を起こした。これで僕の場合は全滅だ。

「《ジャンク・デストロイヤー》でダイレクトアタック！
デストロイ・ナックル！！」

巨大な魔神の拳が迫る。
でも、まだまだ！

「墓地から《ネクロ・ガードナー》を除外し効果発動！
相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。
この効果で《ジャンク・デストロイヤー》の攻撃を無効にする！
」

僕に襲い来る攻撃を、僕のそばに影のように現れたネクロ・ガードナーが、不可視の盾によって防いでくれた。

「バトルを終了する」

よし、凌いだ。

《ジャンク・デストロイヤー》の効果はシンクロ召喚に成功した時だけ。

それ以降は攻撃力2600のバニラモンスターと変わらない。
それなら巻き返しようはある。
しかし…。

「メインフェイズ2、俺は手札から魔法カード《シンクロキャンセル》を発動。

《ジャンク・デストロイヤー》をエクストラデッキに戻し、このモンスターのシンクロ召喚に使用したモンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

《ジャンク・シンクロン》と3体の《チューニング・サポーター》を特殊召喚」

再びシンクロ召喚が可能な状態になってしまった。

そして…この状況なら間違い無く父さんのエースモンスターが来る！

「レベル1《チューニング・サポーター》とレベル2になった《チューニング・サポーター》2体を、レベル3《ジャンク・シンクロン》でチューニング!!」

1 + 2 + 2 + 3 = 8

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！」

シンクロ召喚！ 飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》!!」

それは、光と共に舞い降りた。

「綺麗…」

それは観戦していたゆまか恵か、はたまた僕の眩きだったのか。
《スターダスト・ドラゴン》…その名の通り、星の輝きを宿す龍。
世界を救った英雄、不動遊星のエースにして象徴たるドラゴンだ。

「《チューニング・サポーター》がシンクロ召喚に使用されたことで、俺はカードを合計3枚ドローする。

そしてカードを1枚伏せてターンエンドだ」

僕の状況は限りなく悪い。

僕のエース、《スクラップ・ドラゴン》はすでに砕かれ、場はガラ空きなうえ手札は残り1枚。

父さんの場には恐らく防御用と思われる伏せカード。

そして…目の前には父さんのエース、《スターダスト・ドラゴン》。圧倒的に不利な状況で、しかも厄介な効果を持つ《スターダスト・ドラゴン》が目の前にいる。

息子である僕はいつだって、《スターダスト・ドラゴン》の輝きを間近で見っていた。

でも…今日こそ僕は、この輝きを超えて見せる！
このドローに賭ける！！

「僕のターン、ドロオオオオー！！」

気迫と共に引いたそれは…。

「手札から魔法発動！ 《死者蘇生》！

墓地の《スクラップ・ドラゴン》を復活！！」

僕の隣に、再び《スクラップ・ドラゴン》が降り立つ。

壊れたガラクタたちが集まった鉄屑龍。僕のエースモンスター。

《スターダスト・ドラゴン》の輝きとは逆に、鋼鉄の武骨さを感じさせる《スクラップ・ドラゴン》。

『英雄』という輝きを持つ父さんと、何も輝きを持ち合わせない僕完成された輝きを放つ龍 《スターダスト・ドラゴン》と、不格好で歪な龍 《スクラップ・ドラゴン》。

思えば…《スクラップ・ドラゴン》は、僕に似ているのかも知れない。

輝きに憧れ、それを持ち合わせていない僕に…。

でも…今日こそ届かせる！

あの『輝き』を超えてみせる！！

《スクラップ・ドラゴン》、僕の相棒よ…僕に力を！！

「最後の手札、行くよ、父さん！！

魔法発動、《地砕き》！

相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスター1体を破壊する。

父さんの場にいるのは《スターダスト・ドラゴン》のみ。

よって《スターダスト・ドラゴン》を破壊する！！」

「《スターダスト・ドラゴン》の効果発動！

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

ヴィクテム・サンクチュアリ！！」

《スターダスト・ドラゴン》が光の粒子となり、自身を破壊しようとしていた《地砕き》を防ぐ。

でも、これで！

「デッキトップのカードを一枚墓地へ送ることで墓地の《グローア

ツプ・バルブ』を特殊召喚。

そして《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる！

選択するのは《グローアップ・バルブ》と伏せカードだ！
ダストブレイズ！」

《スクラップ・ドラゴン》から放たれるくず鉄混じりのプレスで、
《グローアップ・バルブ》と伏せカードが砕け散る。

砕けたカードは《くず鉄のかかし》、父さん愛用の防御トラップだ。
でもこれで父さんの場合はガラ空きだ！

「これでラストだ、《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！
いけえ！スクラップデスバーナー！！」

《スクラップ・ドラゴン》からの最大火力のプレスが父さんに迫る。
ついに：父さんに勝った！

だが、そう思った瞬間だった。

「手札からモンスター効果発動！ 《速攻のかかし》！！

このカードを手札から捨てて、その攻撃を無効にしバトルフェイズを終了する」

《スクラップ・ドラゴン》のプレスは、父さんの前に割り込んできたブースター付きのかかしによって防がれていた。

必勝と思われた攻撃を防がれ、手札もない。

「僕は…ターンエンド…」

僕にはエンド宣言をする以外に道はなかった。

「エンドフェイズ時、《スターダスト・ドラゴン》は自身の効果によって墓地から自分フィールド上に特殊召喚される。

戻れ、スターダスト！！」

父さんの言葉に応え、光と共に再び《スターダスト・ドラゴン》が舞い降りた。

「俺のターン、ドロー！ 手札から《貪欲な壺》を発動。

《ニトロ・ウォリアー》、《ジャンク・ウォリアー》、《ジャンク・シンクロン》、《クイック・シンクロン》、《チューニング・サポーター》をデッキに戻し、カードを2枚ドロー。

そして魔法カード《調律》を発動。デッキから《ジャンク・シンクロン》を手札に加え、デッキをシャッフル、その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

《ジャンク・シンクロン》を通常召喚、その効果によって《チューニング・サポーター》を墓地から特殊召喚する。

レベル1《チューニング・サポーター》にレベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！《アームズ・エイド》！！」

1 + 3 = 4

《アームズ・エイド》 星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1800 / 守1200

「《チューニング・サポーター》の効果によりカードを1枚ドロー。

さらに《アームズ・エイド》の効果発動、装備カード扱いとしてモンスターに装備、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップ。

《アームズ・エイド》を《スターダスト・ドラゴン》に装備！！

《スターダスト・ドラゴン》 攻撃力2500 3500

鋼鉄の義手が、《スターダスト・ドラゴン》へと装着された。

「バトル！」

《スターダスト・ドラゴン》で《スクラップ・ドラゴン》に攻撃！！

《スターダスト・ドラゴン》が構えた腕に、星のように輝く光が集まっていく。

「行け、パワー・ギア・ソニック！！」

瞬間、突き出された《スターダスト・ドラゴン》の腕から閃光が奔流となって放たれた。

「迎え撃て、《スクラップ・ドラゴン》！！ スクラップデスバーナー！！」

僕の声に応え、《スクラップ・ドラゴン》が雄叫びと共に最大火力のプレスを放つ。

《スターダスト・ドラゴン》の放つ閃光と《スクラップ・ドラゴン》の放つ火炎が空中でぶつかり合う。

だが、拮抗したのは一瞬のこと。

《スターダスト・ドラゴン》の放つ閃光が、《スクラップ・ドラゴン》の放つ火炎を押し返し、《スクラップ・ドラゴン》を押し包む。閃光の中で、ボロボロと崩れ去っていく《スクラップ・ドラゴン》。断末魔の雄叫びと共に《スクラップ・ドラゴン》は爆発した。

遊輝

LP1500 800

「《アームズ・エイド》の効果発動！

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

崩れ落ちる《スクラップ・ドラゴン》が起こす爆風が、僕に襲いかかる。

それを見ながら、僕は自分の敗北を静かに受け入れた…。

遊輝

LP800 0

「負けた…」

僕はがくりと膝をつく。

カードたちは、僕にすっかりと応えてくれた。
でも…父さんには勝てなかった。

「いいデュエルだった、遊輝」

父さんはそう言って僕を立たせてくれた。

「ははは…父さんには敵わないや」

「そんなことはない。お前は昔より、ずっと強くなっている。
いつかお前は俺よりずっと強くなるだろう」

「そんなの無理だよ…」

「無理なものか。」

絆を信じ、進化をやめなければ、無理なことなどこの世に一つもない。

遊輝、進化を続ける。デュエリストとしても、人間としても。
お前なら…それが出来るはずだ」

そう言ってポンと僕の肩を叩くと、背を向け母さんたちの方へと歩いて行く。

その背中はとてつもなく大きい。

ああ、父さん…父さんはどこまで巨大な壁なんだ…。
すべてにおいて、僕はまだまだ父さんには敵わない。
でも…。

「いつか…いつか超えて見せる…！」

僕は決意を込め呟くのだった。

S i d e o u t

S i d e ゆま

ユウくんと遊星おじさんのデュエルは、ものすごいデュエルでした。どこがどうと聞かれると、全部！としか言いようがないです。

次から次にシンクロ召喚で呼び出されるモンスターたち。

戦況は優勢と劣勢をお互に行ったり来たり。

最後にはエースモンスター同士のぶつかり合い。

負けちゃったけど、本当にユウくんはすごかったですう！！

でも…私は最近、ユウくんの凄さを見ると、ちょっとだけ思っていることがあるのです。

私はデュエルだってそれなり程度だし、機械とかにも強くないし、ユウくんみたいに凄くないです。

そんな私が…隣にいてもいいのかな？

私が隣にいて、ユウくんの邪魔になってるんじゃないかな？

ユウくんの持つ輝きを見るたび、その輝きの近くに私の居場所が本

当にあるのかどうか…そんなことを思っっちゃうのでした…。

Side out

Side 恵

遊星おじさまとユウのデュエルは凄まじいものだった。

残念ながらユウの敗北になってしまったけれど、それは仕方が無い。むしろ、世界でも最高ランクのおじさま相手に勝ってしまったら、それこそ一大事だろう。

ユウはおじさまに勝ったことが無いと嘆いていたけど、ユウの年齢と経験で『おじさま相手に善戦する』ということが十分驚異的だということに気付いて欲しい。

本当に…ただの凡人の私とは違う…。

ユウの凄さを見るたび、最近、ふと心の片隅で考える事がある。

私は…ユウの足枷になっているのではないだろうか？

ユウ一人の方が、何事も上手く出来るのではないだろうか？

はっきり言えば意味の無い不安だ。

ユウが私たちを邪魔だと思っていることなどありえない。

だが意味の無い不安だと分かっても…何故かこの思考が払拭できない。

私たち3人はいつも一緒だった。
だが…案外、その終わりが近付いているのかもしれない…。

S i d e o u t

S i d e 遊輝

父さんとのデュエルの後、再びお茶へと戻っていった僕たちなのだが、途中、父さんと母さんのPDAに連絡が入った。

どうやら急用が入ったらしく、父さんたちは足早にどこかに出かけて行った。

最近だけど、こんなことが多い気がする。

仕方なく、僕たちはガレージに戻り、Dホイールの調整作業に戻った。

「ユウ、メモントモリーのエンジン制御プログラムについて相談したいのだけど…」

「うん、どんなこと？」

「最大出力を重視した形にしたい。私はあまりコーナーは得意ではない…。」

なら、直線で巻き返せるようにしたい…」

「そうになると…うーん、制御プログラムの半分近くは見直すことになると思うよ。」

ちよつと時間かかるだろうし、その間メモントモリーは使えないけどいいの?」

「構わない、ここに置いてく。今日はどうせゆまが泊まりに来る。それほどの距離は無いし、歩いて家まで帰ればいい…」

「そうなの?」

「はい、今日はメグちゃんの家でお泊まり会ですう!」

嬉しそうなゆまの言葉に、恵もほほ笑む。

友達の家泊まりかあ…僕にはそう言う経験ないけど、女の子はこういうのが結構盛んみたいだ。

「父さんたちもいないし、面倒だから二人とも泊まっていけばいいのに…」

どうせ客室はいくつか空きがあるし、調整をやるんでも使う本人がいた方がいい。

僕は何の気なしにそんな風に言ったら、ゆまと恵が何だか真っ赤になりながら部屋の隅に移動してヒソヒソ話を始めた。

「これって、絶対アレなお誘いですよね! メグちゃん…!」

「…不覚、今日のぬこプリントでは…勝負にならない…!?!?」

「えう…私だつて縞ですう…」

「とりあえず装備変更が必要…」

？ 一体何の話をしてるんだろ？

…ああ、そういうことか。

「大丈夫だよ、二人とも。

作業用のツナギなら予備があるから」

「つ、ツナギ！？ ユウくんはそういうのでいいんですか！？」

「もっと可愛いのがいいのでは…？」

「？ 整備用の格好で、可愛いのってあるの？」

僕が首を傾げながら尋ねると、何故か途端に二人の視線が冷たくなつた。

え？ 何か僕、間違えた？

「…メグちゃん、もう帰ろうです」

「同感…もう帰る…」

「え、あ…二人とも」

明らかに不機嫌そうになった二人はそのままガレージから出て行ってしまった。

僕、何か気に障る事でもしたかな？

良く分からないけど、まあいいや。明日、二人には謝ろう。

それより、そろそろお腹減ったなあ。

「確かこの辺りに…あつた、『爽やかスターダストソードル』」

カップラーメン大好きなジャックおじさんは、よく『ピリ辛レッドデーモンズソードル』を勧めてくるけど僕はこっちの方が好きなんだよね。

そんなどうでもいいことを考えながら、僕は一人になったガレージでカップラーメンにお湯を注いだ。

…僕はこの後、二人を家に泊めなかったことを死ぬほど後悔することになる…。

S i d e o u t

S i d e ? ?

「何なんだ…何なんだよテメエはよお!？」

ボクのモンスターの攻撃でライフがゼロになった相手が、絶叫のよ

うな声を上げてガクリと倒れた。

ボクは手にしたカードを見る。

カードには倒れた相手の子の顔、そして『ジャツカルⅡ岬』というカード名が無地だったはずのカードに刻まれた。

倒れた相手に、ボクは一言呟く。

「…ごめんね」

言うてから、ボクは自分で自分を『醜い』って思ってしまった。

謝るくらいなら、最初からしなればいい。

本当はやりたくない、というのだって言い訳でしかない。

悪いことだと知っていて、分かっているながら人を傷つけて…拳句傷つけた後に謝罪をするなんて、あまりにも醜い偽善だ。

でも…どうしてもボクはこの言葉を使うのをやめられない。

パパのために続けなくちゃいけないってわかっていても、偽善にすぎらないでいられるほどボクは強くないよ…。

「ごめんなさい。　せめて…いい夢を」

そう言うて背を向けた時、デュエルリーダーが音を発した。

登録しているデュエリストが接近してきてる。数は2人。

リーダーには学園でも実力ある相手が登録されている。

気を引き締めないと…。

「いくよ…」

そう自分に言い聞かせるように呟くと、ボクは変装用のローブのフードを深く被りなおしたのだった…。

S i d e o u t

S i d e 恵

「まったく、ユウくんは乙女の純情を踏みにじり過ぎですう！」

「私たちの覚悟を…返してほしい…」

隣で頬を膨らませプンプン怒るゆまに、私は同意する。

かく言う私も同じような顔をしていることだろう。

ユウにはいい加減、その辺りを是正して欲しい。

そんな風に思っていた時だった…。

ゾクッ！

「ッ！！？」

背中を何か嫌なものが駆け抜ける。

「えう…メグちゃん…」

見ればゆまが不安そうな顔で私を見ていた。

恐らくゆまも私と同じで何かを感じ取ったのだろう。

一息を付き、ゆっくりと辺りに視線を巡らせる。
そして、その違和感に気付いた。

ここは商店街にほど近い、住宅街の道だ。
大通りという訳ではないが、決して交通量が少ないという訳ではな
いはず。

なのに…何故不自然なように誰もいない？

「メグちゃん、あれ…」

ゆまの指さす方に視線を巡らすと、そこには人影があった。

背丈は小柄、私たちと同じか少し上程度。

全身の隠れるローブを身に纏い、目深にフードを被っているため詳
細はまるでわからない。

その人影が声を発する。

『宮田ゆま、レイン…恵だな』

機械を通した声だ。性別も年齢も分からない。
その声はつきりと私たちの名前を呼んだ。

「えう！？ どうして私たちの名前を！？」

「…何者？」

警戒しながら問うと、おもむろにローブの人物はデュエルディスク
を構えた。

『この私と、デュエルをして貰う』

「…断る。受ける意味がない…」

そう即座に答えるが、ローブの人物は言葉を紡ぐ。

『ふふ…お前たち2人はすでに逃げられない。この私にデュエルで勝たなければな』

「…!!?」

その言葉と共に、私とゆまを衝撃が襲った。

ソリッドビジョンではない、これは何か別のもの…。

「まさか…おじいちゃんたちが言っていた『闇のデュエル』!?!」

「…今のを考慮すれば、その可能性はある…」

ゆまの言葉に私は頷く。

もし、本当に噂に聞く『闇のデュエル』だというなら、デュエルで勝たなければ逃げられないという相手の話も現実味を帯びてくる。

「ゆま、構えて。やるほか…なさそう…」

「そうみたいです…」

私たちはお互いに、鞆からデュエルディスクを取り出し構えた。

『やる気になったようだな…』

「無理矢理そうさせて、よく言うですう!」

「…倒す!」

「『デュエル!!!』」

……T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまと!」

恵「恵の……」

ゆま・恵「『今回の最強カード』」

ゆま「ユウくん、負けちゃいましたね……」

恵「うん……でも遊星おじさま相手なら仕方ない……。

というかおじさまはラックが高すぎる……。

ランサー並の幸運度のユウは良く頑張った……」

ゆま「幸運度Eですね!」

恵「それより今回の最強カードを紹介する……」

ゆま「今回の最強カードは…もちろんコレです！」

《スターダスト・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ

魔法・罫・効果モンスターの効果が発動した時、

このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、

この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

ゆま「遊星おじさんのエースモンスターですよ！」

恵「出しやすさと使える効果を兼ね備えた、ユウの《スクラップ・ドラゴン》と並ぶレベル8シンクロの代表選手…」

ゆま「主人公ステータスの2500の攻撃力はちょっと物足りないですが、汎用性に優れまくってます！」

恵「《スターダスト・ドラゴンノバスター》や《セイヴァー・スター・ドラゴン》、

《シューティング・スター・ドラゴン》といった進化系もあり、これらのデッキを組む時は必須になる。

シンクロ召喚を使うデッキなら、かなりの確率で投入されている…。

警戒はしたほうがいい…」

ゆま「今回はここまでです！ それにしても…何だか私たち大変なことになっちゃいますよ、メグちゃん」

恵「問題無い…（キュツ、キュツ）」

ゆま「あれ、なんでリップつけてるんですか、メグちゃん？」

恵「準備…。眠り姫を起こすのは王子のキス…これ、王道…」

ゆま「！？ その発想は無かったですう！

私もすぐやるですう！」

恵「ではまた次回…」

第10話 父と子 星屑龍VS鉄屑龍（後書き）

新章突入編の今回はイベント多め。

遊輝初の敗北。さらに遊輝、ゆま、恵の心情。

三人は他の誰かの『輝き』を前に、いらんことを考え始めました。
果たしてどうなる事やら…。

2011/12/6

少し修正しました。

第11話 夢とつつの朝（前書き）

今回はデュエル無し、ちょっとしたイベント回。
正直読み飛ばしてもらっていい気がする…。

第11話 夢とじつじつの朝

Side ゆま

「はわっ!？」

私はベッドでパツと目を覚ましました。

今、とんでもないことが起こったような…。

「ほえ？」

そこまで考えてから私は、目の前の光景に違和感を覚えた。

まず目に写った天井は、私の部屋とは違う知らない天井でした。

それにこんなふかふかしたベッド、私寝たこと無いですよ!

それに、それに!

「な、なんでユウくんが同じベッドで寝てるんですか!？」

見ればそこにいたのはユウくん。

どう思い出そうとしても、昨日の夜が思い出せません。

も、もしかして私、一代イベントの記憶が無くなっちゃってるんですか!？

そこまで考えて、私はもう一つの違和感に気付きました。

ユウくんが…私の知ってるユウくんじゃない。

どう見ても20代半ば以上、大人なユウくんでした。

そしてふと鏡を見ると…そこには栗色の髪をセミロングに伸ばし、淡いクリーム色のパジャマを着た大人の女性がいました。

「え？ これ、私ですか!？」

信じられなくて手を振ったりすると、鏡の中の女性も手を振ります。間違い無く、鏡に映った私です。

「な、何が一体どうなってるんですか…?」

もう訳分らないことの連続に、私の思考回路はショート寸前です。

「う、ううん…」

そんな中、大人なユウくんが目を覚ましました。

「おはよう、ゆま」

そうやって笑顔を向けるユウくん。

「ゆ、ユウくん、何かおかしいです!？」

ユウちゃんと私が一緒のベッドで寝てて大人です!？」

「どうしたのさ、一体？ 全然訳が分からないんだけど…?」

私は完全にパニックしちゃって、何を言ってるのか自分でも分からない状態です。

そんな中、さらに私をパニックに陥れる事態が起きました。

「ぱぱー、ままー、おはよー!」

「おはよー!」

扉を突き破るようにして二つの影が入ってきて私に飛び付きました。双子の小さな女の子です。ポニーテールを右で纏めているか、左で纏めているかぐらいしか差が分かりません。

「…ほえ？ ままどうしたの？」

「どうしたの？」

可愛らしく小首を傾げる双子の女の子に、私は目が点で言葉ができません。そんな中、ユウくんは女の子たちの頭をぽんと叩きながら言いました。

「ママはどうやらお寝坊さんみたいだよ、ゆき、まき」

「ばば？ ままはお寝坊さん？」

「お寝坊さん？」

「そうだよ、ほら、ママを起こしてあげて」

「うん！ まま、起きろお！！」「」

元気に返事をした双子の女の子は、私に飛びかかるように抱きついてきました。抱きしめた瞬間、何とも言えない幸せな気持ちが私の中に広がります。

「あ、あう…」

その感覚に私が戸惑っていると、近付いてきたユウくんが私に囁きました。

「どうしたんだい、ゆま？」

ほら、娘たちだよ。僕たち夫婦の幸せの結晶」

その囁きは、私の中の何かを溶かして行きました。これじゃさつきまで感じていた違和感の正体が…。

…あれ？ 違和感ってなんでしたっけ？
そんなことより！

「ほら、ゆきもまきもお顔洗って、朝ごはんにしようね。
幼稚園遅れちゃうですよ」

「ぶう。 お寝坊さんのままに言われたくない」

「言われたくない」

「ふふふ…ママとお顔洗いに行こうね」

「うん！」

左右の腕を小さな手でぶら下がるように掴む双子の娘に、私はほほ笑みながら洗面所に向かいます。

主婦の朝は戦場ですう！

子供たちに幼稚園の準備させて、朝ごはん作って、夫と子供たちを見送って…寝ぼけてなんていられないです！

そんな風に思いながら、私は朝の支度に向かうのでした。

S i d e o u t

S i d e 恵

「はっ!?!」

私が目を覚ますと、そこにあつたのは知らない天井だった。身体を起こしてみると、整然とした部屋に優しい色の壁紙と実に私好みの部屋だった。

部屋を見渡そうとして、私は違和感に気付く。

胸が…重い？

視線を真下に下げると…そこにあつたのは確かに存在する二つの膨らみ。

そこに広がっていた大平原は、丘へと変化を遂げていた。

私は力の限りガツポーズ。

これでゆまと下着を買いに行ったときに、恥ずかしい目に合わずに済む。

店員にキッズコーナーに案内された時の悔しさは、私は忘れていない。

だが…もはやその心配はない！ 私は勝利者だ！

頑張った！ 感動した、私の胸！！

…いけない、落ち着こう。

冷静に考えて、胸がいきなり大きくなるということはありません。

残念ながら…誠に残念ながらあり得ない。

そうなれば、これには何かしらの原因があるはず。

そう思い、視線を隣へ向けると…。

「ユウ…」

私の寝ていたベッドには、私の隣にユウが寝ていた。

しかも私の知るユウでは無い。明らかに私の知るユウより10ほど年齢が上だ。

バツとベッドから飛び起きると、鏡台の前に移動し、鏡を凝視する。そこにいたのは腰までの長い髪を持つ、大人の女性だった。

「…私？」

信じられず指で唇をなぞると、鏡の中の女性も同じように唇をなぞる。

もう疑う余地はない、鏡の中の女性は私だ。

私もユウも…大人になっている？

「…どういうこと？」

『タイムスリップ』という単語が私の脳裏をよぎる。

荒唐無稽に感じるが、破滅の未来からタイムスリップしてきた未来人に襲撃されたネオドミノシティに暮らす人間なら、タイムスリップが絵空事ではないことは良く言っている。

意識を失う前に『何か』があった。そして私たちは未来に飛ばされた…。

そんな仮説が私の頭の中で立っていく。

その時だ。

「オギャア、オギャア！！」

部屋の隅から突如聞こえ始めた鳴き声に、私はびっくりして身をすくませた。

すると、その声に反応して、ユウが起き上がる。

「あ…ああ、みゆ。 どうしたんだい？」

寝ぼけ眼で、それでもしつかりとした足取りで立ちあがったユウは部屋の片隅の小さなベッドから赤ん坊を抱き上げた。

「どうしたんだい、みゆ？ おむつ…じゃないね。 そうなると…」

泣きやまない赤ん坊に、ユウが考え込むようにすると、その時ユウが私に気付いた。

「あ、恵、起きてたんだ。　だったら、みゆを見てくれてもいいのに」

そう少し口を尖らせながら、ユウは私に近付いてくる。するとユウの腕の中の赤ん坊はゆっくりと泣きやんでいき、私の方にその小さな手を伸ばしてきた。

「ああ、みゆはママを探してたんだね」

「…ママ？」

「はい」

そう言ってユウが、赤ん坊を差し出して来る。私はそれを、ゆっくりと優しく抱きかかえた。その瞬間、私の中を何とも言えない幸せな気持ちが駆け巡った。

「う、うあ…」

その甘い痺れに私が戸惑っていると、近付いてきたユウが私に囁く。

「あはは、やっぱり僕より恵の方がいいみたいだ。

こんなに笑って…」

ほら、恵も抱きしめてあげて、僕たちの娘を。

僕たち夫婦の幸せの結晶を」

その囁きが、私の中の何かを溶かしてゆく。
本能的に感じる。
不味い、このままだと何か取り返しのつかないことが…。

…うん、不味い。

このままだと、夫が仕事に遅れてしまう。

「…ごめんなさい、あなた。　すぐに朝食の準備を…」

「ああ、いいよ。　朝食ぐらいは僕が作るさ。

それより、恵はもう少しみゆを抱いていてあげて。

夜離れてるのが寂しかったみたいだからね」

そうほほ笑んで夫は、寝室から出て行く。

私はすやすやと安らかに寝息をたて始めた愛しい娘を、ほほ笑みながら抱きしめるのだった…。

S i d e o u t

S i d e ? ?

夢とつつつの境は一つ。

何をつつつとするのか、何を夢とするのか…それを決めるのは、その者の心だけ。

さあ、夢のように甘いつつつに酔いしれなさい、愚かな贅よ。

その命を、偉大なる冥魔神さまに捧げるのです。

そして、冥魔神さまの復活を！

…T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまとー!」

恵「恵の…!」

ゆま・恵「今回の最強カード!」

ゆま「って、今回デュエル無かったじゃないですか!」

恵「うん…でも紹介していないカードもあるし、ここでその分を紹介するらしい…」

ゆま「まあ、良いんですけど…」

恵「そういうわけで、今回の最強カードを紹介する…。

最強カードは…これ!」

《氷結のフィッツジェラルド》

シンクロ・効果モンスター

星5 / 水属性 / 悪魔族 / 攻2500 / 守2500

閻属性チューナー+チューナー以外の獣族モンスター1体

このカードが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

手札を1枚捨てる事でこのカードを墓地から表側守備表示で特殊召喚する。

ゆま「前回活躍した、ダークシンクロ出身のカードです。

これも以前の《漆黒のズムウォルト》同様、感想でオススメされていたので作者が採用したみたいですね」

恵「ダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができないという、アンティークギアシリーズのような能力を持っている。

さらに自己再生能力持ち。

この能力が無かったらユウは前回、《ジャンク・ウォリアー》が出た時点で負けていた…」

ゆま「悪くは無いんですが、結構召喚制限がきついです。

ただ、ユウくんのデッキならジャンクロン+ライコウという具合に簡単に出せます」

恵「本当に、何故ダークシンクロ出身のカードが合うのか謎使用…。ジャンドは鬼畜だから闇…ということ?」

ゆま「闇といえば私たち、不味いんじゃないですか?」

恵「うん、不味い…。これは明らかな闇行き決定モード…。

とはいえ、自力でどうにかなるかどうかが疑問…。

ユウに期待するしかない…」

ゆま「そうですね! やっぱり妻たるもの夫を信じないとです!」

恵「…ゆま、今回の話読んだ? ユウは私の夫」

ゆま「あはは、何言ってるんですか? ユウくんは、ゆまの旦那さん

「だっただじゃないですか」

ゆま・恵「……………」

ゆま「メグちゃん、ちょっとお話があります。裏まで顔貸せ、ですう」

恵「…奇遇、私もゆまに O H A N A S H I I があつた。ちよつと来て欲しい…」

ゆま・恵「…ではまた次回」「」

第11話 夢とつつつの朝（後書き）

ヤバいことになっていそうなゆまと恵。
現状については次回に。

今回で完全にストックが底をついたので、更新は遅れると思います
ので気長にお待ちください。

第12話 非日常への一歩(前書き)

今回から、遊輝が非日常へと関わっていきます。

第12話 非日常への一步

Side 遊輝

キキイーーーー!!

高加速からドリフト状態で急停止したDホイールが、甲高いブレーキ音を響かせる。

深夜も近い時間に近所迷惑この上ないが、僕はそんなことを気にしていられる余裕はなかった。

ヘルメットを脱ぎ去り、目の前の建物を見上げる。

ここは母さんの務めるネオドミノ中央病院。この街一番の医療設備と規模を誇る病院だ。

僕はその中を足早に駆けて行く。

そして目指す病室を開けた。

そこには…

「遊輝…」

そこには母さんが悲しそうな顔で立っていた。

その部屋にはとなり合うようにしてベッドが二つ鎮座している。

そしてそこに横になっていたのは…。

「ゆま! 恵!」

つい数時間前に別れたばかりの二人が横たわっていた。

「ゆま! 恵!」

ベッドに駆け寄り、声をかけるが全く反応は無い。
だが僕は二人の手を握り、声を掛け続ける。

「無駄よ、遊輝……」

そんな僕の肩を母さんが叩き、僕を止めた。

「母さん……一体2人に何があつたのさ!？」

「……『ライフイーター』よ」

思わず怒鳴ってしまった僕に、母さんは目を伏せながら母さんが答える。

「『ライフイーター』？」

その言葉に母さんは静かに頷くと話を始めた。

2週間ほど前から、ネオドミノシティのデュエリストが襲われるという事件が起こっていたらしい。

相手は不明、被害者のデュエルディスクからも何故か相手データは検出されず、目撃者もゼロ。

デュエルで敗北したと思われる被害者は皆、目が覚めないというまるで魂を喰われたかのような惨状に、『ライフイーター』という通称が付けられたようだ。

「それで、ゆまと恵もその『ライフイーター』ってやつに襲われたってこと?」

「症状が他の被害者と同じよ。」

それに発見された時には2人はデュエルディスクをつけていたわ。もつとも、これもやはり相手データだけは検出されなかった…」

「そんな…」

僕には初耳の話だらけだ。

聞けば、どうやら無用な混乱を避けるため、治安警察によってこの事件は秘匿されているらしい。

被害者はすでに50人を越え、その犯人が分からない怪事件だ。治安警察の措置も当然と言えば当然と思う。

「それで母さん…ゆまと恵はどんな状態なの？」

「外傷もなければ臓器・脳波にも異常は無し。」

医学的には眠っているだけ。でも何故か目覚めないのよ。

まるで…魂を抜かれたみたいだ…」

「眠っているだけ…？」

そう聞いて、僕はホツとため息をついた。

もつとんでもないことになっていいると思っただけど、眠っている状態なら大丈夫なのかな？

そんな甘い考えが顔に出ていたのだろう。

母さんが険しい顔で言ってきた。

「言ったでしょ。ライファイター事件の被害者は目が覚めないって？」

それに原因不明の状態よ。

例え目覚めたとしても、それはいつ？ 五年先、十年先、二十年

先かもしれないわ。

その間過ぎ去ってしまった時間は…どんなことをしても戻らない。誰かと過ごさずだった時間を、大切な人と同じ時間を生きれない。

遊輝：覚めない眠りは『死』と同義語よ」

そう言われて、僕は改めてゆまと恵の状態を理解した。ともすればほほ笑みすら浮かべながら横になっている2人。僕はその2人を茫然と見ることしかできなかった。

「…」

あの後、僕は成す術無く病院を後にし、家へと戻ってきた。何もする気力が無い…。

椅子に座り、無気力にたたずんでいるだけだった。

ふと視線を巡らすと、机の上には僕とゆまと恵の3人で撮ったいくつもの写真が立てかけられている。

どの写真でもゆまと恵は笑顔だった。

すでに覚えていないような子供のころの写真もあれば、最近の写真もある。

僕たち3人が一緒に歩んできた確かな時間の証明が、そこにあった。この笑顔が見られない？

この2人と同じ時間を生きられない？

「ッ！！」

ドカツ！？

そんな考えが頭をよぎった瞬間、僕はイライラを吐き出すように壁に拳を叩きつけていた。

「ゆま…恵…！！」

打ち付けた拳からのジクジクとした痛みが、僕の意識を覚醒させていく。

母さんはライファイター事件は父さんと治安警察の牛尾さんが追っているから任せろ、自分もきつと被害者たちを目覚めさせる方法を見つける、だから何も心配するなど言っていた。

確かに父さんも母さんも信じてる。

でも…僕はそれをただ待っていることなんてできない！

「奪われたものは…必ず取り返す…！！」

僕は決意を込めて立ち上がった。

僕がまず始めたのは情報収集だ。

まず僕はライファイター事件について詳しく知らない。とにかくそれを知ることが先決だろう。

そう思つてパソコンに向かい情報収集を始めたが大したものはない。掴めない。

それというのも治安警察が事件を公表していないから、ほとんど都市伝説みたいな噂のみがまことしやかに囁かれているだけだった。僕の目的は、ゆまと恵を取り戻すことだ。

その最短ルートは『ライファイター』本人に接触、ゆまと恵の意識を戻す方法を聞き出すことだろう。

だが、こんな噂程度じゃどうしようもない。もっと詳しい情報が必要だ。

天井を仰ぎながら、僕は考えを巡らせる。

「どうしよう…いつそのこと、治安警察のコンピュータにハッキングを…」

そこまで考えて、僕は頭を振つてその考えを振り払う。

治安警察のコンピュータには父さんのセキュリティが入っている。

電脳戦で僕が父さんに勝てるか？ 答えはNOだ。

そうならば…。

「…」

一つだけ、アテはある。

でもそれをするとなれば、恐らく必要なものは相当だ。

それを短時間で手に入れるとすれば…『違法』に手を出すしかない。どうする、僕？

「…答えは決まってるか…」

ゆまと恵を取り戻すためなら、僕は違法にだって手を出す！」

迷つたのは一瞬のこと。

僕は自分の決意を口に出すとデッキ、そしてデュエルディスクを持って立ち上がった。

薄暗い光に、タバコと酒の匂いが鼻につく。

キィキィと耳障りな音をたてるイスに座りながら、僕はその時をジツと待っていた。

やがてドアが開かれ、いかつい顔の男が入ってきた。

「ボウズ、出番だ。来な」

その言葉に、僕は立ち上がるとその男について歩き出す。

「ボウズ…名前はなんだったか？」

「…ダニエル」

僕は当然のように偽名を名乗った。

僕の外見もいつものものではない。

服装は袖の破れた革ジャン…サテイスファクション・スタイルと呼ばれる革ジャンにジーンズとかなりラフな格好にしている。

顔にはメーカーを模したペイントを施し、遠目からはピアスに見えるようなシールを顔に付けて、髪形も無理矢理後ろで束ねている。

そんな変装をして僕がいるのは、旧サテライト地区の奥に位置する場所にある裏デュエル場だ。

ここでは、日々違法な賭けデュエルが行われている。
そして…僕は今、最も危険な賭けデュエルに出場しようとしていた。

「OK、ダニエル。 テメエの仕事を言ってやろう。」

テメエは生け贄だよ。今日のメイスイイベントに捧げられたな。

誰もテメエが勝つなんて思っちゃいねえ。

精々このキングに惨めにスタボロにされな。

観客だってそれを見に来てるんだぜ」

「…そう」

僕はぼろが出ないように、極力言葉を出さないように手短に答える。

「チィ、可愛げのないガキだぜ」

そう言って男はドアを開け放った。

そこにいたのはたくさんの人相の悪い男たち。

全員が熱狂したように何か雄叫びをあげている。

そして中央には、まるでプロレスの金網デスマッチのごとくリングがしつらえられていた。

「ほら行きな、あれがテメエの仕事場だ」

そう言って顎でリングを指す男の言葉に従い、僕は歩き出すと、振り返った。

「さっき俺の仕事はスタボロにされることって言ってたけど…別に勝ってしまってもかまわないんでしょ？」

変装のため、『俺』なんて日頃使わない口調でおどけて見せる。

「言いやがるな、ガキ」

僕の言葉に男がおかしそうに笑った。

「俺に賭ければ儲けますよ」

「生憎、大穴狙いの勝ち目のない賭けはしない主義でな」

「それは残念」

そう言っつて肩を竦めると、僕はリングへとのぼって行った。

「テメエが今日の生け贄か？」

そこに待っていたのは革ジャンにモヒカンという、凄まじいファッションセンスの人だった。

うーん…ジャックおじさんもとんでもないファッションで来ることもあるけど、キングを名乗るとファッションセンスもとんでもないことになるんだろうか？

「生憎、生け贄のつもりはない…。」

俺は手持ちを全額、俺の勝ちに賭けてるんでね」

「ふん、強気なガキだ。
ほれ、付けな！」

そう言うって投げよこしてきたのは首輪とリストバンドが二つ…衝撃増幅装置だ。

ライフダメージが実際のものとなってプレイヤーを襲う特殊装置。その衝撃は凄まじく、ライフゼロになれば失神くらいならば当たり前。後遺症が残る可能性もあるし、最悪ショックで心肺停止もあり得る。当然ながら違法である。

これこそが違法デュエルの中で最も危険なデュエルであり、今から僕が挑むメインイベント…命懸けの『ヘルデュエル』だ。

僕は、首輪とリストバンドをはめるとデッキをデュエルディスクへとセットする。

これで準備は整った。

『皆さま、本日のメインイベントです！』

命懸けの『ヘルデュエル』！ 対戦カードは我らがキング、ビースト大野とダニエル少年とのデュエルだ…！』

「「「やれ、キング…！ ぶち殺せ…！」「」」

「「「殺せ 殺せ 殺せ ……！」「」」

周囲からの『殺せ』コールに手を振りながら応えるビースト大野とかいう対戦相手。

「さて、準備はいいかガキ！

このキングさまに叩きつぶされるんだ、精々いい悲鳴を聞かせてくれよ…！」

「…響く悲鳴が、あなたのじゃなければいいな」

「デュエル!!」

遊輝	LP 4000
大野	LP 4000

「…俺のターン、ドロ。モンスターを裏守備表示で召喚。1枚カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン! ドロー!

手札から《グラディアルトレーナー剣闘訓練所》を発動!

《グラディアルビースト剣闘獣ラクエル》を手札に加える!」

その動きを見て、僕は相手のデッキを理解した。

『剣闘獣 (グラディアルビースト)』…戦闘を行うことでデッキに戻り、他の剣闘獣 (グラディアルビースト) を呼び出す。

そしてその効果で呼び出された剣闘獣 (グラディアルビースト) は、強力な効果を発揮していくシリーズモンスター群だ。

ライトロードなどと並ぶ強力なデッキと言えるだろう。

「《グラディアルビースト剣闘獣ラクエル》を攻撃表示で召喚。

さらに《グラディアルビースト剣闘獣の闘器グラディウス》をラクエルに装備!

バトルだ、ラクエルで裏守備モンスターに攻撃！！」

「このカードは《ライトロード・ハンター ライコウ》、その効果で《剣闘獣ラクエル》を破壊。そしてデッキトップから3枚カードを墓地に送る」

墓地に送られたカードは《死者蘇生》に《クリッター》に《光の援軍》…有効なカードが軒並み墓地送りに…。
僕の運は相変わらずだ。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

「…俺のターン、ドロ。手札から魔法発動、《サイクロン》。伏せカードを破壊する」

破壊したカードは《収縮》。戦闘補助カードだ。

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚。
効果によって墓地の《ライトロード・ハンター ライコウ》を特殊召喚。

レベル2の《ライトロード・ハンター ライコウ》に、レベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

2 + 3 = 5

「心の闇が、慈悲なき兵器を作りだす。

シンクロ召喚、蹂躞せよ《A・O・J カタストル》！！」

《A・O・J カタストル》 星5 / 闇属性 / 機械族 / 攻2200
/ 守1200

「バトル、《A・O・J カタストル》でダイレクトアタック。
ジェノサイドレーザー、ファイア！」

カタストルの頭部から、なぎ払うように放たれた光線が直撃する。

大野

LP4000 1800

「うぐあああ!!!?!」

ライフへ2000を超えるダメージを負って、ビースト大野がその
衝撃に声を上げる。

「…ターンエンド」

「テメエ…やってくれたな、ガキ!!! もう容赦しねえぞ!!!」

「…早く進めろ」

僕は相手の怒鳴り声を完全に無視して、先を促す。

「ぶっ殺す! 俺のターン、ドロー!!!」

モンスターを裏守備表示で召喚、カードを一枚伏せてターンエン

「ただ」

「…俺のターン、ドロウ。」

手札から《カードガンナー》を攻撃表示で召喚」

《カードガンナー》 星3/地属性/機械族/攻 400/守 400

「《カードガンナー》の効果発動、デッキトップから墓地へ3枚のカードを送り、エンドフェイズまで攻撃力を1500ポイントアップ」

《カードガンナー》 攻撃力400 1900

墓地に落ちたカードは《エフェクト・ヴェーラー》に《ドッペル・ウォリアー》に《ライトロード・マジシャン ライラ》。

「バトル、《A・O・J カタストル》で裏守備モンスターを攻撃。ジェノサイドレーザー、ファイア！」

「トラップ発動、《和睦の使者》！」

このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは0になる。

このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない」

「…ちいっ」

僕は思わず舌打ちした。

このターンで決着はつかない。

それどころか《和睦の使者》グラディアルビーストは戦闘自体は起こったことになる。

今攻撃した裏守備カードは《剣闘獣ラニスタ》グラディアルビーストだった。

効果付きで他の剣闘獣が召喚されてしまう。

「バトルフェイズを終了する……」

「この瞬間、バトルを行った《剣闘獣ラニスタ》グラディアルビーストの効果発動！

戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ラニスタ」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

現れる《剣闘獣ラクエル》グラディアルビーストを召喚！」

《剣闘獣ラクエル》グラディアルビースト 星4 / 炎属性 / 獣戦士族 / 攻1800 / 守400

「さらに《剣闘獣ラクエル》グラディアルビーストの効果発動、このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した場合、このカードの元々の攻撃力は2100になる」

《剣闘獣ラクエル》グラディアルビースト 攻撃力1800 2100

「……ターンエンド」

「俺のターンだ！ ドロー！」

ヒヤハハ、見せてやるぜ、俺のエースを！

《剣闘獣ベストロウリイ》を召喚！」

グラディアルビースト
《剣闘獣ベストロウリイ》 星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1500 / 守800

現れたのは切り札と呼ぶには小振りなモンスターだ。

だが、このカードこそ『剣闘獣（グラディアルビースト）』デッキのキーカードだった。

「場の《剣闘獣ベストロウリイ》と《剣闘獣ラクエル》をデッキに戻し、現れる《剣闘獣ガイザレス》！！」

グラディアルビースト
《剣闘獣ガイザレス》 星6 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2400 / 守1500

そこに現れたのは巨大な鳥型のモンスターだ。

戦う獣、グラディアルビースト剣闘獣のエースである風格を漂わせながら、空に我が物顔で浮かぶガイザレス。

「《剣闘獣ガイザレス》の効果発動！」

このカードが特殊召喚に成功した時、フィールド上のカードを2枚まで破壊する事ができる。

この効果でお前の《A・O・J カタストル》と《カードガンナ》を破壊する。

マグナムブレイズ!!」

ガイザレスの操る空気圧弾が、僕の《A・O・J カタストル》と《カードガンナー》を貫き破壊する。

「…《カードガンナー》の効果で1枚カードをドロ」

「だがこれでガラ空きだ!

グランドリアルリスト

《剣闘獣ガイザレス》でダイレクトアタック!

エアロドロップ!!」

飛び上がったガイザレスが急降下と共に、猛禽のような鋭い爪で襲いかかってくる。

遊輝

LP4000 1600

「ヒヤハハハ! どうだ、痛みに悶える!!」

衝撃増幅装置から、衝撃が僕の身体を駆け巡る。
だが…。

「は、はは…あはははは…」

僕の口から漏れたのは悲鳴ではなく、笑いだった。

「な、なんだこいつ! 痛くねえのか!?!」

僕の様子に、ビースト大野は戸惑ったように言う。

それはそうだろう、2000を超えるダメージから発生する衝撃は相当のものだ。

それだけで失神しかねない。

でも…。

「こんな程度の痛み…痛みのうちに入らない！」

僕はもつと大きな痛みを味わったばかりだ。

ゆまと恵の2人がいない。一緒に生きられないかもしれない。

そう聞かされたときの心の痛み…それに比べればこんなものの痛みのうちに入らない！

「ちい、不気味な奴め！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「…俺のターン、ドロー。」

これで終わりだ」

「なにに？」

「手札から魔法発動、《ダーク・バースト》。この効果で墓地の《ジャンク・シンクロン》を手札に戻す。

そしてこの瞬間、墓地の間属性モンスターは《クリッター》・《ドッペル・ウォリアー》・《A・O・J カタストル》の3体のみになった。

そのため、このモンスターの特殊召喚条件がクリアされる。

来い、《ダーク・アームド・ドラゴン》！！」

現れたのは黒い龍。全てを燃やしつくすような黒い炎を纏っている。

「さらに《ジャンク・シンクロン》を通常召喚し効果発動。
墓地の《ドッペル・ウォリアー》を特殊召喚。
レベル2の《ドッペル・ウォリアー》にレベル3《ジャンク・シンクロン》をチューニング」

2 + 3 = 5

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ。
シンクロ召喚。 いでよ、《ジャンク・ウォリアー》」

《ジャンク・ウォリアー》 星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2300 /
守1300

「《ジャンク・ウォリアー》の効果発動。

《ジャンク・ウォリアー》のシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

さらに《ドッペル・ウォリアー》の効果発動。

《ドッペル・ウォリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドッペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚することができる。

《ドッペル・ウォリアー》、《ジャンク・ウォリアー》の順で効果は発動する…」

場に現れる2体のドッペル・トークン。

ドッペル・トークン 戦士族・闇・星1・攻/守400

「パワー・オブ・フェローズ！」

そして2体のドッペル・トークンから光が《ジャンク・ウォリアー》へと吸収されていく。

《ジャンク・ウォリアー》 攻撃力2300 3100

「攻撃力3100だと！？ ガイザレスより攻撃力が上じゃねえか！？」

「…安心して欲しい。ガイザレスとはバトルはしない。

《ダーク・アームド・ドラゴン》の効果発動、自分の墓地の闇属性モンスター1体を

ゲームから除外する事で、フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

《A・O・J カタストル》を除外し、まずは伏せカードを破壊する。

「バニシング・カッター！！！」

《ダーク・アームド・ドラゴン》から放たれたエネルギーが伏せカードを切り裂く。

「お、俺のミラーフォースが！？」

「再び《ダーク・アームド・ドラゴン》の効果発動、《クリッター》を除外しその御自慢の《グラディアルビースト剣闘獣ガイザレス》を破壊する。

バニシング・カッター、第二打アー！！」

《ダーク・アームド・ドラゴン》から放たれたエネルギーが、今度は^{グラディアルビースト}《剣闘獣ガイザレス》を切り裂いた。

手札ゼロ、場は全滅の状態を前にビースト大野がうるたえ出す。

「う、うあああ…や、やめろ、やめてくれええ！！」

「…見苦しい。仮にもキングを名乗ってるなら、散り際まで気高くあるべきだ。

それに…あなたも今まで同じように幾人もの相手を叩き潰してきたんでしょ？

今度はあなたの番になった、ただ…それだけだよ」

そう言つて、僕は何の感慨も無くモンスターたちに総攻撃を命じた。

「《ダーク・アームド・ドラゴン》、《ジャンク・ウォリアー》、ダイレクトアタックだ。

ダーク・アームド・ヴァニッシャー！！

スクラップ・フィスト！！」

僕の言葉に答え、《ダーク・アームド・ドラゴン》と《ジャンク・ウォリアー》が攻撃をしかける。

「う、うわあああああ！！！！…？？」

対戦相手の悲鳴に、僕は一つ息をついて目を閉じたのだった。

大野

LP1800 - 4100

「うぎゃあああああ！！！」

4000を超える超過ダメージによる痛みで絶叫を上げる対戦相手を無視して、僕は衝撃増幅装置を外すとリングから降りて行く。あれほど熱狂に溢れていた会場は、水を打ったようにシーンと静まり返っていた。

そこに、ここでキングと呼ばれていた男の悲鳴だけが響く。そんな中僕を案内した男を見つけた僕は、いたずらっぽく囁く。

「ね、俺に賭ければ儲けられたでしょ？」

ただそれだけ言って、僕はその男の脇を通り過ぎるのだった。

「……、か……」

違法賭けデュエル場を後にした僕は、ネオドミノシティの隅にあるエリアへと来ていた。

ダイヤモンドエリア……ここはかつて、シティにも行けず、かといってサテライトにも行きたくないといういわゆる『訳アリ』の人たちが集まった曰くつきのエリアだ。

当時から街を取り巻く事情は随分変わったが、一度染み付いた闇の匂いと言うのは拭えないもの、今でもこのエリアはひと癖もふた癖もある人々がたむろしている。

そんなエリアのダウンタウン、さらにこれまた見るからに怪しい酒場が僕の目的地だ。

地下に店舗を構える酒場で、入り口には薄汚れた『B o o t l e g』という看板がある。

正直言えば近寄りたくない雰囲気だが、それも言えない。

僕は抱えたバッグの重みを確かめる。

そこにつまっっているのは、結構な金額の現金だ。

ヘルデュエルのファイトマネーが少々と、僕の個人的なお金を自分の勝利に全額賭けた結果である。僕の勝ちは随分と大穴だったらしい。

これからもキングとして活躍して欲しいと言われたが、当然僕にそんな気はない。

僕の目的であった、まとまった現金は達成できたし今回みたいに心踊らない賭けデュエルは金輪際御免こうむる。

「……行こう」

僕は意を決して一步を踏み出したが、そこで激しい目眩に襲われた。

「く…さっきのヘルデュエルのダメージか…」

痛くないつもりでも、身体にはしっかりとダメージが残っていたらしい。

だが、こんなところで立ち止まれない。

「ゆま…恵…」

僕はそれだけ呟き自分を奮い立たせると、酒場への階段を下りていった。

階段を下りたそこは、やはり予想通りの怪しさだった。

いかつい顔の男達が酒を酌み交わしている。

水タバコを吸う男もいるが、目がおかしい。吸っている物が普通のタバコなのかはなはだ疑問だ。

そんな男達の視線が突然現れた場違いな少年…つまり僕に集中する。僕はそんな視線をもともせずカウンター席へ座った。

「どうした坊や、道にでも迷ったのかい？　ここは迷子センターじゃねえんだぜ。

とつとと帰りな」

カウンターに座った僕に店のバーテンダーが話しかけてくる。

敵つい顔で発するその言葉は、明らかに友好的な雰囲気ではない。

「ミルクでも貰おうかな」

「…おいガキ、とつとと帰れって言ってるのがわかんねえのか？」

そう言ってバーテンダーが胸倉を掴んでくるが、それを無視して僕は一枚のカードを差し出す。

「!?!? これは…」

その瞬間、バーテンダーと周囲の視線が変わった。

「…取り次ぎをお願いします」

僕が言うと、バーテンダーはどこかに目配せをした。そして僕の前にグラスが差し出される。

「店のおごりのミルクだ。それ飲んでとつとと帰りな」

そういいながらバーテンダーは入り口を指し、意味ありげに目配せする。

「そうするよ…」

そう言って、一気にミルクを煽って立ち上がる。だが…。

「ひびく…」

吐き気と目眩でよろめいてしまう。

思った以上にヘルデュエルのダメージは大きかったみたいだ。

「ボウズ、どうした？」

「何でも無い…」

そう言っただけは鉛のように重くなった足で、出口の階段を上って行く。

「ぐぐ…」

階段を上り切り、道に出たあたりで僕は再び強烈な目眩に襲われた。

「こんなところで…休んでいるわけには…」

だが、そんな意志とは裏腹に視界がブラックアウトしていく。

「ゆ…ま…、めぐ…み…」

それだけ眩くと、僕の意識は完全に闇の中へと引きずり込まれていった。

S i d e o u t

「おつと…」

意識を失い、倒れ込む遊輝をやってきた男が寸でのところで支える。それは50代ほどの初老の男だった。

白髪 of 髪に無数に刻まれた皺、だが鋭さを失わない眼光が男がただ者ではないと物語る。

「やれやれ、困った小僧だ…」

完全に意識を失った遊輝を支えながらため息をつく、男は器用にも片手でタバコを取り出し火をつける。

「まったく…親子揃って一度思い立つと無茶をやりやがる。

まあ、見ていて飽きないがな」

そう言つて紫煙を燻らせながら、男は遊輝を連れてダイヤモンドエリアを進むのだった。

……T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまとー!」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード!」

ゆま「えう!? ユウくんがヘル化しちゃいました!」

恵「いや大丈夫、今回ちょっと暴走しただけ…と思いたい…」

ゆま「それにしても私たち、昏睡状態だったんですね」

恵「…うん、この間のアレは…残念だけど私たちの見てる夢だったみたい…」

ゆま「これはもうユウくんに助けてもらわないとどうしようも無いですけど…ユウくんが身体を壊しそうで見てて辛いです…」

恵「…今のユウを見るのは…私も辛い」

ゆま「はあ…とりあえず今回のコーナーを進めます」

恵「…今回のカードはこれ」

《《ダーク・アームド・ドラゴン》
効果モンスター（制限カード）》

星7 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守1000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の闇属性モンスターが3体の場合のみ特殊召喚できる。
自分のメインフェイズ時に自分の墓地の闇属性モンスター1体を
ゲームから除外する事で、フィールド上のカード1枚を選択して破
壊する。

ゆま「やっとユウくんの呼びかけに伝えてくれた、ユウくんの切り
札の一つです」

恵「… 定位置の墓地からやっと出てきた」

ゆま「このカード、一見出すの難しそうに見えて結構簡単なんです
よね」

恵「… 闇属性は優秀なモンスターが多く、採用率が高い。さらに今
回のユウのような方法で比較的墓地の闇属性モンスターの数を調整
するのはラク」

ゆま「効果も強力ですっ！」

恵「… 出てきた時点で確実に3枚のカードを壊せる状態になってい
る。

その力で場を一掃し、フィニッシャーになることも多い」

ゆま「今回はここまでです！ 次回はユウくんが怪人物『ライフィ
ーター』と接触します！」

恵「… ユウ、頑張つて。 お願い…」

ゆま「では、また次回ですう！」

第12話 非日常への一步(後書き)

今回は小ネタたっぷり。遊輝はやはり遊星の子。
最後の男はTFでよくお世話になるあの人です。

第13話 ライファイター（前書き）

皆さん、あけましておめでとございます。
今年もよろしくお願ひします。

今回は遂に敵勢力と遊輝が初交戦。

第13話 ライファイター

Side 遊輝

「う、うう…」

意識がゆっくりと覚醒していく。

見えてきたのは、見たことの無い天井だ。

打ちっぱなしのコンクリートの天井は寒々としている。

僕の寝ていたのは固いソファだ。僕の身体には毛布が一枚掛けられている。

「ここは…。！？ そうだ、僕は…！！」

「起きたか、小僧」

慌てて身体を起こすと、そこにいたのは50過ぎの初老の男だった。眼光の鋭さがただ者ではないことを物語る。

「ここは…?」

「俺の住処だ。気分はどうだ?」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます、雑賀さん」

そう言って僕は男 雑賀さんにぺこりと頭を下げる。

雑賀さんは父さんの古くからの知り合いらしい。

頼めば大抵のものを用意する凄腕の何でも屋である。

そして…僕の会おうとしていた人物だった。

「そうか…問題無いならいいな」

「？」

そうやって雑賀さんは僕に近付いてきた。
そして…

ドガッ！

「ぐっ！？」

気がつけば、僕は思い切り殴られていた。

「何をするんですか！？」

「何するか、だと？ 自分の胸に聞いてみる！」

そう言っただけ僕は胸倉を掴まれていた。

「お前が賭けデュエル場で暴れまわったのは知ってるんだよ！
バカガキが、違法のヘルデュエルなんぞに手を出しやがって。
そんなことが世間に知れたら、お前の親父とお袋の立場が危うく
なるのが分かってんのか！？」

「わかってますよ、そんなこと…」。

それでも…纏まったお金が必要だったんです」

「遊ぶ金でも欲しかったのか！」

「…欲しかったのはあなたに『ライファイター』の調査を依頼するためのお金です」

そう、僕が纏まった現金を欲しかったのはそのためだ。

どんなに『ライファイター』の情報を欲しても、僕の情報収集能力なんてたかが知れている。

だからこそ、その情報をその筋の専門家である雑賀さんに調べてもらおうと思ったのだ。

「『ライファイター』か…」

その言葉を聞いて、雑賀さんは僕の胸倉を掴んでいた手を離す。

「あの事件はお前の親父の遊星と、牛尾の旦那が追ってる。

お前みたいな子供が首を突っ込んで何になる？

子供は子供らしく、家で大人を信じて待ってればいい」

そう言う雑賀さんに、僕は首を振った。

そしてはつきりと答える。

「僕の大切なものが奪われました。

それを他人に丸投げして、ただ黙って待つことなんてできません。

奪われた、僕の大切な仲間は…この手で取り戻します!!」

「…」

僕の言葉に、雑賀さんは押し黙る。

やがて大きな、本当に大きなため息をついた。

「お前は、本当に遊星とそっくりだ。」

特に冷静そうなふりして、平気で無茶をやらかす辺りがな」

「協力は、してくれるんですか？」

「…分かった。調べてやる」

「良かった…あ、これは依頼料です」

「そんな金はいらんよ。 お前の大切な嬢ちゃんたちのために使え」

僕は現金の詰まったバッグを差し出したが、にべもなく一蹴されてしまった。

「お前の親父には世話になってるし、古い付き合いだ。」

それに…俺はお前のおしめを替えてやったことだってあるんだ。今度困った時には、金なんて考えずに普通に俺のところ来い。知恵ぐらいは貸してやる」

「雑賀さん…」

「お前はまだヘルデュエルのダメージが抜けきって無い。」

そのまま寝てる。

お前が次に目を覚ますまでには、出来る限りの情報を調べておいてやる。

それまでに体調を万全にしておけ」

「分かりました。 お願いします、雑賀…さん」

そう言って目を瞑ると、すぐに睡魔が襲ってきた。

緊張の糸が切れたせいかもしれない。
僕はその睡魔に抗うこともせず、眠りの世界へと堕ちていった。

Side out

Side 雑賀

「ふう…」

どうやら眠ったらしい。

説教なんてらしくないことをしたもんだ。

「それにしても、本当に親子でそっくりだな」

遊星がはじめて俺のところに来た時のことを思い出す。

仲間との絆であるDホイールとデッキを取り戻すために、セキユリ
ティ保管庫へ潜入するなんて無茶な依頼を持ってきた。

今日の遊輝の眼はあの時の遊星と同じ。

絆のために仲間のためにどんな無茶でもやっつてのける強さの、名前
の通り『輝き』を秘めた眼だった。

「遊星、お前の息子はしっかり育ってるぞ。 無鉄砲なところも含

めてな」

思わず笑いがこぼれ、タバコを取り出し火をつける。

「さて…」

さあ、大人として仕事の思考に切り替えよう。

『ライファイター』事件：このあらましについては大体は知っている。

どう考えても…いつかのダークシグナーたちのようにオカルトの匂いが染みついた、非常識な事件の可能性が高い。

「どう攻めるか…」

俺は紫煙を一つ燻らせると、パソコンに向かい始めた。

S i d e o u t

S i d e 遊輝

僕が眼を覚めたのは、すでに夕方になってからだった。

「起きたか？　そこにあるものを適当に喰ってる」

そう言っただけ作業をしながら雑賀さんはテーブルの上を指さした。どこかのコンビニで買ってきたらしいミネラルウォーターとおにぎりやサンドイッチが置いてある。

言われてみれば、かなりの時間何も口にしていなかったためお腹が減った。

僕はとりあえずミネラルウォーターを一口含んで喉を潤す。

「どうですか、調査の方は…？」

「もう少しで終わる…よし、終わった」

端末を弄っていた手を止めて椅子ごと僕に振り返った。

「さて…調査結果が出たぞ」

「ほ、本当ですか！？」

思わず身を乗り出す僕を手で制する雑賀さん。

「情報は逃げない。飯を喰いながらゆっくり話そう」

そう言っただけ雑賀さんはテーブルのホットドックへと手を伸ばすのだった。

「まず『ライファイター』について…遊輝、お前はどこまで知ってる？」

「2週間位前から出没している怪人物つてことぐらいしか…」

「情報が秘匿されてるからな、そんなもんだらう」

そう言つて缶コーヒーを煽ると、雑賀さんは話を始めた。

「『ライファイター』…2週間ほど前から始まった一連の事件とその犯人の通称だ。」

目撃者はゼロ。被害者総数は昨日までで56人。

被害地区は旧サテライト地区も含めたこのネオドミノシティ全域だ。

被害者はいずれもデュエリストで、デュエルを行った形跡があり被害者のライフカウンターはゼロになっていた。つまり負けたつてことだ。

デュエルに関するデータは何故か残つておらず、どんなデュエルを行つていたのかも分からない。

被害者は外傷等怪我が全く無い状態なのに謎の昏睡状態に陥り、全員が眠り続けている。

…と、これが『ライファイター』の大まかな概要だ」

雑賀さんの言葉に、僕はおにぎりを齧りながら頷き、先を促す。

「これらの情報から2つ分かったことがある。

まず1つ…『ライファイター』は1人じゃない」

「複数犯つてことですか？」

「冷静に考えてみる。」

この広いネオドミノシティ全域を駆けまわって二週間で50人以上を倒す…いくらなんでも働き過ぎだ。

そのことから、恐らく『ライファイター』は複数…被害の分布図からして、恐らく3人から4人以上の集団だと考えられる」

『ライファイター』は複数人のグループ…これは予想以上にやりにくい。

「そして分かったこと2つ目…これが一番重要なんだが…これは普通の事件じゃない」

「え、それはどういうことですか？」

「…お前、遊星が戦ってきた連中の話はきいたことがあるな？」

「ええ、もちろん」

父さんや母さんの昔話…邪神との戦いや未来をかけた戦いは子供のころに聞かされ、大いに憧れたものだ。

「今回の事件は、そういうオカルト的な大きな力を含んでいる可能性が高い。」

遊輝、例えばここだ…」

そう言って雑賀さんは端末を僕に見せる。

そこはこのネオドミノシティの地図が描かれており、点滅している地点がある。

メインストリートに通じる道で、それなりの規模の道だろう。

「ここは『ライフイーター事件』の被害場所の一つだが…午後八時前後、この道の真ん中でデュエルを行って目撃者を出さないようにするなら、お前ならどうする？」

「まず周囲の信号を変えて交通の流れを変えて、あと歩行者が入らないように入り口を封鎖して人を置いて…」

状況を想定して、僕は思ったことをつらつらと口にする。思った以上にしなければならぬことが多い。

「そう、まっとうならそういう手順を踏まないと『目撃者ゼロ』なんて結果は作れないんだ。

だが、当然ながらそれらの手順は使われていない。それなのに『目撃者ゼロ』なんて結果が作り出せている。

これは明らかに普通じゃない、いわば『常識の向こう側』の力だ。それに現代医学で原因不明の昏睡状態を『人為的に』引き起こしている時点で、もうまともじゃない。

遊輝、俺の言いたいことはわかるか？」

「さあ？」

「ヤバいから素直に手を引け、って言ってるんだ」

「…聞くと思いますか？」

そう言った僕に、雑賀さんは大仰に肩を竦めた。

「だと思ったよ。」

で、お前の目的は大切な嬢ちゃんたちのためにも、嬢ちゃんたちをやった『ライフファイター』を捕捉しようっていうんだろ？」

「はい。でも…」

そう、僕は『ライフファイター』に接触しゆまと恵を目覚めさせるための方法でもヒントでもを引きだそうとしていた。

必要なら力づくでもだ。

でも、相手が複数というのは誤算だ。

これでは接触できたとしても、その『ライフファイター』がゆまと恵を襲ったヤツかどうか分からない。

そんな不安が僕の顔から見て取れたのだろう。

雑賀さんはニヤリと笑うと、僕に言った。

「おいおい、俺を舐めるな。俺は依頼があれば大概のものは用意してやる何でも屋だぞ。」

…さつき説明した通り、被害の分布図から見て『ライフファイター』は複数と言ったが、分布には傾向がある。

東西南北の四方で被害が集中しているんだ。このことから東西南北にそれぞれ担当している『ライフファイター』がいると思われる。

で、お前の嬢ちゃんたちだがデュエルアカデミア周辺地区…完全に西部地区だ。

つまり…」

「西部地区担当の『ライフファイター』にやられた可能性が高い？」

「そういうことだ。この地区で捕捉すれば、嬢ちゃんたちをやった『ライフファイター』の可能性は高いだろう。」

さらに西部地区の被害には傾向がある。

これを見ても…」

「これは…」

そう言っただけに見せられた端末の画面にはいくつかの名前が並んでいる。その名前だが…。

「大庭先輩に岬先輩、他にもデュエルアカデミアで名前の聞いたことのある人ばかりだ…」

「そう、西部地区は被害がデュエルアカデミアの生徒に集中しているんだ。それも実力ある生徒にな。」

お前は十分、西部地区担当の『ライフイーター』のお眼鏡にかなっていると思うぞ」

「好都合ですよ。それじゃ、僕が西部地区を徘徊すれば向こうからやってくるってことですね」

「それもいいだろう。」

だが、その確率をさらに高める手を用意した」

そう言っただけで雑賀さんはメモリーを僕に投げてよこした。

「これは？」

「西部地区限定だが、『ライフイーター』探査用のデータだ。」

PDAの地図情報に入力すれば、リアルタイムで出現している可能性のある怪しい場所が点滅するようになってる」

これには僕も驚いた。

一体どういう仕組みで神出鬼没の『ライフイーター』を探している

のだろうか？

「なあに、簡単なことだ。

『ライファイター』は何かしらオカルト的な力で姿を見られないように目撃者ゼロの状況を作り出している。

それを見つckerただけだ」

「まさか、オカルトなものに反応するんですか？」

話の内容が少々胡散臭げになったので、僕は不安になりながら聞いてみる。

今の僕にとってはこのデータがゆまと恵を助けるための頼りだ、そこを眉唾なシロモノだったりしたら不安にもなる。

そんな僕の不安を、雑賀さんは笑いながら吹き飛ばした。

「まさか。俺はリアリストだ、オカルトのことなんて分からんよ。オカルトだろうがなんだろうが、『ライファイター』が人払いを行って目撃者ゼロの状況を作っている。その『結果』さえ分かれば、常識の範囲内で方策は立てられるさ。

いいか、『ライファイター』の現れた場所は当時交通量ゼロだ。でも、ネオドミノシティ全体の交通及び流通システムに混乱はない。ライファイター出現時間辺りに、その周辺のコンビニに時間通り荷物が届けられたりしているからな。

ここから言えることは、『ライファイター』の出現場所を本来通行するはずだった車両・歩行者は他の道を使った』ということだ。

お前に渡したのは交通システムとリンクしたデータで、『平常時に比べ異様に交通量が多くなった場所』をリアルタイムで点滅させる。

つまり……」

「その周辺に『ライフイーター』が現れ人払いをしたから、その影響で他の道の交通量が増えている？」

「そういうことだ。点滅した場所周辺を探してみれば『ライフイーター』との接触の確率は格段に上がるはずだ」

なるほど、納得できるシステムだ。これでもう、何も迷う必要はない。

「雑賀さん、ありがとうございました」

僕は立ち上がると深々と頭を下げる。

「行くのか？」

「はい、僕の大切なものを取り戻しに…」

「止めても…無駄だな。」

なら報酬の話しようか」

「えっ？ 報酬はいらないって…」

「俺は金はいらないと言ったんだ。俺もプロ、仕事にはきっちり報酬をもらう。」

そうだな…今度ブルーアイズ・マウンテンでも淹れてくれ。

お前と、お前の大切な嬢ちゃんたち3人揃ってな。

いいな、必ず3人揃ってだぞ」

「…はい、必ず！」

僕は再び雑賀さんに頭を深々と下げると、雑賀さんの仕事場を後にするのだった。

「さて…」

僕は道路脇に停車したDホイールに座り、缶コーヒーを飲みながら時計を見る。

時刻はそろそろ20時を廻る。

今までの傾向からして『ライファイター』の出現が多い時間だ。

ピピピッ！

その時、Dホイールと接続した僕のPDAがアラームを鳴らす。Dホイールの画面を見ると、近くに赤い点滅が現れていた。

「来たな！」

僕は缶コーヒーを投げ捨て、Dホイールをスタートさせた。

「ゆま、恵…待ってって。今、僕が助けるから！」

僕はそう決意を込めて呟くと、Dホイールを加速させた。

S i d e o u t

S i d e ? ?

「…」

今日も憂鬱な時間が来た。

誰かを傷つけるためにこうやって街を徘徊する…ボクとしてはとてつもなく憂鬱な時間だ。

でも…やるしかない。ボクにはそれ以外の道は存在しない。

気持ちを切り替え、僕は一枚のカードを掲げた。

途端に、重苦しい気配が辺りを包む。

ボクはいつも通り、貰ったカードで『人払い』を済ませると今日の獲物となる人間が近くにいないか、デュエルレーダーの電源を入れた。

すると、妙な反応があった。

人払いを済ませたはずのボクのところに、真っ直ぐに向かってくる一つの反応。

このままじゃすぐに接触しちゃう!?

ボクは慌てて、変装用のローブとフードを被り、変声器をセットした。

するとそれを見計らったかのようなギリギリのタイミングで、やってきたDホイールがボクの目の前30メートル辺りのところで停車

した。
異質な雰囲気があるだろうこの場で、何一つ物怖じしない様子のそのデュエリストがヘルメットを脱ぐ。

「不動遊輝……」

思わず口をつく名前。

そこにいたのはデュエルアカデミアでも最強に位置する、そしてパ
アの敵、英雄・不動遊星の息子である不動遊輝だ。

学園最強ランクのデュエリストは、静かな怒りの籠った瞳でボクの
前に降り立った。

S i d e o u t

S i d e 遊輝

「ピンゴ」

僕は辺りを見渡し、ヘルメットを脱ぎながら呟く。

重苦しい異様な雰囲気的空間に、見るからに怪しいローブの人物…
間違い無い、こいつが『ライファイター』だ。

小柄な人影だ。身長はおそらくゆまや恵と同じくらい。

『お前は…不動遊輝？』

「光荣だね、名前を知ってもらっていて」

性別も年齢も分からない機械を通した声に、僕は肩をすくめながら言葉を返す。

「確認だけど…あなたが『ライフイーター』で間違い無いか？」

『その名で私を呼ぶということは、私がどんなものなのは知っているようだな』

そう言つて『ライフイーター』はデュエルディスクを構えるが、僕はそれを手で制した。

「その前に質問がいくつかある。この辺り一帯でデュエルアカデミアの生徒を倒して、昏睡状態にしていたのはあなたか？」

『その通りだ。敗者の魂はカードへと封印される。』

『このようにな』

そう言つて幾枚かのカードを見せる。

すべて人名のカードのようだが、僕はその中にゆまと恵の名前があることに気付いた。

「…そのカードがあれば、あなたに負けた人は目覚めるんですね？」

『その様な事を気にする必要はない。何故ならお前はここで私に敗れ、お前の魂も封印されるからだ。』

「さあ、デュエルだ！」

「……いいでしょう、そのデュエルを受ける！
でも、条件がある。これは魂を賭ける、一種のアンティールだ。
僕が賭ける以上、そちらにもアンティを出してもらおう。
僕が欲しいのは、宮田ゆまとレイン＝恵の魂を封印したというカードだ！」

僕の提案に、ライフイーターは鼻で笑った。

『お前の賭けるものは1つなのに、私には2つのものを賭けると言うのか？』

「……安心して欲しい。僕も自分の魂の他にもう一つ……自分のデッキを賭けよう」

『何い！？』

僕の提案に、『ライフイーター』は驚いたように声を上げた。

「僕のデッキは、デュエリストとしての僕の魂の結晶だ。」

僕はこの2つを賭ける。だからそちらも2つを賭けてもらいたい」

『……………』

僕の言葉に『ライフイーター』が押し黙る。

その反応から僕は自分の考えが正しかったことを悟った。

(こいつは……『デュエリスト』なんだ)

西部地区の『ライフイーター』は今まで、倒れた相手の魂とも言えるデッキに手を付けることは決してしなかったようだ。

そのことから、今の行動はどうあれデュエリストとしての誇りを持ち合わせている人物だと予想が着いていた。

だからこそ、人によつては一笑に伏すだろう僕の提案でも受け入れる可能性があるかと僕は読んでいたのだ。

『…いいだろう。そのアンティを受けよう。』

お前は、人としての魂とデュエリストとしての魂を賭ける。

私は宮田ゆまとレイン…恵の魂の封印のカードを賭けよう。』

「提案の受け入れ、感謝するよ。

では、アンティの提示を。

僕はこの魂と、このデッキを！」

『私はそちらの要求通り、宮田ゆまとレイン…恵の魂の封印のカードを…』

そう言つて『ライフイーター』が僕に見せたカードは、二人の顔と名前の刻印されたカード。

間違い無い、2人の魂はここにある。

この勝負…負けられない！！

「…デュエル！！」

遊輝 LP4000

ライフイーター LP4000

『先攻はもらう。ドロー。モンスターを裏守備表示で召喚。カードを2枚伏せてターンエンドだ』

「僕のターン、ドロー！」

…僕は手札から魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動。

手札からモンスター1体を墓地へ送って、手札またはデッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する。

手札の《レベル・ステイラー》を墓地に送り、デッキから《グロリアップ・バルブ》を守備表示で特殊召喚」

…相手の手は分からないが、受け身になっても仕方ない。ここは仕掛ける。

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚。墓地の《レベル・ステイラー》を特殊召喚。

レベル1の《レベル・ステイラー》に、レベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

1 + 3 = 4

「深遠の闇が、全てを包む黒となる！ 光さす道となれ！
シンクロ召喚、《漆黒のズムウォルト》！！！」

《漆黒のズムウォルト》 星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2000 / 守1000

僕の隣に黒い外套を着た悪魔が降り立つ。

今ならレベル5のシンクロも出来るが、僕はズムウォルトで攻めることにした。

攻撃力としては2000は頼り無いが戦闘破壊耐性を持つズムウォルトなら、場持ちもいいだろう。

それに、《グローアップ・バルブ》は壁として残しておけばいい。

「バトル！ 《漆黒のズムウォルト》で裏守備モンスターに攻撃！
ダーク・ドラッグ・ダウン！」

『トラップ発動、《ドレインシールド》。その攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する』

ライフリーダー

LP4000 6000

やっぱり伏せカードで防いできたか…。

「僕は1枚カードを伏せてターンエンドだ」

『私のターン、ドロー！』

さて…ここからが本番だ。
相手は場にモンスターを残した状態でターンがまわってきている。
シンクロ召喚もアドバンス召喚も思いのままだ。
ここから…相手のデッキの本来の動きが分かるはず。

『裏守備モンスターを表側攻撃表示に変更。

このカードは…《ディストラクター》だ』

《ディストラクター》 星4/地属性/サイキック族/攻1600
/守 400

「な！？ サイキック族！？」

サイキック族はシンクロ召喚に相性のいいモンスターが多い。総じてシンクロ召喚を得意とする種族だと言えるだろう。
ならば、このターンで少なくとも1体はシンクロモンスターが出てくると見て間違いない。

『ライフを1000払い、《ディストラクター》の効果発動。

相手フィールド上にセットされた魔法または罫カード1枚を破壊する。

その伏せカードを破壊だ』

「《次元幽閉》が…」

ライフリーダー

LP6000 5000

『そして《ディストラクター》をリリース、《マックス・テレポーター》をアドバンス召喚する』

《マックス・テレポーター》 星6 / 光属性 / サイキック族 / 攻2
100 / 守1200

『《マックス・テレポーター》の効果発動、ライフを2000支払
いデッキから《サイコ・コマンダー》と《寡黙なるサイコプリース
ト》を守備表示で特殊召喚』

《サイコ・コマンダー》 星3 / 地属性 / サイキック族 / 攻140
0 / 守 800

《寡黙なるサイコプリースト》 星3 / 地属性 / サイキック族 / 攻
0 / 守2100

ライフイーター

LP5000 3000

チューナーを含めたモンスターが並んだ。
仕掛けてくるか？

『レベル6《マックス・テレポーター》に、レベル3《サイコ・コマンダー》をチューニング！

レベル9、演算終了。 パーソナルリアリティ、構築。

すべてを貫き、限界を超えたその先へたどり着く魔弾をこの手に！
シンクロ召喚！ 《ハイパーサイコガンナー》！！』

《ハイパーサイコガンナー》 星9/地属性/サイキック族/攻3
000/守2500

『さらにトラップを発動、《サイコ・トリガー》。

自分のライフポイントが相手より下の場合に発動する事ができる。
自分の墓地に存在するサイキック族モンスター2体をゲームから除外し、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

私は墓地の《サイコ・コマンダー》と《ディストラクター》を除外し2枚ドロー！』

大型シンクロモンスターの召喚と、手札補充を許してしまった。
これはヤバい！？

『魔法カード、《おろかな埋葬》を発動。デッキから《サイ・ガール》を墓地に送る。

そして《寡黙なるサイコプリースト》の効果発動。手札の《強化人類サイコ》を墓地に送り、《サイ・ガール》を除外する。

そして魔法カード、《緊急テレポート》を発動。デッキから《クレボンス》を特殊召喚。

レベル3《寡黙なるサイコプリースト》に、レベル2《クレボンス》をチューニング！

レベル5、演算終了。 パーソナルリアリティ、構築。
超能力の果て、魔法を越える幻想をここに！
シンクロ召喚！ 《マジカル・アンドロイド》！！！」

《マジカル・アンドロイド》 星5 / 光属性 / サイキック族 / 攻2
400 / 守1700

「さらに《寡黙なるサイコプリースト》が墓地に送られたことで除外された《サイ・ガール》を守備表示で特殊召喚。

《サイ・ガール》の効果発動、ゲームから除外されているこのカードが特殊召喚に成功した時、自分のデッキの一番上のカードを裏側表示でゲームから除外する」

《サイ・ガール》 星2 / 地属性 / サイキック族 / 攻 500 / 守
300

「バトルだ。 《ハイパーサイコガンナー》で《グローアップ・バルブ》に攻撃！

《ハイパーサイコガンナー》は貫通能力を持っている！」

「何!?!」

「受ける！ サイキックレールガン 超能力射出砲！！！」

《ハイパーサイコガンナー》が放つ音速を超える弾丸が、僕の《グローアップ・バルブ》を貫く。

遊輝

LP4000 1100

その瞬間、ソリッドヴィジョンではない強い衝撃が僕の身体を貫いた。

「ぐわあ!？」

その衝撃で僕は膝をつく。

「こ、これは…まさか『闇のデュエル』!？」

父さんたちから聞いたことがある。デュエルでの攻撃を実体化し本当にダメージを与える、ヘルデュエルなどは比較にならないくらい危険なデュエルだ。

覚悟はしていたけど、これほど危険な相手とは。

『《ハイパーサイコガンナー》の効果発動。 守備表示モンスターを攻撃したダメージステップ終了時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ自分のライフポイントを回復する』

ライフリーダー

LP3000 5900

『続けて《マジカル・アンドロイド》で《漆黒のズムウォルト》を

攻撃。

《漆黒のズムウォルト》は破壊できないが、ダメージは受けてもらう。

サイコマジック
『超力魔導！』

「くう！？」

遊輝

LP 1100 700

強力な衝撃で僕は弾き飛ばされ、僕は地面を転がった。

『私はカードを1枚伏せてターンエンド。』

エンドフェイズに《マジカル・アンドロイド》の効果発動、自分フィールド上に表側表示で存在するサイキック族モンスターの数×600ライフポイント回復する。

現在、私の場のサイキック族モンスターは3体、よって1800ポイントライフを回復する。』

ライフリーダー

LP 5900 7700

「くう…」

地面に転がる僕を見下ろし、『ライフリーダー』が言葉を投げかける。

『このライフ差だ。
もう無駄な抵抗はやめてサレンダーしろ。私も痛めつける趣味は無い』

その変声器越しの言葉は、何故か僕に懇願しているように聞こえた。

「ふ、ふふ…案外、優しいんだね」

僕は何故か笑いながら、ゆっくりと身体を起こした。

「でも、僕はデュエリスト。デュエリストに諦めはない。

それに、生憎と僕は2人を目覚めさせないといけない。

今までも、これからも同じ時を生きるために。

だから…僕は負けられないんだ！」

『…いいだろう。ならば私もデュエリストとして全力を持ってお前を倒す』

僕は痛みに顔をしかめながらゆっくりと立ち上がると、カードへと手を伸ばす。

手札は残り2枚。場は《漆黒のズムウォルト》のみ。

ここで巻き返すことが出来ないと、敗北は必至だ。

カードたちよ、僕に力を！

「僕のターン、ドロー！」

そして僕の引いたカードは…。

「魔法発動、《死者蘇生》！」

墓地の《ジャンク・シンクロン》を特殊召喚！
レベル4《漆黒のズムウォルト》に、レベル3《ジャンク・シン
クロン》をチューニング！」

4 + 3 = 7

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！シンクロ
召喚！」

現れよ、《ブラック・ローズ・ドラゴン》！」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》 星7/炎属性/ドラゴン族/攻
2400/守1800

「これが噂に聞くシグナーの龍か…！」

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動！」

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在す
るカードを全て破壊する事ができる。

ブラック・ローズ・ガイル！」

「くう…！」

吹き荒れる黒い薔薇の花弁が、周囲の全てを破壊し、砕く。

「一撃で私の場が壊滅とは…だがこの瞬間、《サイ・ガール》の効
果発動。」

《サイ・ガール》がフィールド上から墓地へ送られた時、このカードの効果で除外した自分のカードを手札に加える」

「僕は《ダーク・バースト》を発動。

この効果で墓地の《ジャンク・シンクロン》を手札に戻す。

《ジャンク・シンクロン》を通常召喚し効果発動。墓地の《グロリアアップ・バルブ》を特殊召喚。

同時に、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウオリアー》を手札から特殊召喚！

レベル2の《ドッペル・ウオリアー》にレベル3《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

2 + 3 = 5

「集いし英知が、未来へ続く懸け橋となる！ 光さす道となれ！

シンクロ召喚、《TGハイパー・ライブラリアン》！！」

《TGハイパー・ライブラリアン》 星5 / 闇属性 / 魔法使い族 /
攻2400 / 守1800

「《ドッペル・ウオリアー》の効果発動。

《ドッペル・ウオリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドッペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる」

場に2体のドッペル・トークンが現れた。

ドッペル・トークン 戦士族・闇・星1・攻/守400

「バトルだ。」

ドッペル・トークン2体で攻撃！」

ライフイーター

LP7700 7300 6900

「さらに《TGハイパー・ライブラリアン》で攻撃！

英知の光、ライブラリーライト！」

「ぐう！？」

ライフイーター

LP6900 4500

「バトルフェイズを終了させ、メイフフェイズ2に移る。

レベル1ドッペル・トークンにレベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング」

1 + 1 = 2

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！
シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》！」

《フォーミュラ・シンクロン》 星2 / 光属性 / 機械族 / 攻 20
0 / 守 1500

「《フォーミュラ・シンクロン》を守備表示で召還。
《TGハイパー・ライブラリアン》と《フォーミュラ・シンクロン》の効果によってカードを2枚ドローク！」

ん？

今引いたこのカード…前にジャックおじさんから貰ったカードだ。
これは…使えるかもしれない！

「レベル5 《TGハイパー・ライブラリアン》とレベル1ドッペル・
トークンに、レベル2 《フォーミュラ・シンクロン》をチューニング！」

来い、僕のエースよ！！

5 + 1 + 2 = 8

「集いし鋼が、新たな命となって動き出す！ 光さす道となれ！！
シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8/地属性/ドラゴン族/攻280
0/守2000

「僕はさらに魔法カード《貪欲な壺》発動。

墓地の《ジャンク・シンクロン》、《漆黒のズムウォルト》、《ブラック・ローズ・ドラゴン》、《TGハイパー・ライブリアン》、《フォーミュラ・シンクロン》をデッキに戻し、カードを2枚ドロー。

カードを2枚伏せてターンエンド」

今伏せたカードと場の僕のエース、《スクラップ・ドラゴン》。

これが僕の全力だ。

来い、『ライフイーター』！

『私のターン、ドロー！ く、くく…』

「？」

『お前は素晴らしいデュエリストだ。

だからお前に見せてやろう、私のエースモンスターを！！』

エースモンスター？ さっきの《ハイパーサイコガンナー》じゃなかったのか。

『魔法カード発動、《ミラクルシンクロフュージョン》！！

墓地の《マジカル・アンドロイド》と《サイ・ガール》を除外し、融合召喚！

《アルティメットサイキッカー》！！！

《アルティメットサイキッカー》 星10 / 光属性 / サイキック族
/ 攻2900 / 守1700

現れたのは蛇腹の巨大な怪物だ。

凄まじい威圧感で僕を見下ろすその姿は、まさにサイキック族の究極というのにふさわしい。

『《アルティメットサイキッカー》はカードの効果では破壊されない。』

お前の伏せているものが、ミラーフォースであろうと意味を成さない。

さらに貫通能力を持ち、戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、

破壊したモンスターの攻撃力だけ自分のライフポイントを回復する』

究極の名前に恥じない強力なモンスターだ

『私はお前に次のターンを与えるつもりはない。』

手札から永続魔法、《フューチャー・グロウ》発動！

自分の墓地に存在するサイキック族モンスター1体をゲームから除外し、自分フィールド上に表側表示で存在する全てのサイキック族モンスターの攻撃力はこのカードを発動するために除外したサイキック族モンスターのレベル×200ポイントアップする。

私はレベル9の《ハイパーサイコガンナー》を除外、よって全てのサイキック族モンスターの攻撃力は1800ポイントアップする

！』

《アルティメットサイキッカー》 攻撃力2900 4700

「攻撃力が4000を超えた!？」

『これで終わりだ！

バトル！ 《アルティメットサイキッカー》で《スクラップ・ドラゴン》を攻撃！

アルティメット・サイコウェーブ!!』

《アルティメットサイキッカー》が手の中で黒い光弾を作りだし、それを振りかぶる。

これが通れば僕の負けだ。

「させない！ 速攻魔法発動、《月の書》!!!

《アルティメットサイキッカー》を裏守備表示にする!!」

『くっ、防がれたか…。

バトルフェイズを終了、メインフェイズ2に移り、私は手札から《サイコ・フィール・ゾーン》を発動。

除外された《マジカル・アンドロイド》と《サイ・ガール》をデッキに戻し、そのレベルの合計と同じレベルのサイキック族のシンクロモンスター1体をエクストラデッキから表側守備表示で特殊召喚する。

来い、《サイコ・ヘルストランサー》』

《サイコ・ヘルストランサー》 星7/地属性/サイキック族/攻
2400/守2000

『《サイコ・ヘルストランサー》の効果発動。
墓地の《マックス・テレポーター》を除外し、1200ライフポ
イント回復する』

ライフイーター

LP4500 5700

『私はこれでターンエンドだ』

壁モンスターにライフ回復…このままライフ差を引き離されたら、
削りきる前に僕のライフが持つて行かれる。
次で…決める！

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードは…。

「これで終わりだ！」

魔法カード《調律》を発動。デッキから《ジャンク・シンクロン》
《を手札に加え、デッキをシャッフル、その後、自分のデッキの上
からカードを1枚墓地へ送る。

《ジャンク・シンクロン》を通常召喚、その効果によって《ドッ
ペル・ウォリアー》を墓地から特殊召喚する。

レベル2の《ドッペル・ウォリアー》にレベル3《ジャンク・シ
ンクロン》をチューニング！」

2 + 3 = 5

「集いし英知が、未来へ続く懸け橋となる！ 光さす道となれ！
シンクロ召喚、《TGハイパー・ライブラリアン》！！」

《TGハイパー・ライブラリアン》 星5 / 闇属性 / 魔法使い族 /
攻2400 / 守1800

「《ドツペル・ウォリアー》の効果発動。

《ドツペル・ウォリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドツペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

さらに自身の効果で、《グローアップ・バルブ》を特殊召喚！

レベル1ドツペル・トークンにレベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング」

1 + 1 = 2

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！
シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》！」

《フォーミュラ・シンクロン》 星2 / 光属性 / 機械族 / 攻 20
0 / 守 1500

「《フォーミュラ・シンクロン》を守備表示で召還。《TGハイパー・ライブラリアン》と《フォーミュラ・シンクロン》の効果によってカードを2枚ドロ。」

《TGハイパー・ライブラリアン》のレベルを1つ下げ、墓地から《レベル・ステイラー》を特殊召喚」

《TGハイパー・ライブラリアン》 星5 星4

《レベル・ステイラー》 星1 / 闇属性 / 昆虫族 / 攻 600 /
守 0

「レベル1ドッペル・トークンとレベル1《レベル・ステイラー》に、レベル2の《フォーミュラ・シンクロン》をチューニング！
来い、《アームズ・エイド》！！」

1 + 3 = 4

《アームズ・エイド》 星4 / 光属性 / 機械族 / 攻 1800 / 守 1
200

「《TGハイパー・ライブラリアン》の効果でカードを1枚ドロ。
そして《アームズ・エイド》効果発動、装備カード扱いとしてモ

ンスターに装備、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップ。

《アームズ・エイド》を《スクラップ・ドラゴン》に装備!!」

《スクラップ・ドラゴン》 攻撃力2800 3800

鋼鉄の義手が、《スクラップ・ドラゴン》へと装着された。

「そして《スクラップ・ドラゴン》効果発動!

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる!

この効果で僕は《TGハイパー・ライブラリアン》と《サイコ・ヘルストランサー》を破壊する!

ダストブレイズ!」

くず鉄混じりのブレスが《TGハイパー・ライブラリアン》と《サイコ・ヘルストランサー》を打ち砕いた。

そんな僕の行動を見て、『ライファイター』が首を傾げる。

『何故、《サイコ・ヘルストランサー》を破壊するのに《TGハイパー・ライブラリアン》を犠牲にした?』

確かに《スクラップ・ドラゴン》のレベルを下げ《レベル・ステイラー》を呼びだし、《レベル・ステイラー》と《サイコ・ヘルストランサー》を破壊すれば、《TGハイパー・ライブラリアン》で裏守備表示の《アルティメットサイキッカー》を破壊し、強化した《スクラップ・ドラゴン》のダイレクトアタックが決まる。

普通に見れば、そっちの方がいいが…それでは『このターンで決ま

らない』！

このターンで、僕は勝負を決めるのだ！

「バトル！ 《スクラップ・ドラゴン》で裏守備表示の《アルティメットサイキッカー》に攻撃！

パワー・ギア・バーナー！！」

《スクラップ・ドラゴン》の構えた義手が赤く火花を散らすと、そこから赤い熱線が放射された。

そのあまりの熱量に《アルティメットサイキッカー》が溶けていく。

「《アームズ・エイド》の効果発動！

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

ライフイーター

LP5700 2800

「ぐっ！？ だがまだ私のライフは残った。次のターンでお前のライフを…」

「何を勘違いしてるんですか。僕のバトルフェイズを終了していません！」

「何を言っている。お前のモンスターはすべて攻撃した。

これ以上の攻撃は出来るはずが…」

僕は伏せカードに…ジャックおじさんから貰った決着のカードに手を伸ばした。

「今、裏守備表示の《アルティメットサイキッカー》が破壊され、なおかつレベル8の《スクラップ・ドラゴン》が存在することで発動条件は整った。

これが…僕の勝利の鍵だ！！

トラップ発動、《破壊神の系譜》！

相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを破壊したターン、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル8のモンスター1体を選択して発動する。

このターン、選択したモンスターは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる！

僕は《スクラップ・ドラゴン》を選択！ 《スクラップ・ドラゴン》はもう一度バトルを行える！！」

「なん…だと…？」

そう、さっき僕が《スクラップ・ドラゴン》のレベルを下げ《レベル・ステイラー》を呼びださなかった理由はこれだ。

レベルを下げればこのカードの発動条件が揃わなくなってしまうのだ。

「これで終わりだ！

《スクラップ・ドラゴン》の再攻撃、パワー・ギア・バーナー！！」

「う、うわあああああ！！」

《スクラップ・ドラゴン》の放つ熱線が、真っ直ぐに「ライファイ

ター』へと伸びて行く。
その圧倒的な熱線が、遂に『ライフイーター』のライフを喰い尽くした。

ライフイーター

LP28000

『不動遊輝、まさかここまでのデュエリストとは…』

『ライフイーター』がぐりと膝をつき、2枚のカードが僕の足元に舞い降りてきた。

その2枚のカードは、ゆまと恵の魂を封印したというカードだ。
その2枚を拾い上げ確認すると、僕は丁寧にデッキホルダーの中に入します。

「約束通り、2人の魂を封印したというカードはもらったよ。

…悪いけど、このまま来てもらうよ。

他の人たちもこのままにはできないし、何より今起きている事件の全貌を話してもらう！」

『くう！？』

逃走しようと、『ライフイーター』が身を起こす。

でも遅い！

「逃がすか！」

『！？』

僕は『ライファイター』にぶつかると同時に飛び掛かった。その勢いでごろごろと、僕と『ライファイター』が地面を転がる。そして、僕は立ち上がろうと手に力を込めた。

ムニユ

「……………は？」

地面とは明らかに違う、とても柔らかい感触が僕の手に伝わる。そして一拍置いて、僕の鼓膜を大音響が貫いた。

「きゃあああああ！！！！？」

声と同時に渾身の力で押し出され、僕は驚きで思わず拘束を解いてしまっていた。

『ライファイター』も僕から距離を離し、胸を隠すように素早く立ち上がる。

今の感触、そして今の声と反応は…。

「女の子？」

「！？ 変声器が！！！」

僕の呟きに、『ライフイーター』もはつとしたような声を上げる。間違いない、この『ライフイーター』は女の子…しかも声の調子から、恐らく僕と変わらないくらいの歳の女の子だ。

「くう!?!」

『ライフイーター』の少女は、デュエルディスクを素早く構え、1枚のカードを起動させる。

「トランプ発動、《強制脱出装置》！」

その言葉と共に、『ライフイーター』の少女の姿が掻き消えた。

「カードの効果を具現化したのか…?」

僕は呆然と、『ライフイーター』の少女が消えた場所を見渡す。

「あれ? これは…」

そして、僕は地面に落ちているものに気付いた。

それは僕にとってはひどく見慣れた、でも本来こんなところにあるはずのないもの。

「…なんで『コレ』がこんなところに」

僕は驚きながらも、指紋を付けないようにハンカチで『ソレ』を拾い上げると、ビニールに包んでポケットに仕舞った。

「まあいいや、それより今は2人のところに行かないと!」

僕はDホイールに乗り込むと、エンジンをスタートさせる。
行き先は当然、2人のいる病院だ。
僕は一気にアクセルを入れて病院に急ぐのだった。

S i d e o u t

S i d e ? ?

ドカツ！

「あう！？」

パパに殴られて、ボクは床を転がる。

パパが怒るのは当然、ボクが負けて魂を封印したカードを2枚も取られたからだ。

パパの怒りを、ボクは黙って受け入れる。
でも…。

「お父様、もうそのぐらいに」

そう言って倒れたボクを、姉さんがゆっくりと起こしてくれた。

「この子が失ったのはたった2枚、そのくらい私と兄さんで補填すればいいだけの話でしょう?」

姉さんの言葉に、パパも押し黙る。
すると…。

「それならもう終わった…」

暗がりから現れる人影。

「兄さん…」

「今、3人ほど狩ってきた。

これで何の問題もないだろう、父さん?」

兄さんの言葉に、パパは黙って部屋を出て行った。
それを見て、姉さんはふうっと息をつく。

「大丈夫なの?」

顔は女の命だというのに、お父様ったら…」

「いいよ、負けて帰ったボクが悪いんだし…」

「そうは言うがな、顔を殴るのはさすがにやりすぎだろう」

兄さんは苦々しく、姉さんは呆れたように呟く。

「それにしても…お前が負けるなんて、よほど強力なデュエリスト
だったんだろうな。」

「一体どこの誰だ、その相手は？」

「うん…あの不動遊星の息子、不動遊輝だった…」

「へえ…あの坊や、やるとは聞いていたけど、それほどのデュエリストなのね。」

「ふふ…面白そう。今度遊んでみたいわね」

「…今日は何も考えずゆっくり休め」

妖艶に笑う姉さんを連れて、兄さんが部屋から出て行く。

一人になった部屋で、ボクはポツリと呟いた。

「不動遊輝…」

英雄・不動遊星の息子。そしてボクを倒したデュエリスト。

噂にたがわぬデュエルの腕と、そして真っ直ぐなひたむきな瞳。

「不動遊輝…」

もう一度、ゆっくりとその名前を呟くと不思議な気持ちかわき上がる。

ボクは不動遊輝に触られた胸を押さえながら、その不思議な気持ち何なのか考えるけど、結局その正体は分からなかった…。

S i d e o u t

暗くなった病院内を僕は音をたてないように早足で歩いていた。思わず走りだしそうになる足を、必死で抑える。走ったりしたら一発でバレて追い出されてしまう。

面会時間はすでに終わっているから、僕がここにいるのは内緒。ありていに言えば不法侵入だ。

とてもじゃないけど、翌日の面会時間まで待つなんてできない。

そして、ゆっくりと僕は2人の眠る病室のドアを開けた。

「ゆま…恵…」

そこには昨日と変わらず、眠り続ける2人の姿がある。

僕はデッキホルダーから、2人の魂が封印されたというカードを取り出した。

「お願いだ。 2人とも目を覚まして…」

僕は祈る気持ちで呟く。

すると、手の中のカードがゆっくりと光りだし、光となったカードが2人へと吸い込まれるように消えていく。

「これは…」

不思議な光景に僕は息をのんだ。

そして、すべての光がゆまと恵へと吸い込まれていく。

「…え？」

だが、それだけだった。

光が消えても、2人はまったく変わらず眠り続けている。

「そんな…」

魂が戻ったんじゃないのか？

まさか偽物を掴まされた？ それともまだ何か必要なものがあるのか？

頭の中をぐるぐると色々な思考が駆け巡るが、2人が目覚めないと
いう現実は何の前にも非情に突きつけられ続ける。

「ゆま…恵い…!!」

僕は2人のベッドの間に座り込み、ゆまの左手と恵の右手を取る。
温かいが僕を握り返すことない手に、僕は祈るように頭をたれるの
だった…。

…: T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまと！」　ブンッブンッ

恵「恵の…」　シャッシャッ

ゆま・恵「今回の最強カード」　ブンッブンッ　シャッシャッ

ゆま「大変です！ユウくんがライフイーターを倒してくれたのに私たち目覚めません！」　ブンッブンッ

恵「大丈夫、ユウはやるべきことをやってくれた…」　シャッシャッ

ゆま「？　どういうことです、メグちゃん？」　ブンッブンッ

恵「…私たちの目覚めるための条件はいくつかあるらしい。その中で、現実世界であることをユウはやってくれた…」　シャッシャッ

ゆま「ということとは…後は私たち次第なんですか？」　ブンッブンッ

恵「うん。　でもとりあえずは今回のコーナーを進める」　シャッシャッ

ゆま「今回のカードはこれですう！」　ブンッブンッ

《アルティメットサイキックカー》

融合・効果モンスター

星10 / 光属性 / サイキック族 / 攻2900 / 守1700

サイキック族シンクロモンスター + サイキック族モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事

ができる。

このカードはカードの効果では破壊されない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、

破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。

ゆま「私たちが煮え湯を飲まされた、『ライフイーター』さんのエースモンスターですう！」　ブンッブンッ

恵「サイキックデッキなら《ミラクルシンクロフュージョン》を差し込むだけで簡単に出てくるお手軽さ…」。

その上、《メンタルスフィア・デーモン》の回復能力に《ハイパーサイコガンナー》の貫通能力、さらに破壊耐性といったせりつくせりなモンスター…」　シャッシャッ

ゆま「破壊耐性は厄介です。アブソルートZeroで除去できなかったですう…」　ブンッブンッ

恵「強力モンスターにありがちな、特殊召喚制限が無いこともポイント。」

《カオス・ソーサラー》で除外したのに、《ブレインハザード》で戻ってこられた時には泣けた…」　シャッシャッ

ゆま「今回はここまでです！　次回はついに、私とメグちゃんタッグが夢からの脱出に挑みます！」　ブンッブンッ

恵「…絶対、負けられない」 シャツシャツ

ゆま「では、また次回ですう！」 ブンツブンツ

恵「…収録、終わり？」 シャツシャツ

ゆま「うん、終わりですう！」 ブンツブンツ

恵「…じゃ、行こっか？」 シャツシャツ

ゆま「うん！」 ブンツブンツ

恵「…それにしても、ゆまは体力ある。

収録中、ずっとバットで素振りしてるなんて…」

ゆま「あはは、メグちゃんもずっとククリナイフ研いでたじゃないですか」

恵「…どうしても必要だから…中に誰もいないか確認するには…！」

ゆま「私ものです。このエスカリボルグで愛の限りを伝えてあげる練習ですう！」

恵「…私たちヒロインの眠っている間に、ユウと羨ましいラッキースケベなイベント…」

ゆま「おまけに何かフラグまで立ってるです。これは、SATSUGAI以外あり得ないです！」

恵「それじゃ…」

ゆま「そろそろ…」

ゆま・恵「あのライフイーターの女を血祭りに!!」

ゆま・恵「あはははははは!!」

スタッフ「ちょ、二人ともまだカメラ回ってるから！ヤバいところ余すところなく放送しちゃってるから!!」

そのスタッフ！あの『ライフイーター』の子避難させて、早く！

早く逃げてえ!!」

第13話 ライファイター（後書き）

ラッキースケベでヒロイン候補を増やすフラグメイカー遊輝。

今回はヒロインたちの奮戦です。お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2883y/>

遊戯王5D's After ~子蟹冒険記~

2012年1月1日19時46分発行